
死んでいく人たちへ

酒主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んでいく人たちへ

【Nコード】

N5126D

【作者名】

酒主

【あらすじ】

安田総合病院内科4病棟。別名「死に病棟」と呼ばれるこの病棟で働く、新人ナース、渡辺ミサに映る現実とは。

第1話 死に病棟（前書き）

酒主のブログ「小説を書きたい」を作りました。

執筆にあたってのこぼれ話や余談、日々の苦悩？などを書いていきたいと思っています。

小説を書いている、他の先生方とも、交流できれば幸いです。

<http://blog.google.jp/susyu2008/>

第1話 死に病棟

安田総合病院 内科4病棟。

朝は深夜のナースからの引継ぎで始まる。

「401号室の白井さんですが、一昨日^{おとつい}から意識^{レイト}レベルが落ちて、呼びかけにも反応なし。3時頃から脈40代、血圧は測れません。

先生に連絡はとっておりますが、まだ到着してません。家族の方は、みな揃っています」

慣れた様子で申し送るのは福永真^{ふくながまこと}。10年目のベテランだ。ここで、日勤帯ナースの「はア~~~~っ」というため息。

「2日前から急に悪なつたもんなア、白井さん。挿管^{そうかん}すんの？」

「うん、NO-CPRなんで何もしいって。家族の人にも2日前に説明済みやし。あ~~~~深夜でだめかと思っただけど、もって良かった」

「高津先生はまだ来ないんですか？」

「来るわけないやん。NO-CPRでしょ。高津のことやでぎりぎりにしか来ないよきつと」

「言える……」

「あ~~~~忙しくなりそうやなア~~~~」

ざわつくミサたち日勤帯ナースを一蹴するように福永がさえぎった。

「はいはい。死に病棟なんだから、仕方ないでしょっ！」

福永は、記録を書き終え、カルテを棚にしまうと、ポンツとミサの肩を豪快にたたき、不敵な笑みを浮かべた。

「日勤さん、後よろしくね。お疲れ」

「え~~~~」。福永さん帰っちゃうの？

「当たり前やん。勤務終わったんやから。おればおるだけこき使われるやろ。ミサは、白井さんの受け持ちなんやからがんばってーな」
(白井さんの娘さん……。大丈夫かな。いつもそばにいて、お世話

してたから)

3台並ぶモニターはアラームの音が頻繁に鳴り響き、忙しく働いている。白井さんの、モニター上の脈はだんだん間隔がのび、経験の少ないミサであっても、危険な状態であることは察知できた。

波形を記録し、自分のバインダーにはさむ。

「おはようございます」

足取りも重く、401号室のドアを開ける。ナースステーションの横に位置するこの部屋は、重症患者の部屋になっている。親類一同が囲むなか、7、8人の間をかきわけ、白井さんを覗き込み、覗き込むミサをまた、覗き込むように人垣ができる。

軽くプレッシャーを感じながら、検温を続けた。意識はなく、ぐったりと横たわっているその姿は、トレードマークのニット帽をかぶっていないので、別人のようにみえる。何度も行われた、抗ガン剤投与で禿げ上がってしまった頭。その中に残った白く長い数本の髪が異様な感じを与えた。

白井 長子 68歳。血液疾患で入退院を繰り返していた。

陽気なおばあちゃん、入院するたびに「また、死に病棟か」、死にに来たわ」なんて冗談を言っていた。

「ミサちゃん」

声をかけたのは、白井さんの長女、和子である。介護休暇をとって、日中はずっと付き添っていた。献身的に寄り添う姿はとても印象的で、おばあちゃんが寝ているときは、そばでニット帽を編んだりして過ごしていた。

2日前から白井さんの意識が無くなり、ほとんど泊まりこみで番をしていた和子だったが、親類への連絡や対応に追われ、かなり疲れている様子がうかがえた。

親類が囲むなか、隅の方で座っていた彼女がミサに寄りボソツと発した。

「お母ちゃん、もうだめかな……」

「今回は厳しいかと」

いつもの口調とは違い、言葉を選んでそう答えた。よそいきの言葉がやけに白々しい気もした。

突然、白井さんの息子らしき人が口を開いた。

「和子！ 身内がそんな弱気でどうすんのや。まだ、望みがないわけじゃないやろ。あかんあかん。そんな弱気じゃあかん」

妹と目を合わすこともせず、背中ごしに会話を続けた。

「わしらが諦めたらどうすんのや。母ちゃん、しっかりせいよ！」

そしてミサに対しては

「苦しそうやから、何とかできへんのか。先生はまだ来ないのか！」と苛立ちをぶつけた。

しきりに白井さんの手を握ったり、頭をなでたりしている息子であつたが、何をされても、だらつと力の抜けた白井さんの体は、もう、魂が抜けてしまつたのではないかとミサは思った。

「兄ちゃん。母ちゃんは助からへんわ。ね、看護婦さん、もうね……」

ため息まじりの小さな声。すぎるような顔で、ミサに視線を放つた。

毎日付き添っていた彼女には、長い間かけて母の死に対しての受容ができていたが、兄の方は違った。

（無理もないか。前回お見舞いに来たのは3ヶ月も前なんだから）

「だめなんか？ 看護婦さん。もう、何も治療してくれへんのか？」

ミサは、すっかり部屋を出るタイミングを失つてしまっていた。

ガタンツ。入ってきたのは主治医の高津。病棟主任を務めるやり手の医者だ。何から何まで整った身なり。別段急ぐ様子もなくスマートに部屋に入る。そして、つかつかつと長女の和子をみつけて近寄る。

「朝早くから来てもらつてすみません。先日にもお話したんですが、状況はかなり厳しいです」

あらかた、今までの経過を話すと

「結論から言つて、挿管して、人口呼吸器につなぐということはい

ないつもりです」と綴った。整然としたその言葉は、まるで何かの台詞のように聞こえた。

今まで遠慮がちに座っていた親類もざわざわとざわめきたつ。

「何とかならんのかなあ。かわいそうになあ」

「この前、お見舞いに来た時は、元気に話してたしね。まさか、こんなに悪いとは思わなかったんだけど」

ヒソヒソ話す声を振り払うように、高津は部屋を出ようとしていた。

「挿管しないってどういうことですか？ 何もせずに見捨てるっちゃうことですか。むしろ、何も聞いてへんで」

その声は太く震え、ざわざわしていた親類も静まりかえった。しかし、高津は驚く様子も見せず、ふと振り返り、話を続けた。

「娘さんに、全部お話して了解を得てます」

「和子。何でそんな大事なこと、むしろに相談せんのや。母ちゃんこのまま死んでもええんか！」

「ご家族で話し合っていないんですか？」間髪いれず、高津が口をはさむ。

「今、挿管して人口呼吸器につないだとしても、苦しむ時間が長くなるだけです。抗ガン剤の投与も行ってきましたが、限界だと」

「ちよつと考えさせてくれ……」

高津の話をさえぎるように、息子の言葉が響いた。

部屋はしんと静まり、機械音だけがやたら耳についた。

「どうして、こんなことになったんや。こんなに悪いんだったら、早よ来るべきやった！」

今まで献身的に付き添っていた娘は、遠慮がちに親戚の輪から離れ、うつむいて座っている。挿管しないことを同意した彼女はまるで罪人のような表情を浮かべている。

今まで、黙っていた親類の1人が口を開いた

「高広は、母ちゃんっ子やったからな。つらいのもわかるが。長子もこんなに痩せてしまつて。これ以上苦しむのはかわいそうや！」

和子もよう面倒みた。もうええやないか、な」

「でも、何で教えてくれなかったんや。こんなに悪いんやったら、意識のあるうちに会いたかった」

すまなさそうにうつむいている和子を見て、ミサは言わずにいらなかった。

「意識がなくなる前までは、普通に話してたんです。病状は前々から悪かったんですけど、こんなに早く意識が無くなるなんて、私達も予想もしませんでした」

「でも……」諦めきれない様子で息子はミサの顔をみた。

緊張して紅潮した頬、泣き出しそうな顔でミサは言った。

「1ヶ月前くらいの夜中に、突然、白井さんが息が苦しいって訴えたことがあるんです。家族に連絡をとりますので頑張ってください！ と言った私に白井さんは言われました」

ミサはその時の光景を思い浮かべた。痩せて小さい体にニット帽。荒い息。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。息子は心配性だから。私に何かあるって言ったら、仕事でも何でも放って飛んでくるから性格だから。まだ、私は大丈夫！ って息切れしながら言うんです」

「もう、いいです」

「もう、いいです」

下を向いた息子はうなだれ、言葉に詰まりながら「もう、いいです」と繰り返した。

ポトポトと大粒の涙がつつたって、大きな肩が震えた。

結局、白井さんが亡くなったのはそれから3時間後。長い間、闘病を続けた彼女。

皆に囲まれ息を引き取った。

「いつも、ありがとな」と、しわしわの手で握手するのが白井さんの癖だった。

お見送りの時

「どうも、長いことお世話になり……」

娘の和子さんが深々とお辞儀した。乾いた冷たい廊下に涙がポタポタ落ちた。

白い布をすっぽりかぶった白井さんに乗せた車は、ゆっくりと動きだした。ミサと主治医の高津と師長は、車が走り去るまで頭を下げ見送った。

「もう行かれましたよ」

頭を下げ、礼を続けるミサに、師長が声をかけた。

顔をあげたミサの目は真っ赤になっていた。

（白井さんも逝ってしまったんだ）

後日、白井さんの娘の和子は、両手にドーナツをかかえて4病棟を訪れた。

「ちよつとミサちゃんに見せたいものがあつて」

ミサは、勤務の途中であつたが、師長の許しもあり、面会ルームへ案内した。座ったか座らないかのタイミングで、和子がいきなり話しを始めた。

「私ね、お母ちゃんの付き添いをしてる時、いつそのこと死んでくれたら……。って考えたことがあつたんです。母は昔っから、兄ばかり可愛がつてましたから。こんなに辛い思いをして付き添っているのに、ぐちばっかり言われて」

「えへへ、あの、白井さんがですか？」

「ええ」

そして、話を続けた。

「だから、なんで介護休暇までとって世話をしたのか自分でもわからないんです。きつと、母に認めてもらいたい。愛されたい。そんな風に心の奥ですっと思つてたんでしょうかね。

でも現実には、介護を続けても、母の態度が変わることはなかったんです。たまにかかってくる兄の電話は、あんなに嬉しそうにとるのにつて、悔しくて。母に当たられるたびに、いつそのこと、早く死んでくれって」

「とても、そんな風にはみえませんでした」

「母も私も外面がいいんですかね。ふふ」

そして、かばんの中から紙きれをとりだし、ミサの前に差し出した。

「読んでみて」

和子へ

いつもありがとう。

かんごふさん達には素直に言える言葉。

和子にはとうとう言えなかった。

私は根っからの強情っぱりやね。

和子の作った帽子、かんごふさんに人気やった。

むこうでも大事にするよ。

こんな、はげ頭じゃ格好悪いから

かんおけに入るときにはこの帽子かぶせてちょうだい。

ほんとうにありがとう。

「荷物を整理してたときに、床頭台の引き出しからでてきたんです」
ぶるぶると震えた字。筆圧がなく、読み取れるか読み取れないか
くらいの

その文字は、白井さんの体調が良くないのを物語っていた。

「いつだったかな、ミサちゃんに帽子のことを褒められて、照れていた母の姿を思い出しました。それにしても、いつ、書いたんでしょうね、母は……」

お互いに言葉に詰まり、そのまま深々とお辞儀をして別れた。

（いったい、私は何を看てきたんだろう）

陽気で温厚なおばあちゃんを演じてきた白井さん。彼女の辛く、

苦しい胸の内を感じることにすらできなかった。きっと、娘の和子さんにしか本音を言うことが出来なかったのだろう。

「何にもしてあげられなかったな」ふと、言葉になった。

「渡辺さん。405号室が呼んでますー！」

（死に病棟か…）

ミサは401号室の前で、一度立ち止まり会釈をし、そのまま405号室へ走って行った。

第1話 死に病棟（後書き）

CPRとはCardio-Pulmonary Resuscitationの略語で心肺蘇生法のことです。

NO-CPRは、CPRをしないということです。

第2話 なじめない自分

安田総合病院は一般病床数600床、診療科目は24科あり、地域の基幹病院として位置する。

研修医受け入れ病院でもあり、定期的に大学病院より研修医がやって来るシステムになっている。3ヶ月で各科をローテートするレジデントを、ここ安田病院ではローテートと呼んでいる。

「ちよつとさア。ローテートの林ったら、静脈留置針入れるのも時間かかって、拳句の果てには看護師さんお願いします！だってー。こつちも忙しいのにサーフロア位ちゃっちゃと入れてくれへんかなあ」

病室よりキレ気味で帰ってきた、恵綾子である。でっぷりした体に、きつくかったパーマ。真っ赤な口紅。

「別名 パンチ」

もちろん本人の前では口が裂けてもいえないが、いつの間にか4病棟のスタッフの中でついたあだ名である。

ナース道25年の彼女は、例えば医師であろうとも容赦なくたた切る。そのため、ここ4病棟では、誰もが恐れる人物なのである。

「そうそう。林って要領悪いよねー」

相づちを打つのは、角野亜里沙^{かくのあさ}。7年目の中堅で恵の取り巻きの1人である。容姿端麗なその姿にだまされる医師も少なくない。

ミサはこの2人がとても苦手なのだ。

「あゝ、渡辺さん！」

この2人から逃げるように、点滴を準備していたミサにパンチが喰らいついた。

「あんた、安達さんから薬、頼まれてたでしょ」

（あ、忘れてた…）

「すみません」

「何で、そんなに簡単なこと忘れるの？いい加減にしてくれる。い

つまでたつても薬が届かないからって、私が怒られたんだからねっ。
働いて、もうすぐ2年目だっというのに、なんでそんなに要領が悪いの！ほんとに林といい、あんたといい…事故がおきないのが不思議なくらい。さっさと安達さんところ行って謝ってきなさいっ」

一言余分なうえに、周囲に聞こえる様に攻め立てる姿に、その場に居合わせたスタッフは凍りついた。

「はい。気をつけます」

「さっさと謝りに行く」

「……」

（あー、また怒られたあ）

ミサは、ひきつった顔で、安達のところへ向かう。

（安達さんあんまり怒ったりする人じゃないのになあ。どうしよう）
いろんな思いをめぐらせながら、ドアをノックし部屋に入る。

「失礼します」

「はいはい、36度5分、めし10割」

てつきり、検温だと勘違いした安達はミサが話す間もなく答える。

「あ、いえ。検温じゃなくて」

「ん？」

「安達さん。すみませんでした」

「はー？」

「あの、薬のこと、頼まれてたのに」

ミサは顔を真っ赤にしながら頭を下げた。すると安達は、その人懐っこい目でミサの顔を覗き込んで言った。

「あーごめんごめん、また、パンチに怒られた？」

入院慣れした安達は、スタッフの内情までお見通しなのだ。

「いや。あんまり薬が届かないんで、詰所にとりに行ったらさー、いくら、入院が長いっていても、詰所の中まで入ってこられたら困る、個人情報があるからって、パンチに叱られてさー。あんまり腹がたつたもんだから、薬が届かないからわざわざ取りに来たのに、

その態度は何だ！　って言ってやった」

「本当にすみませんでした」

「いやいや、そしたらさ、誰に薬を頼んだのか？とか聞くもんだから、ついミサちゃんの名前を出してしまつて。本当に恐ろしいわ。あのおばちゃん。俺が院長だったら、すぐクビにしてやる！」

「俺も賛成！」

カーテンを開け、隣の川内も話に入ってきた。

「ミサちゃんみたいな可愛い看護婦さんをいじめるなんて、許さねー！俺、パンチから守ってあげるから。何なら付き合つ？ね？ね？」
半分おちよけた態度でミサに視線を向ける。

「あ、でも・・・」

ミサが言葉に困っていると、安達が助け舟を出した。

「川内！あんたにミサちゃんはもつたいないわ。鏡みて出直してこい！」

「ジャニーズ系の何が悪いんや〜」

「ひゃア〜よく言うわ。髪型だけやんかつ」

「うつせー、はげおやじ」

「何だと〜！お前もそのうちはげるつちゅうの！」

困惑するミサをよそに50代と20代の男2人がけんかを始める。

（なんか子供みたい…）

「こつちに顔出すなよ！」

安達が仕切りのカーテンを閉めると、川内が意地になってカーテンを開けようとして、お互いカーテンの引っ張りあいになった。

（あ〜〜〜〜〜！！！！危ない！！）

ミサが言葉に出す間もなく、カーテンのレールの留め金はずれ、川内がベッドの下へダイビングした。

「いてえ〜〜〜！」

「あははははは〜」

「……」

安達と川内は目をきよとんとさせた。いつも、おとなしく、あま

り感情を出さないミサが笑ったのだから。

きょんとした安達と川内を見て

「す、すいません」

いつもの、気を使いすぎるミサの表情が現れた。

「やだなア。ミサちゃん。せつかくいい顔して笑ったのに、すいません、だなんて」

「あ、すいません」

「あゝゝ！ また言っただー！」

あはははは。 みんなで笑った。

「あんまり遅くなると、パンチに怒られるから、早く戻りな！」

「はい。そうします」

案の定、ミサが詰所に戻ると角野亜里沙がかみついた。

「点滴の準備を放ったらかして、いつまで患者のとこ行ってるの？ 全部、私と恵さんでやつといたから。ほんとに、あんたみたいな人がいると、他に迷惑がかかるんだよね」

「あの、安達さんのところに謝りに……」

「そんなのばつぱつとすませちゃえばいいじゃない。どうせ、安達なんて、大した病気もないのに居座って」

ミサは角野のフランス人形のように大きくくりつとした瞳、艶のある小さい口元、陶器のようにピカピカひかった肌をボーっとみつめていた。

「何、ボーっとしてんのよ」

ふんつと気位の高い彼女は自分の言いたいことだけ言っ、恵の横に座り記録をはじめ。

ボソボソと嫌味な笑みを浮かべて話す2人に、他のスタッフも交わり話し出す。

（きつと、私。また、何か言われてるのかも）

他のスタッフの輪からはずれ、少し離れたところにある、小さい作業台を机にしてミサも記録をはじめ。

（角野さんみたいに何でも要領よく出きたらどんなにいいだろう。）

ミサは、自分の意見もはっきり言えない自分自身に嫌気がさしていた。

ミサの近くのドアが開いた。

「こんにちは。丸山製薬です。あ、どうも」

長身でイケメンを絵に描いたような男である。

「あゝ加藤さん、久しぶり」

男が詰所に入るか否かのタイミングで角野がすり寄る。

「あー。ありさちゃん。高津先生いる？」

「うん。今呼ぶわ」

連絡をとっている間、加藤のまわりに輪ができる。

「そっぴや、加藤さん。今度、歓迎会をしたいんだけど、どっかいとこある？」

恵が口を開いた。

「そっぴやなアー。富久屋とかどう？うまい酒もそろってるし」

「さすが、プロパーさんやね」

「やだなア。恵さん、プロパーは古いつて！今はMRエムアールっちゅうんです」

プロパーとは、製薬会社から医療機関に向いて、医薬情報の提供や宣伝を行う担当者のもので、昔そう呼んでいた。古いナースは今でもプロパーと呼んでいる。

MRエムアールと呼ばれる製薬会社の担当者は、医師が業務が終わるまで、待っていたりするので、自然とスタッフとも顔見知りになるのだ。

「ところで、歓迎会って、また移動があるんですか？」

加藤が情報収集をはじめ。

「ローテートの林先生のかわりに、外科から、1人研修に来るのよ」

「へー。いちいちローテートが来るたびに歓迎会なんてしてたら大変ですね」

「そうなんだけどね、うちの病棟、酒好きで騒ぐの好きな人が集まってるから、何かと口実つけて飲みたいってのが本音」

「へー。看護婦さんたち、お酒強いからなあ」

加藤が談笑していると、今まで高津に連絡をとっていた亜里沙が話しかける。

「加藤さん！ 先生ね、あと30分待つてって！」

「ありがとう。先生の30分は1時間だからなあ。今日も帰り遅いか…」

「ところでさ、今度みんなで飲みに行かない？加藤さんも、たまには仕事抜きで発散しようよ、ね。毎日、高津の相手なんかしてたら大変でしょ！」

「んー。で、他に誰が行く？」

「うん。4病棟のみんなに声かけとく」

「あんまり、派手にふれ回らないでくれよ。仕事上、ややこしくなるから」

加藤は亜里沙に耳打ちした。

「わかつてるって！」

亜里沙は嬉しそうに笑い、「連絡してね」と付け足した。

そんなやりとりの中、ドアに背を向け、ミサは一人記録していた誰とでも仲良く、交流の広い加藤や角野のような人物に憧れがあったが、どうせ、自分なんか…。と自分を卑下し話に入らないようにしていた。

「じゃあ、ロビーで待たせてもらいます」

加藤は詰所のスタッフに挨拶すると、ドアに手をかけ、いったん廊下に出かけた加藤だったが、忘れてた、という表情で、また入りなおした。

「あの、ボールペン、また持ってきたんでみんなで分けてください」
近くで背を向けていたミサに近寄り、ボールペンの束をそつと作業代のうえに置いた。

え？という表情を浮かべているミサに、加藤は「みんなで分けて！」と笑顔を見せた。まぶしかった。

「渡辺さんも飲み会に来るといいよ！」

と加藤は言ったが、角野から誘ってもらえないと分かっていたミ

サは、ハイともイイエとも返事せずうつむいた。

丸山製薬と書かれた、3色ボールペン。いろんな種類があった。
MRという名前がついても

営業は営業。どこの製薬会社も名前を売るのに必死なのだ。

ミサはみんながいる机にボールペンの束を持っていた。

「あの、加藤さんが、分けてくださいって」

「あー！私、このコアラがついてるやつがいい！」

「私これー。鉛筆もついてるじゃん」

ナースにとって、ボールペンは必需品。ペンの争奪戦がはじまり、結局、ミサの手元に残ったのは、何の変哲もない、普通の3色ボールペンだった。

丸山製薬と書かれたそのボールペンを、ミサは白衣の胸ポケットにさした。

第3話 一杯のお茶

夜勤は、経験の少ないナースにとつては、とてもプレッシャーのかかる勤務だ。日勤帯には平均5〜6人の患者を受け持つが、満床であれば、16人の患者を1人で看なければならぬ。

内科4病棟は48床あり、3チームに分かれて勤務している。夜勤の場合は各チームから1人ずつ、全員で3人となる。急変があった場合など、勤務中一度も座れなかったなんてよくある事だ。

夜勤には準夜勤、深夜勤と2種類あつて、準夜勤は16時〜翌1時まで、深夜勤は0時〜9時までである。仮眠など、とんでもない休憩がとれるかとれないかのギリギリの勤務なのである。

「何事ありませんように」ミサは、必ずそう願い勤務に臨み「あー良かった。今日は無事だった」と胸をなでおろして、くたくたに疲れながら家に帰っていくのだった。

老人の患者などは入院などの環境の変化で不穏な状態になることふおんもあり、点滴を引き抜いて、床中血まみれになったり、ベッドの上に立つて、転落したりだとか、思いもかけないハプニングが起こったりもする。死に病棟の夜は、さながらサスペンス劇場のようである。

そして、ハプニングが起こるのが大抵、夜中なのがミサは不思議でならない。

ミサは今日、準夜勤であつたが、いつもより少し緊張が解けていた。

（今日は福永さんと一緒に勤務だ！一緒に夜勤するのどれだけぶりだろう。）

福永 ふくながまこと 真ナース歴10年。プリセプター ミサの教育係である。いつもは同じBチームなので、夜勤を一緒にすることは無いが、他の勤務者の都合で、今回、福永はCチームの夜勤になった。

風貌はというと、茶髪に細い体。スナックのママさんのように酒

やけたような、がらがらの声。元ヤンキーをナースにしたような、という感じた。

そんな風貌とは別に、誰にでも分け隔てなく接する福永を尊敬していた。そして、彼女にいつも助けられている。福永がいなければ、ミサのような弱気な人間は、とつとこの過酷な医療現場から消え去っていただろう。

「ミサ！今日はよろしくね」

「あ、福永さん、よろしくお願いします」

安堵の表情を浮かべているミサに、福永は横目でにやりっと笑って釘をさした。

「何も起こらないといいねえ」

「あ、そんな脅かさないでください！」

「最近、401号室の前でラップ音が聞こえるんだってえ」

「だからあ、脅かさないでくださいって」

「あははー」

福永はミサをからかうのが楽しいといった感じでおどけた。福永がいるだけで、場がぱつと明るくなる。おしつけがましくない明るさに、救われた患者もたくさんいるだろう。ミサも、福永がいることをとても心強く思った。

準夜勤の大まかな仕事内容といったら、まず30分程情報収集をし、仕事にとりかかる。夕食後の配薬。準夜帯で行う点滴の準備。夕食の食事介助。検温。消灯。消灯後の見回り。寝たきりの患者がいる場合は、定期的に体位変換、吸痰、オムツ交換など、正直言って、超過酷である。

「そろそろ、休憩しようか」

福永と山中がミサに声をかけた。

「すいません。まだ、検温の記録書いてないんで、先に休んでください」

「こんなに落ち着いてなのに、まだ終わってないの？」

もう1人の勤務者の山中が怪訝そうに言った。

「ミサは丁寧だから、仕方ないね。もうちょっと、手を抜くとこ抜かないとボロボロになっちゃうよ」

さりげなく福永がフォローにまわった。

「手を抜くって言ったってー」

ミサは子供がだだをこねる時みたいに口をとがらせた。唯一、福永だけには自然体でいることができるのだ。

「いい意味で。手を抜くの。早く、記録終わらせて休みな」

ちゃららちゃららら

「乙女の祈り」もとい、ナースコールが鳴った。403号室。ミサのチームの患者だった。

(あゝはじまった・・・)

あと、もう少しで記録が終わるところで中断を余儀なくされた。

「神田のばあちゃんかー。また始まったねー。」やれやれという顔で福永が立ち上がった。

「あ、いいです。福永さん。私のチームなんで、行ってきます。」

403号室の神田さん。夜になると、ナースコールを鳴らしまくるので、みんな困惑していた。

「どうされました？」半ば飽きたように部屋に入ったミサ。

「あんな。茶をとってくれ」

消灯を過ぎたにも関わらず、大声で話す。2人部屋であったが、神田さんがいつも夜中に騒ぎ出すため、隣のベッドは空きになっている。

「どこにあるの？お茶？」

「引き出し」

と床頭台を指さした。1段目から3段目まで探したがみつからない。

「無いか？」

「はい。無いです。お茶、入れてきましょうか？」

「こっちやったかな」

整理棚の方を指差して、自分も探そうとベッドから降りようとしていた。

「神田さん！」

脳梗塞の既往があり、麻痺のある神田さんには立つことは無理である。ミサは必死に説得した。

「お茶なら入れてきますから、少し待ってて。絶対にベッドから降りないで！」

「あーそうか」

ミサは神田さんが、床に落ちないように柵をきちっと固定し、部屋を出た。が、部屋を出た瞬間に、また、ナースコールが鳴った。
(もう、どうしたらいいんだろ)

「今度は何だった？」

「お茶が欲しいって」

ミサが言つと山中がつつこんだ。

「そんでお茶取りに来たの？ 消灯すぎてからダメってはっきり言わないと！」

「でも、約束したので」

そうこうしているうちに、また、神田のおばあちゃんからナースコールが鳴り、福永が代わりに行ってくれた。

「不^ふ穩^{おん}時の指示は？」

休憩しているのを邪魔されたと言わんばかりに、不機嫌になっている山中がミサに聞いた。

「沈静剤の指示があります」

「それで、寝かすしかないよ」

「……」

「夜寝ないから、昼間寝て、また夜中に騒ぎ出す。昼夜逆転もいいところじゃない。不穩患者には鎮静剤いくべきだと思っけど」

「はい」

山中に言われる通り、ミサは沈静剤を用意し始めた。

その時。福永が神田のおばあちゃんを車椅子に乗せて詰所に連れ

てきた。

「はい、神田さん。ここでお茶飲もうか。」

ミサも山中もあつけにとられた。

「あんた、何してんの？」

福永はミサに投げかけた。

「鎮静剤を……」

「少し騒いだら、鎮静剤かあ。ベッドから落ちてもらったら困るから、それも正解だけど……」

福永はその先は言わなかった。

そんなことをよそに、神田のおばあちゃんは、詰所の机の真ん中を陣取り、あったかいお茶を美味しそうにすすった。

「美味しいね」

とても嬉しそうな顔をしてつぶやいた。

「こんな食堂でお茶をよばれるなんて、久しぶり」

詰所を食堂だという神田さん。どうして夜中に騒ぎ出すのか、福永にはわかっていた。

美味しいね……

ミサの心に何かが響いた。

狭い病室の中、お茶も自由に飲めないこの人たち。寂しくて、怖くて。でも、感情に表現できなくて。彼らなりに行動すれば、騒いでいる、おかしいことをしていると疎まれ、沈静剤を打たれるのだ。

こんなことは看護ではない！

何も言わない福永の態度が、言葉より多くの事を伝えた。

勤務が終わったあと、ミサは福永に話しかけた。

「ねえ？福永さん」

「へ？」

「私も福永さんみたいな看護師になれるかな？」

「私みたいなの無理無理。もっと人生勉強しなきゃ無理無理」

舌を出して、おどける福永は、どこか照れ隠しをしている様だっ
た。

夜中の駐車場。キラキラと輝く星空に手を合わせた。

（今日も無事終わりました。ありがとう。）

第4話 飲み会

世間は3連休。休日のため、検査もなく、病状の落ち着いている患者は外泊にでかけている。

病棟に残っている患者も割と安定しており、いつにもなく暇な4病棟では、看護師たちは、薬袋に貼るラベルを切ったり、針やルートの補充などの内職をしていた。

「外泊してる患者が多いと楽だね」

「ところでさ、今度来るローテートって変わってるんだって、噂好きの山中がそう言った。」

「え〜？林も大分変わってたけど、ろくな人が来ないよねー」
角野亜里沙や横にすわっていたスタッフが話しに加わる。

「もつと、ドラマみたいにカッコイイ医者っていないのかな〜？」

「ね〜。高津っていったら、堅物な昔の政治家みたいだし…」

「加藤さんみたいな医者だったらいいのに」

「ね〜！」

ミサはもくもくと自分の仕事をしていたがふと、話をしている方に目を向けた。

「そつえば亜里沙ちゃん。例の加藤さん…」

山中が意味深そうに聞いた。

「あ、言つの忘れてた〜！」と角野は本当に今思い出したように言った。

「加藤さんとー、来週の水曜日に、飲みにいこうって約束してたんだ」

「あ！ずるい。私も行く〜」

「いいよ、いいよ。人が多いほうが面白いから」

「でも、お邪魔じゃない？」

「山中さん！邪魔だって言ってもついてくるくせに…」

角野が皮肉っぽくそう言った。

結局、その場にいるスタッフのほとんどが参加することとなった。
「あ、渡辺さんはどうする？」と、山中が聞いた。ミサにとっては
思いがけない誘いだった。

角野はちらつと山中を見て、何で？という顔をしたが、あまり空
気の読めない山中は続けた。

「あんたも、行くわよね。多人数の方が会費安くなるでしょ！」

「あ、はい。じゃアお願いします……」

少し間をおいて、ミサはそう答えた。

正直、角野の不満そうな顔もわかっていたし、必ず恵も飲み会に
来るに違いない。誘った山中にしても、会費のためだけで、自分
に来て欲しいというわけではないと、わかったいた。

が、断らなかった。

ミサは、加藤と話したい、という気もあつたし、何よりも、4病
棟に就職してもうすぐ1年が経とうとしているのに、他のスタッ
フとぎくしゃくしているのが嫌だったのだ。

何とか、仲間に入りたい一心だった。

仕事を終え、ミサは家についた。1人暮らしとしては広い、2L
DKのその部屋は、ところどころに雑貨やぬいぐるみが飾られてお
り、女の子らしい雰囲気を出していた。

両親のすすめで、夜勤のときに危険がない様に、病院に近く、他
の住人が家族連れ、という物件を探した結果、2LDKのこの部屋
になったのだ。

ミサには少し広すぎる気もした。

この冬のボーナスの時に衝動買いした、赤色の2人掛けのソファ
ーにすわり、ボーっとしていた。

（飲み会の約束をしたけど、どうしよう。飲み会の場で、1人暗く
なっていたら、本気で嫌われちゃうかも）

「そうだ。福永さんに電話しよ！」

ミサは手帳を開き、福永が休みなのを確認して、携帯に電話した。
「あゝはい」

「あ、今、だいじょうぶですか？」

そつけない福永のがらがら声に気を使ったミサだったが

「あゝゝ珍しいゝ。ミサから電話くれるなんてゝ！」

と割れるような大声に、ぷつ、と笑った。

「で、何？また、なんか問題？」福永は言った。

いつも、ミサのことを心配してくれるのである。

「あのお、来週の水曜日に」

「あゝ聞いた、聞いた。飲み会のこと？」

酒好きの福永である。もう、ちゃっかり誘われていた。

「良かったア。福永さんいなかったら、私、どうしようかと…」

「また、そんな弱気で！ミサはね、もうちょっとずうずうしいくらいで丁度いいの！」

少し離れた、お姉さんの口ぶりだった。ミサは2つ離れた双子の弟との3人兄弟。

（福永さんがお姉ちゃんだったらいいのに…）

いつも、そう思うのだった。

期待半分、不安半分、その日はやってきた。病院から徒歩3分ほどにある居酒屋に向かうため

病院の正面玄関で待ち合わせる。もう、半数くらいが集まっていた。

（福永さん遅いなあ）

早くから待っていたミサは、落ち着かないといった感じで、きよるきよると福永の姿を探していた。

角野 亜里沙とパンチが、こちらへ迎って歩いてきた。角野のいでたちといったら、スレンダーな体にぴったりのワンピースにコート、リボンのついたブーツ。おろした髪は大きめのカールがかかっており、皆の注目を集めた。そして、洗練されたブランド物のバッグは、彼女のセンスの良さを象徴していた。

「やっぱ、おしゃれやねー」

山がしきりに亜里沙を褒めるが、角野は当たり前といった感じで、「そう?」とだけ答えた。

それからパラパラと人が集まり、集合時間の18時には全員集合。総勢15人が、そろそろと3分ほど歩いたところにある居酒屋へむかう。

「福永さん来ないかと思っちゃいました」

「まさかあー。飲み会は快出席なんだから」

ミサは列の一番後ろを福永と並んで歩いていた。

あつという間に店に着き、顔見知りの店主は「いらっしやいませ」という代わりに「毎度!」と、こう言った。

「加藤さん、もう待ってるよ!」

いつものスーツ姿の彼とは違い、ラフな格好で座敷の一番奥のところに座っていた。

「お疲れ様です!」と、加藤が手をあげた。

加藤をみつけると、すかさず、角野が横の席を陣取り、加藤の前にパンチが座った。

ミサと福永は一番加藤に遠いところの端に座った。

みんなが席につくと、加藤が立ち上がって挨拶をし、

「今日は貸切だから、大いに盛り上がってください!」と締めくくった。

「加藤さん、さすがねえ。やっぱプロパーさんは違うわ」パンチが言った。

「恵さん。何度言ったらわかるんですか!今はエムアール!エムアール!」

「何でも、一緒じゃない!ま、今日はプライベートなんだから、あんたもゆっくり飲みなさい!」

バンッとパンチは加藤の肩を叩いた。しかし、加藤はじっくり座ってられないという様子で注文する用紙とペンを片手に、注文をとってまわった。

「皆さん、飲み物、何頼みますか?」

加藤がミサと福永のところまで来た。ミサは緊張で、正座していたまま固まってしまっていた。

「福永さん、何、飲まれます?」

「何って、ビールに決まってんじゃない。この子にもビールやって!」

福永は、加藤にそう言った。

(ウーロン茶、ウーロン茶…)

加藤に聞かれたら、そう答えようと必死になっていたミサであったが、福永の一言で変更せざるを得なくなった。

「渡辺さんも、飲めるの?」

意外といった顔で加藤は聞いた。

「あの、少しなら…」

そう答えるのがやっとだった。

「そう。楽しんでって」

にこっと笑うと、加藤は店の奥にいる店主に、注文の紙を渡しに行った。

まさか、ミサが加藤に好意をよせているなんて、思ってもいない

福永は

「あんた、コート脱がないと! 暑いんじゃない?」

真っ赤になったミサに、その声を掛けた。世話好きな彼女は、お母さんのようでもある。

飲み会は盛り上がり、そのうち、席を関係なく、ウロウロ酒をつぎにまわる姿がみられた。

ミサは、角野と加藤が楽しそうに話しているのを気になったが、福永の今までの経験談やヤンキー時代の話が面白く、山中や他のスタッフも輪に入り始めた。ミサは満足していた。

「渡辺さん、笑ったら可愛いじゃない! いつも存在消してるからねえ」

噂好きで、少しいじわるな山中も、酒がはいって陽気になり、ミサに話しかけた。

「そうですか？私、暗いのかなあ？」

「暗いも何も、雨戸を閉めた部屋のように真っ暗よ！あはは」
福永がそういつて茶化した。

「ヤンキーの福永さんには言われたくありません！」

「んだと、こらゝ。」と冗談っぽく襟をつかむ福永に「きゃーごめんなさい。」と笑って、おどけるミサに周囲は驚いたが、ミサ自身も驚いていた。

「あんた、いつも飲み会欠席するけど、何か意味あんの？これからも、出席したらいいじゃない」と真顔で山中が言った。

言葉は悪いが、誘われたことが、とても嬉しかった。

「さあ、飲も飲も！」

すっかり酒が入り、おっさん化した福永は、周囲にも酒をすすめまくり、ミサも、その被害者になっていた。

「ふくながさゝん。もう、飲めませんよー」

すっかり、ろれつが回らなくなったミサだが、周りも相当、酔っ払っていた。

時計は21時をまわり、貸切の時間が過ぎようとしていた。

「2次会行く人ゝ！」パンチの掛け声がかかった。

15人ではじまった飲み会であるが、1人帰り、2人帰り、2次会に行く人は半数以下になった。

もちろん、加藤、角野、パンチ、山中はいつもの2次会メンバーである。

ミサはふらふらになっていたが、福永の強引な誘いもあって、2次会のカラオケボックスに向かうタクシーに乗せられていた。

ミサが斜め前方に視線をやると、助手席に加藤が座っていた。彼はあまり酔った様子もなく

2次会の場所を運転手に説明している。

「ねえ、ミサー。絶対1曲は歌うのよー！」

ぐでんぐでんに酔った福永は、ミサにもたれかかり、そう言った。
「福永さんだいじょうぶですか？」

加藤が後部座席を振り返った。

「だいじょぶ、だいじょぶ」と言つて、くだらない話を続けていた福永だったが、しばらく車に揺られるうちに静かになった。

「福永さん眠っちゃったね。渡辺さんも大丈夫？」

振り返った加藤に、一瞬ドキツとしたミサだったが

「少し飲みすぎたかな……。でも、大丈夫です。」と答えた。

しばらく車内は沈黙が続いたが、意を決したように、ミサが口を開いた。

「加藤さん、彼女とか……いるんですか？」

酔いにまかせての質問だった。

加藤は一瞬、え？という顔をした。

横の福永はいびきをかいて眠つてしまっている。

大分、間が空いて

「うん、いるよ。」と加藤は答えた。

ミサの質問は、大失敗であつた。

タクシーは目的地に到着し加藤が先に降りた。加藤はお金を払うと「予約してくる」と、先に店に入つて行つた。

「福永さん、着きましたよ！ 起きてくださいっ」

運転手も、迷惑そうに大声で言つた。

「お客さんっ、着きましたよっ！ 大丈夫ですかっ？」

つばがかかりそうな運転手の勢いに、困つたミサは、もたれかかつている福永を思いつきり、ゆつさゆつさと揺さぶつた。

「失恋したからって、当たらないでねっ！」福永がボソツと言つた。

「うわー！ 寝たふりして、聞いてたんだあ……。ひどい！」

「あははははは……。さあ、行くよっ」

2人は酔つ払つたサラリーマンのように、肩を組み、よろよろしながら店に入つていった。

第5話 最低な男

カラオケボックスに先に入った加藤がこちらに向かって手を振っている。

「福永さん、こっちこっち！ここ曲がったところの16番ですかね」

「う、ん、ちょっとトイレ…ミサ、行くろ」

（行くろって完全な酔っ払いじゃないですか）

福永に手をひかれて、トイレまで一緒に行く。女子中学生の連れトイレみたいなもんだ。

ミサは福永がなかなか出てこないの、トイレの入り口で待つことにした。

（16番っていつてたな・どっちだろ）

ミサが右側の廊下をのぞくと、何やら男と女が険悪なムードでやって来た。

「ちよっ…待って……」

清楚な感じの女の人だった。カラオケの雰囲気には場違いな、そんな感じがした。

（うわっ。なんか、ややこしそう。福永さんまだかな）

男が帰ろうとしているところを、つかつかと後ろから、女が追っかけてきて、男の前方をふさいだ。2人は丁度トイレの前で、つまり、ミサの前で口論を始めた。口論というよりは、女が一方的に話している感じであった。

やきもきしてるミサを全く無視し女は続けた。

「やだ、もう」

泣いているようだった。

「もう、無理」

男が一言だけ言った。

感情の無い冷たい言葉に、ミサはつい男の顔を見た。男は整った

顔であつたが、女を見据える冷たい視線に、思わずたじろいだ。

ミサは女子トイレの中に戻ろうとしたが（今、動いたら気まずい）
と思い、友人を待ってます的な態度を装い、知らん顔を決め込んだ。
女が号泣して、男の腕にすがろうとすると、邪魔だ！ というよ
うに女を押した。

バタンッ

細いその女は廊下に投げだされ、そのまま置き去りにされた。

（貫一とお宮か…）

「おまた〜〜！」

長々とトイレにこもっていた福永が戻ってきた。

「もう〜〜！福永さん、遅いです！」

「何か最近のカラオケはすごいね〜！これ、見てみ〜」

廊下にある大きな花瓶に抱きついてキヤーキヤー言っている福永
をよそに、ミサは泣いている女の方に目を向けた。

女は立ち上がることもできず、しばらく泣いているようだった。

（あんなに、人を好きになることができるのかな…）

激しい恋の終わりを目の当たりにしたミサはそう思った。

「カラオケ、パリジェンヌだって！すごっ！」

全く雰囲気を読めない福永を引っぱって16と書かれたドアを開
いた。加藤が「浪漫飛行」を歌い、皆が酔いしれているところだっ
た。

（やっぱ格好いいなあ）

その後、何かをふっきったようにミサも歌い、その歌声で周りを
圧倒した。

何より、後ろで踊る福永には、皆大爆笑であつた。

ミサの歌にはパンチも関心し

「若い子は歌がうまいね〜！」と、ミサの肩をバンッとたたいた。

おばちゃんは感動すると、人の体を叩く習性があるらしい。

「今度の歓迎会もあんな来なよ！」

「はいっ。お願いします」

ミサはとても嬉しそうに返事をした。

結局、2次会でも加藤とあまり話せなかったミサであったが、周囲に少し馴染んできた自分が嬉しくて、何だかうきうきした気持ちになっていた。

数日後、高津が新しいローテートを連れて、病棟の案内をしていた。詰所に入って来た時、皆、驚いた。

「やだ、格好いいじゃない」。誰が変わってるって言ったの？」

山中がひそひそ声で恵に言った。

「あんたが、言ってたんじゃない」

とパンチに軽くつつこまれていた山中を見て、ミサは笑った。

「仲原です」とそっけなく挨拶したその男の声に聞き覚えがあった。思わず、顔を確認した。

(あ~~~~~~~~!!)

(トイレの貫一だア~~~~~!)

第6話 理想と現実

「やっぱ新しいローテートって変わってるよね」

研修医の仲原がやってきてから1週間。彼のマイペースな行動が目につきはじめた。

カッカッカッカッカッ、革靴の音を響かせて、険しい顔で高津が詰所内に入ってきた。

「仲原はいないのか？」

傍にいたミサは驚いて、すくつと立つと

「あの、410号室で処置しています。」と、小声で答えた。

「研修医のくせにっ」

詰所を出る際、高津はこう呟いた。ヒラヒラとなびく白衣が高圧的にみえた。

（トイレの貫一。今度は何をしでかしたんだろう？）

ミサは、仲原のことを勝手にトイレの貫一と命名していた。

ミサ達、看護師は清拭にとりかかっていた。お風呂に入れない人達に、あたたかいおしぼりタオルを渡すのだ。

「田中さん、はい、どうぞ」

2本のタオルを保温バッグに入れ手渡していく。

「いらん」

70代のその患者は言った。

「でも田中さん、昨日もその前も拭いてないですよ。今日は手伝いますから」

ミサは困った表情をして、田中に言った。

「いらんっていったら、いらん！」

ミサがすすめれば、すすめる程、意固地になっていった。ミサが出ていけないので

田中はしびれをきらして言った。

「体、拭いたことにしといたらえーやないか」

「また、後できます」

ミサはいったん部屋を出て、考えこんだ。難しい患者を何人か見てきたが、田中のかたくなな態度に疑問があつた。

（入院してきた時は、そんなに難しい人じゃなかったんだけど…）

「ちよつとお、渡辺さん。ちやつちやと配らないと検温する時間がなくなる！」

脅迫めいた声で、パンチが注意する。

あの、飲み会以来、少し周囲にとけこんだ感じのミサであつたが、やはり、仕事場では注意されてばかりだつた。

「あの、田中さんが…」

「もう、あのじいさん！本当に頑固なんだからっ」と、パンチは鼻を膨らませて、ミサからおしぼりタオルを奪い取り、田中のもとへ置きに行った。

「ちよつと行ってくる！」

（あー、相談するんじゃないかった）

ミサは反省した。

パンチは田中のところに行ってきたかと思うと、すぐ手ぶらで戻ってきた。ミサは田中の事が、とても気にはなっていたが、業務に追われていた。

自分で拭ける人にタオルを配つたあとは、寝たきりの患者の清拭が待っている。もたもた時間をかけていると、必ず言われる言葉がある。

「さんだけ、特別扱いはできないんだからね！」

しばしば、新人のナースは学生時代に実習してきたことと、現実とのギャップに悩まされる。ゆつくり、1人に関わり、話を聞いたリ、お世話したりしてきた学生時代。

今は、ゆつくり患者の話に耳を傾けることもままならない。

いつもミサは思っていた。学生時代は、バケツにたっぷりのお湯を汲んで、タオルをしばり拭いていた。そして、必要に応じて手浴、

足浴を行い、洗髪を行う。実習先の看護師も、看護学校の先生も、そうする事が当たり前のように教えた。

（１人に時間をかけすぎてはいけない）

ミサが就職して初めて知った現実。

実際、ミサが患者の話を聞いていると、必ずといっていい程、注意されるのだ。

「どこ行つてたの？ 何してたの？」

やっと、全員の清拭が済み、ミサは検温の準備をして、真つ先に田中の部屋に行った。

机の上には、パンチが置いてあった保温バッグが、開けることもなく置いてある。田中は、壁の方を向いて、ミサの方を向こうともしない。

「田中さん」

「…」

「検温させてください」

「…」

「朝のこと、怒ってるんですか？」

ミサはストレートに聞いてみた。

「風呂！」

田中はそれだけ言つた。

「お風呂に入りたいんですか？」

ミサがそう問い返すと、壁の方を向いて横になっていた田中が、急に起き出して怒鳴つた。

「もう、何日も前から、お風呂に入りたいって言つてんだろ！あんたら看護婦は、聞く耳を持っていないんか！」

ミサは初めて聞いたことだが、田中はスタッフの誰かに、お風呂に入りたいことを訴え続けていたようだ。

一瞬、田中の剣幕に驚いたミサだったが、冷静さを取り戻し、こう言つた。

「田中さん、点滴が抜けないと、お風呂は無理ですね。だから、

拭かせてください」

田中は、もういい、と諦めた表情を浮かべ

「誰に言っても一緒！ だから、看護婦は嫌いなんだ」
そう言い放った。

「じゃ、点滴抜こうか！」

不意にカーテンの向うから声が聞こえた。

「え？」

ミサも田中も驚いて、カーテンの向うに視線をやった。

隣の患者を診ていた仲原だった。カーテンを開けて、入ってきた彼はもう一度

「今から、抜こう！」と言った。

「せ、先生。大丈夫なんですか？」

田中は来たばかりの若い研修医を半信半疑でみつめる。

ミサとて同じだった。

（また、勝手なことしたら高津に怒られるに違いない）

「点滴は抜きます。その代わり、ごはん、もうちょっと食べてください」

田中は抗ガン剤のあとの食欲不振で、低栄養のために点滴が入っていた。

「ほんとに、抜いてくれるんですか？」

「今、半分くらい食べられてるから、抜いても大丈夫ですよ。食べられなかったら、また入れなおしたらいいんだから」

仲原は田中の病状を把握しているようで自信を持って答えた。そして、田中の左腕にある点滴のルートをあつという間に抜いた。

「風呂、入ってもいいんですか？」

「はい、どうぞ」

田中の顔がぱつと明るくなった。

ミサにとって、こんな、自信に満ちた研修医は初めてだった。やってくるローテートは、ほとんど高津にお伺いをたてて、まるで自分の意見を持っていないようだったから。

それが良いのか悪いのか、ミサには判断がつかなかったが、田中には良い先生に映ったに違いない。

ミサは、部屋から出て行く仲原をボーゼンと見ていた。

（トイレの貫一…やるじゃない）

実際、看護師の平均離職率は11・6%、新卒看護師は9・3%。日本全国で、1年間に看護学校140校分の看護師が退職している計算となる。せっかく、勉強して授かった国家資格を、若いやる気のあるはずの新人ナースが、たった1年で捨ててしまうのだ。

新人ナースが辞めていく理由の大半は、理想と現実とのギャップ。ミサも例外では無かった。

「看護師は聞く耳を持っていないのか！」

そう怒鳴った田中の声が、ミサの頭の中をこだました。ミサは入院しているすべての患者から、言われているような気がしてならなかった。

第7話 過ち

「もう、終わっちゃった」

女は無気力に呟いた。

昼間だというのにカーテンを閉め、うす暗い部屋の中、彼女は何も考えたく無いといった様子でベッドに入った。

「仲原くん……」

佐藤恭子 27歳。彼女の頭の中を別れのシーンが駆け巡る。彼の冷たい蔑んだような目。置いてけぼりをくらったあの日を思い出していた。

その日、恭子は彼の朝食の支度にとりかかっていた。ごはん、味噌汁、あじの開き、サラダ。恭子は味噌汁を味見しながら、時計を確認した。

「遅いなあ」

時計は丁度10時を指していて、朝食にはかなり遅い時間だった。（当直が長引いてるのかしら？）

恭子はそう思い、携帯をかばんの中から取り出した。メールが入っていないか確かめるが、やはりいつもの様に連絡は無しだった。

「連絡くらいくれてもいいのに……」

彼女はそう呟くと、椅子に腰掛けた。彼と付き合い始めたのは1年前。はじめから、彼は恭子を待たせてばかりだった。研修医である彼は忙しく、ここ最近、恭子の部屋に来るのはご飯を食べに来るか、寝にくる位。それでも、恭子は満足していた。

「ただいま」

考えごとをしていると、彼が帰って来た。

仲原孝也 27歳。彼と恭子とは高校時代からの友人で、あるきっかけで付き合うことになった。

「おかえり。遅かったね」

「うん」

「やだ、それだけ？」

ふふつと微笑むと、食卓に料理を並べ始めた。無口な彼は、自分の席に座り料理が出揃わないうちから、モグモグとご飯を頬張っている。

「もう、仲原くん！ 喉つまっちゃうよ」

「うん」

美味しそうに食べる仲原を恭子はじーっと見つめた。黒い真つ直ぐな短い髪。綺麗な2重の目。鼻筋の通った整った顔立ちに見とれていた。

（愛想が無いのが玉に傷だけど）

「どう、美味しい？」

「うん」

「仲原くん、うん、しか言ってくれないんだね」

恭子は少しすねた顔をして、食器を片付けはじめた。

「3時に、また病院に戻らなきゃいけないから、起こして」

呆れる恭子をよそに、仲原はそう言った。

「ちよつと…自分勝手すぎる」

恭子はそう言ったが、仲原は気にする様子もなく、さつさと服を着替え、ベッドにもぐりこんだ。

（私って愛されてるんだろうか）

恭子はしばしば不安になった。置いてけぼりをくらった恭子は、部屋の中でテレビをつける事も出来ず、紅茶を片手にしばらく考え事をしていた。

考えれば、出会った頃から彼のペースで生活していた事に恭子は気付いた。私の事などどうでもいいに違いない。そんな風に思い始めていた。

仲原を起こすまで、時間がある。恭子は、近所にある行き付けの珈琲店に足を運んだ。

店内は珈琲の香りでいっぱいになっていた。平日の店内は他に客

も無く、店主は暇そうに腰掛けて新聞を開いていた。

「恭子ちゃんいらっしやい」

ひげをたくわえ、頭には赤いバンダナを巻いた店主が声をかけた。
「どうした？　いつもの無口な彼は？」

「茶化さないでください」

「茶化してなんか無いよ。本気で心配してんだから」

恭子はいつもの様に、店主に相談をはじめた。店主は珈琲を入れながら恭子の愚痴を長々と聞いていたが、お気の毒といった口ぶり
でこつ言った。

「でも、好きなんでしょ？」

恭子はそれ以上何も言えなかった。彼の腕の中にいるとき、彼が
自分に優しく触れる時の感触。そして、たまにしか笑わないけど、
あの笑顔。

店内に流れるJAZZが恭子の感情を、より揺さぶった。

しばらく珈琲店で暇をつぶした恭子は、他に行く所もなく、部屋
に戻った。そして、約束の時間まで、そつと音をたてずに待った。

時計はようやく3時を指し、約束通り仲原を起こした。

「仲原くん！」

「んん…」

「起きて。時間だよ」

恭子は何かを期待したが、仲原はゆっくり起きて、ベッドの恭子
がいる方の反対側から降りて身支度を始めた。切なかった。付き合
ってるのに片思いのような、そんな感覚にとらわれていた。

「行ってきます」

「行つてらっしやい」

恭子は、はあーっと、大きくため息をついた。

仲原が出かけたあと、恭子はさっきまで仲原が寝ていたベッドに
横になった。どれ位眠っただろうか。携帯が鳴り、恭子が気付いた

時には外は真つ暗になっていた。

半分、寝ぼけていた恭子は、相手の番号も確認せずに出た。

「会いたい」

聞き覚えのある男の声だった。

「え？」

「会いたい、今」

恭子には、それが誰だか分かっていた。その声を聞くだけで体の震えが止まらない。

恭子は、男の話が終わらないうちに、携帯の電源を消した。

がちゃがちゃ

「きやつ」

ドアが開き、恭子の恐れていた現実が顔を出した。

「どうした？ 何で出てくれない？」

1年前に別れた彼である。彼とは5年という長い付き合いだった。学生時代の彼はリーダーシップがあり恭子は憧れていた。憧れの人と付き合い、楽しい日々を過ごしたが、就職してから、彼の態度が一変した。

恭子が震えが止まらないのは、彼から受けた暴力のせいである。

「何で、携帯の……」

「ああ。恭子の友達に聞いた」

男はごく冷静に、優しく話した。

「やり直したい」

「……」

恭子は少し、この男から離れて言った。

「付き合っている人がいます」

「わかってる」

男は今までの事を反省している、といった内容の話をしたが、恭子にはとても信じられず

益々震えは止まらなくなった。

「ごめん」

いきなり、その男は部屋に入り恭子を抱きしめた。

「ごめん。恭子がいないとダメなんだ」

驚いた恭子が男の顔を見ると、彼の頬を涙が流れた。

「何で？」

彼は恭子を抱いたまま続けた。

「愛してる」

ベッドの中にはいつもと違う2人がいた。恭子は、なぜそうしたのか自分でもわからなかった。仲原を愛すれば愛するほど、すれ違う感情を補いたかったのだろうか。

恭子が驚くほど、彼は優しく抱いた。今までの彼とは別人のようであり、いつの間にか震えも止まっていた。

「ごめんなさい」

「何で謝る？」

「私、やっぱり……まーくんとは付き合えない」

つい、昔、呼んでいた名前が口からこぼれる。

「まーくんか。懐かしいな」

そう言っただけで、恭子のおでこにキスをした。いつも、行為を終えたあと、彼は忙しそうに去って行った。今の仲原だって同じことだ。恭子はベッドの中、いつまでも自分の体を離さない彼の態度に驚いていた。

そして、また、身を任せた。

「ただい……」

仲原が仕事を終え戻って来た。

「や……やだ……」

第8話 惨めな別れ

仲原は「ただいま」と言いかけたが、彼の鋭い目は恭子の隣にいる男に向かう。慌てて、ベッドから降り服を整えている恭子とは対照的に、横の男は慌てる様子も無くベッドに居座っている。部屋の雰囲気から大体のことを察知した仲原は、彼女に説明を求めるわけでもなく、その場を立ち去った。

「やだ…待っ…」

恭子は仲原を追いかけようと部屋の外に出たが、仲原の姿をみつける事はできなかった。どうすることも出来ず、ドアの前に呆然と立ち尽くしてしまっただが、男の言葉にふと我に返った。

「お前の彼氏は、理由も聞かないんだな」

「また、連絡するから」

男はそう言っ、恭子の黒髪を撫で、出て行った。

恭子は混乱していた。訳も聞こうとせず去っていった仲原。久々に会った前の彼の優しい笑み。不思議な感情に囚われながらも、取り返しのつかない事態になったということは判った。

（許してくれる訳ない…………）

部屋の中にある仲原の物が、自分を恥ずかしい人間だと責め立てている様であり、彼女は部屋にすることが出来なかった。

恭子は、その後、何度も仲原に連絡をとろうとしたが、電話に出てくれない彼に、絶望し、途方に暮れていた。何度も彼のアパートを訪ねてみたが、全く会えず。

そうしたまま、数日が過ぎ、彼女は仲原の勤務先である病院に初めて電話をした。それ程追い詰められていたのだ。

「はい、安田病院です」

「外科の仲原先生お願いします」

「お約束でしたでしょうか？」

恭子はとつさに嘘をつく。

「はい。佐藤と申します」

「お待ちくださいね。今から、連絡をとりますので……」

どれだけ待ったのだろうか。頭の中をいろいろな言葉が浮かんで、あーでもない、こーでもないと混乱していると、受話器があがった。

「申し訳ございません。仲原先生は……」

バンツ！

「どうして出てくれないのー！」

恭子は携帯を壁にむかつて投げていた。

ただ会いたい一心だったのかもしれない。気がつくと、いつの間にか病院に向かっている恭子の姿があった。仲原の研修先でもある外科の3病棟に足を運んだ彼女。会って何を伝えたいのか、わからない位混乱していた。

「あの、すみません」

途中、白衣の医師が通る度にドキドキした恭子だったが、やっとの思いで外科3病棟のナースステーションを見つけるとのぞいて声をかけた。

「仲原先生いらっしゃいますか？」

「あの？ どちら様ですか？」

若い看護師は、恭子を見るとこう尋ねた。

「佐藤と申します」

「お約束でしょうか？」

「いえ」

恭子は顔を曇らせた。

彼と会うのがこんなに難しい事なのか。約束が無いと会えないのか。恭子は失ったものの大きさに愕然としながら自分の行った行為を悔やんだ。悔やんでも悔やみきれない。

「今、こちらにはおられないのですが」

（やっぱり会えないの…もう待てない…）

看護師は驚いた。目の前にいる女性が、泣き始めたから。

「あ、あの、大丈夫ですか？どちらの患者さまの…」

「いえ、違うんです」

「え？」

「どこに行ったら仲原先生に会えますか？」

看護師は「あっそうか」という表情をして、こう言った。

「もしかして？先生の？」

興味深げに尋ねてきたが、恭子は「あの…」と口ごもる事しかできなかった。困惑して立ち尽くしている恭子に看護師は「今日は、送迎会があるので…」と言って、お店の名前を恭子に教えた。

「7時からなんで、」と、親切な若い看護師は付け足した。

時計は7時半を指している。恭子は看護師から教えてもらった店の、入り口から少し離れたところで待った。待ち伏せた。自分は絶対にこんな事をするような人間では無いと思っていた恭子は、ただ、会いたい一心でここに居る自分自身が信じられなかった。きつと、冷静さを失っていたのだろう。

2月の寒空のなか、真っ暗になった街は、いつそう寒さを増した。吐く息も白く、マフラーに顔をうずめた恭子だったが、目は仲原の姿を探していた。

店から、人が出て行く度に恭子は目を凝らしたが仲原は出てこない。

8時が過ぎ、店の前で待つ恭子はどんどん不安になっていった。もしかして、店には居ないのだろうか？何か用ができて、来れなくなったのだろうか。彼女は、店内に入るか、入らないでおくべきか迷っていた。

ようやく9時になっただろうか。恭子の体は芯まで冷え、馬鹿げた事をしている自分が情けなく思った。

ガラガラガラッ

店の引き戸が横に開く。

「やだー先生！」

「あはっはは」

会を終えた人が続々と店から出てきて、入り口で立ち話を始めた。会話から病院関係の人であることを察し、恭子は、酔っ払った人達の中に仲原の姿を探した。しかし仲原はそこにいない。

「先生、次どこ行くんですか？」

「カラオケー予約してあるから！」

「早く、タクシー来たぞ」

「待ってートイレ」

タクシーが3、4台続いて到着すると、騒がしかった人の束はすーっと消えた。

店の前はまた、寂しくなり、恭子は、また1人になった。

（待って！　もしかして……）

恭子には心当たりがあった。いつだったか、仲原を迎えに行ったカラオケ店。そして、彼女は記憶をたどり、車を目的地まで走らせていた。どうやってたどり着いたのか自分でも覚えていない程、夢中だった。

店に着き、受付のロビーを見渡すと、先に到着した人たちの集まりに混じって待っている仲原の姿があった。

（いた……）

久しぶりに見る仲原の姿。今はとても遠い存在に思える。

恭子は静かに歩み寄ると、近くまで言って声をかけた。

「仲原くん！」

仲原が、声のする方をみると、そこに恭子の姿があった。仲原は困惑した表情で集まりから離れ、ひとけ人気のない廊下へ足を運んだ。恭子は仲原の後を追っかけたが、途中、仲原の足が止まり、急に恭子の方を振り返った。

「何でここに？」

「仲原くん。この前のこと」

仲原は、うん、とうなずいた。話を聞いてくれる様だった。が次の言葉に恭子は愕然とした。

「荷物とりに行くから、部屋の外にでも置いて」

怒った様子もなく、別にどうでもいいという無関心な仲原の態度。恭子は苛立ちを覚えた。

「どうして何も聞いてくれないの？」

仲原はしびれを切らせた様で、面倒くさそうに言い放った。

「じゃあ何が言いたい？」

「……」

結局、仲原の言う通り、恭子には何も説明できなかった。自分が悪いのだ。

「とにかく、荷物とりにいくから」

足早に去ろうとする仲原に、恭子はしつこく食い下がった。いつもの控えめで物分りの良い彼女では無かった。

「もう一度やり直して欲しい」

「元には戻れないだろ？」

仲原は皮肉っぽくそう言っ、集まりの中に戻ろうとした。

去ろうとする仲原を追っかけ、彼の前に立ちはだかった恭子だったが、冷たく愛情の無い仲原の視線は、彼女の心の奥に突き刺さった。

「やり直したい。どうしても無理なの？」

そう聞いた恭子だったが、仲原の答えを聞くまでもなく、結果はわかっていた。彼の表情からは、自分に対しての愛情のかけらも感じ取れなかったから。

「もう、無理」

予想した彼の答え。

「やだ、もう」

別れに直面した恭子は泣き出し、必死に仲原にしがみついた。み

つともない姿だと、わかっていたが、自分をコントロール出来ないでいた。

仲原はうんざりだという様に腕を振り払ったが、運悪く、細い恭子の体は廊下に投げ出された。途中、恭子は哀れむようにこちらへ向かった視線を感じていた。

第9話 帰りたくない患者

「ねえ。バレンタインのチョコ買った？」

「あゝ忘れてた」

「忘れてたじゃ無いわよ！」

「ちゃんと渡辺さんにも言っとかないと」

「はい」

「30人分位買わなきゃいけないんだから、早めに買いに行つてよ」

「面倒だなあ。何で先生に買わなきゃいけないんだろ」

「恒例行事なんだから…文句言わない！」

ここ4病棟では、バレンタインデーに、ナースからドクターに義理チョコを渡すという習慣がある。チョココレートを買って渡す事は、新人ナースの役目になっているので、今年はミサと先輩の山口が当番である。

「失礼します」

休憩室はナースステーションの奥にある。皆、時間差でお昼休憩をとりにやって来るのだ。ミサも今、ひと段落終え、休憩にやって来た所である。

「丁度良かった！ 渡辺さん。先生に渡すバレンタインデーのチョココレートの事なんだけど」

「はい」

「今年は、私と渡辺さんが当番だから、お互い、休みの日に買出しに行かない？」

「山口さんと、私で？ でも、そんな行事あるんですか？」

「でしょー。昔からの恒例行事だから、断るわけにいかないし…とにかく、私、勤務表持つて来る」

ミサはやれやれという顔で、持ってきた弁当に箸をつけた。

（ただでさえ、先生^{ドクター}って怖いのに…チョココレートを渡すなんてやだ

なあ)

1つ先輩の山口は、ナースステーションから勤務表と、「4病棟」と書いてあるノートを持ってきて、チョコレートを渡す日と人を確認し始めた。

「中瀬先生は大学に戻ったでしょ…上田も…来たのは…仲原とお。いち、にい……うわっ！ 全部で27人だあ」

「そんなにいるんですか？」

「ねー。面倒くさい、もう。買うのは2人で買いに行くけど、渡すのは半分ずつ…だから13人と、14人に分けると…」

手際の良い山口はパツパと事を運んでいく。ノートに何やら書きこんで、ミサに見せた。

「渡辺さんは、こっちの列の先生に渡して。私はこっちの列。」
行の最後に仲原孝也という文字があった。

(やだー！ 絶対！)

眉をひそめているミサをよそに、山口はどんどん段取りを進めていく。

「今度の水曜日、私も渡辺さんも休みだから、買いに行く？ 何か予定ある？」

「いえ。お願いします」

傍に居て聞いていた角野亜里沙が、割り込んできた。

「ちよつとお、加藤さんも人数にいった？ 日ごろ、お世話になってんだから、きちんと入れといてよ」

「あ、はい」山口はすかさず、加藤の名前を書き込んだ。

「渡辺さんの列は1人少ないから、加藤さんの分は、渡辺さんが渡してね。これで、ちょうど14人ずつじゃん」

山口は満足気な表情をして、勤務表を戻しに行った。そして、ドクターの名前が書いてあるノートを2枚コピーし、1枚をミサに渡した。

山口は2年目であるが、とても手際がいい。去年、新人の時に当番をしたせいもあるが。

ミサは渡された用紙に目を通した。

仲原孝也…加藤昌弘

（まさひろっていつんだ。加藤さん……）

ミサは、休憩を終え、受け持ちである安達の部屋に来ていた。

「安達さん、そろそろ退院の話が出ているんですが…」

「またかー。婦長に言われたんやろー？」

安達は、まともに話を聞かずとり合おうともしない。そればかりか、テレビの話題にすりかえたりして、明らかに退院したくない様であった。

「安達さん、退院して心配な事って？」

「あれれ？ミサちゃんまで、追い出しにかかった？」

「ち、違います…」

「ミサちゃんは優しいからわかってくれると思うけど。」

「いえ……」

「俺、返るとこ無いの」

「じゃ、じゃあ、帰るとこ見つけないと！」

「なんで、ここに居させてくれないんだろっなー」

ミサは不思議に思った。家に帰りたくない人がいるという事を。どうやら、安達が「帰る家が無い」と言ったのは本当なのかもしれない。そうなると問題は深刻だ。

この前の病棟会で、師長が安達のことについて言及していた。入院費を一切払っていないこと、家族と連絡がとれない事。そして、入院日数が3ヶ月以上に及ぶことを強調していた。

「何とか帰さない」と、師長が言った言葉が胸に突き刺さる。
（どうしたらいいんだろう）

これ以上、安達に言っても無理だ。ミサはそのまま部屋を出た。

「ミサちゃん。忘れ物〜！」

考え事をして出てきたミサは、血圧計を忘れてたのだ。安達はミサを追いかけて「はいっ！」と血圧計を渡した。その、人懐っこい

目、にこつと笑った顔。ミサは、どうして、この人が、家族と連絡がとれないのか、不思議に思った。

（いい人なんだけどなあ）

「師長さん！ 今いいですか？」

ミサは師長の姿を見つけると、深刻そうな面持ちで話し始めた。

「あの、安達さんのことで…」

「あ、受け持ちだったわね。で？ 退院のことか何か？」

「はい」

「困ったわねー。私も何度も説得してるんだけども…」

師長は本当に困った表情をしている。そして、続けた。

「実際、入院費も払ってくれないし、在院日数も長くなってきてるし、看護課からも会計課からも、退院させる様に、うるさく言われているのよ」

看護課は、看護師長の集まりで構成されていて、言うなれば、看護課長は看護師全体のトップである。病棟の師長とて、看護課の方針で動いているため、逆らうことはできない。

「ソーシャルワーカー社会福祉士に、療養型の病院を探してもらってるんだけど、ここも満床で、安達さんの様な人を受け入れる先は無いのよ」

ミサも師長も黙り込んでしまった。

「あとで、もう1回説得してみるわ」

師長はミサにそう言つと、ため息をついた。

第10話 片想い

「うわーいい天気い」

薄水色の空。冬独特の澄んだ空気。ミサは早起きをしてベランダで洗濯物を干していた。

朝の出勤に向かうのだろう。忙しく歩く人や車の列を見ながら、自分だけ休みのような感じがして、得した気分になっていた。

ぴーーーーー！

「あ、やかん、やかん」

忘れっぽいミサの為に母親が用意したものだった。あまりにも、強烈な音に毎回驚かされている。コンロの火を消して戻ってくると、サンダルの方が無いのに気がついた。

「あれー？ どこ行っ たんだろうー」

慌ててサンダルを脱いだので、サンダルはベランダの柵の隙間から落ちた様だ。

（私って、やっぱりドジだなあ）

ミサは慌ててパジャマを着替えて、下に降りサンダルを探した。ベランダの下は、こじんまりとしているが、裏庭になっている。芝生の庭はミサのお気に入りだった。

「あつたー！」

ミサは子供っぽく喜び、サンダルを拾った。ふと、周りの景色に気がつく。1階の住人が植えたスイセンが横一列に可愛く咲いている様子を見て、ミサは思わずしゃがみ込んでスイセンに顔を近づけた。

「可愛い。アヒルみたい」

そつとスイセンに触れると、にこつと笑った。もうすぐ22歳になるうというのに、頬をピンクに染めて笑うミサは、まるで少女のようなだ。白く透き通るような肌が、彼女を若くみせているのかもしれない。

ミサはサンダルを片手にアパートの正面にある階段へ回った。正面は駐車場になっていて道に面している。この道は、病院関係者が抜け道としてよく使っている。

プッ

車のクラクションが鳴った！

「由比だあ」

運転席の同級生をみつけるとミサは嬉しそうに手を振った。運転席の友達もそつと手をふり返す。出勤途中だろう。車を止めることなく去っていった。

車が去ると、前の方から足早にやってくる通行人の姿があった。目が合った。

（うわっ トイレの貫一さん！）

ミサはとっさに逃げようとしたが、あまりに目が合いすぎてどうしようかと慌てていた。

そして、トイレの貫一さんこと仲原は、速足で歩きながら声をかけた。

「おはようー！」

「お、おは？」

（あー！ 通り過ぎちゃってるし……）

ミサは驚きながら、とっとと歩いて去る背中を見送った。寝癖のついた髪。

怖そうだけど、悪い人じゃないかも。ミサはそう思った。

お昼を過ぎ、ミサはデパートで待ち合わせをしていた。1年先輩の山口とバレンタインデーのチョコレートを買う為である。案の定特設されたチョコレート売り場では、平日だというのに、たくさんの人で賑わっていた。

ミサは早めに来て待っていたが、さほど待つことなく山口が現れた。

「私も早めに来たつもりなんだけど、もう待ってたんだ」

「そんなに待つてないですよ」

「そう？ それなら良かった」

2人は、とりあえず端から順番に見ていくことにした。

「これ、いいんじゃない？」

全部見ないうちに、山口はかごにチョコレートをドンドン入れていく。

「あの、山口さん！」

「何？」

「それ、あんぱんまんのチョコの方」

「あ、そうか。包んであるからわからなかったあ。500円の詰め合わせは…こっちか…」

「向うにもいろんな種類があるみたいですよ」

ミサは、適当にチョコレートをカゴに入れていく山口を、制するように言った。

「いいの、いいの。悩んでるだけ損だつて。好きな人ならともかく、ドクターなんて、どーでもいいんだから」

「どーでもって……」

いつも、買い物に行っても迷つて迷つて、結局買わないミサは、山口の思いつきりの良さに驚いていた。あつという間に人数分のチョコレートを選び終え、山口がレジに並びに行った。

山口がレジで並んでいる間、ミサはショーケースの中のチョコレート達を眺めていた。

「ねえねえ、これ可愛くない？ どう思う」

「いいじゃん。」

「あんたもこれにしなよ！」

「やーだ、彼氏甘いのが苦手だから……」

高校生くらいの女の子達が会話している。

ミサも彼女たちにつられて、ショーケースを覗き込む。

（可愛いー）

ピンクのハートの箱に、星の形やハートの形のチョコレートが品

良く詰められている。

チョコレートとチョコレートの隙間には、小さい造花が埋められていて、ミサは見入っていた。

（加藤さんのだけ、これにしちゃおうかな？）

ミサは一瞬そう思ったが、タクシーでの出来事を思い出して、暗い顔になった。

「加藤さん、彼女とか……いるんですか？」

「うん、いるよ」

「買ってきたよー！」

物思いにふけていたミサは、山口の大きな声にびっくりして振り返った。

山口の両手には、大量のチョコレート。

「渡辺さん。悪いんだけど、私これから用事があるから。これ持つてつてくれない？」

（えー。今日、電車なんだけど……）

しかし断れるはずもなく、ミサは大量のチョコレートを渡され、忙しそうに去って行く山口をうらめしそうに見つめた。お茶くらい飲むつもりで来ていたミサは、少しがっかりした様子で、駅に向かった。

いかにもバレンタインという紙袋を持ったミサを、通りすがりの人が見ていく。

（やだなあ。恥ずかしい……）

うつむき加減で歩いていると、後ろから呼びとめられた。

「渡辺さん！」

「加藤さん？ え？ お仕事は？」

「そのビルにある内藤医院に行ってたもんで」

加藤は追っかけてきたらしく、はあはあと息を切らしていた。ス

「ツ姿の加藤は、相変わらず決まっっていて、香水の香りだろうか。大人の香りがした。」

ミサがしばらく言葉を搜していると、加藤はミサが持っている、いかにもバレンタイン袋を見て笑った。

「はは。今年は、渡辺さんが当番か」

「は、はい」

「大変だね」

「い、いえ」

あまり話したことが無いので、まともに視線も合わせられずドキドキしていた。

「くるま、乗ってく？」

不意に加藤はポケットから鍵を出してミサに言った。

「いえ」

「今から病院に戻るんだけど、ついだから」

「いいんですか？」

遠慮がちにミサは言うつと、加藤はうなずいた。「持つよ」ミサが持っている荷物を持って歩く加藤。ミサは、後ろから遠慮がちについて行った。

（どうしよう、何しゃべっていいのかわからない…）

丸山製薬……

車は一目でわかった。緑色のラインに白い文字で大きくかかれた、丸山製薬という文字。加藤は運転席に乗り込むと、助手席を片付けはじめ「どうぞ」と言った。

ミサは助手席に縮こまりながら座る。逃げ出したい程の緊張感だ。「寒くない？」

「あの、大丈夫です」

加藤の何気ない気遣い。自然な会話。何もかもがスマートで大人を感じさせた。ミサには会話を楽しむ余裕もなく、ただただ病院に着くのを待っていた。

信号で止まり、無言の時間が流れた。いきなり、加藤がミサに聞

いた。

「そう言えば、僕の分もあるの？」

加藤はチヨコレートの袋を指さして、ミサの顔を覗きこんだ。

「あ、はい…あります」

声はとても小さかった。

「4病棟の人達はいつもくれるから。本当、ありがたいよね。いろいろ病院まわってるけど、4病棟が一番馴染むかな…」

（やっぱり、あの可愛いチヨコにしとけば良かった……）

ミサが後悔していると加藤は続けた。

「渡辺さんは、誰かにあげるの？」

「えっと、弟と…お父さん…」

「家族想いなんだね」

「い、いえ、そんなんじゃない…あげる人がいないんです」

ミサがムキになって答えると、加藤は笑った。

「あげる人がいないかあ。こんなに可愛い子を放っておくなんて」

ミサは耳まで赤くなって、呼吸もできなくなるかと思った瞬間、車は止まった。

病院に着いた。

「ありがとうございます」

ミサはバカ丁寧にお辞儀をすると、加藤の車を見送った。そしてまだ、ドキドキしている自分に言い聞かせるように呟いた。

「加藤さんには、彼女がいる…彼女が…」

第11話 事件

会計課の田中と師長の池原は、ナースステーションで頭を悩ませていた。

「で、どうになりました？」

会計課の田中は、請求書を片手に師長に詰め寄る。師長は益々困った顔をして、ふーっとため息をついた。帰らない患者、安達のとで。

「先日、私の方から、退院について説明をしたんですが、安達さんは、ちよつと待ってくれ、の一点張りで……」

「先生から、言ってもらったらどうです？」
ドクター

田中が言つと、師長の顔色が変わった。まるで、わかってます、と言っている様に。

「主治医の高津先生にも説明してもらつた様に言つたんですが、部屋の算段は師長の仕事だらうつて、逆に怒られまして……」

「はー、そうですか」

「入院費用の方は何とかなりそうですか？」

「入院の時に、保証人になっている方に連絡をさせて頂きました。

どうやら、元同僚のようでしたね。その方が、安達さんの家族を知っているみたいで……」

「一度、家族に連絡する必要があるわね」

師長はそう言つと、また、深いため息をついた。

「退院の件……どうしましょう……」

師長と退院の事で、話し合ってから、安達の行動に変化が出始めた。

他の部屋に行つては、動けない患者の世話をしたり、買い物に行つてあげたりする姿が度々みられた。始めのうちは親切心からだろう、と放っておいたスタッフだったが、段々と問題視する声が聞か

れた。そんな時だった。

「ただいまー」

「安達さん！」

ナースステーションを横切った、安達の姿。その場に居合わせたスタッフは哑然とした。

安達は車椅子を押していた。乗っていたのは、脳梗塞で4病棟に入院中のおばあちゃん。売店まで連れて行ったというのだ。

「何？ そんなに驚いて」

「何じゃないわよ！ 安達さん。おばあちゃんをベッドから車椅子まで、どうやって乗せたの？」

「俺、力だけはあるからさ」

安達は事の重大さに気がついていない様子だった。それどころか、まるで、良いことをしたかの様に振舞っている。それには恵も黙っていた。なかった。

「おばあちゃんが、麻痺があるのは知ってるでしょ？ 勝手に車椅子に乗せて、こけたら、どうするつもりなの？ それに、女の人の部屋に勝手に入っていくなんて……」

「廊下を歩いてたら、呼ばれたんだって。じゃあ、言わせてもらうけどな、看護婦さん！ っておばあちゃん、ずっと呼び続けているのに、みんな無視やったやないか！」

安達も負けてはいない。

「あの人は、見当識障害けんとうしきがあつて、ずーっと誰かを呼び続けるの、あんたも知ってるでしょ？」

パンチは恐ろしい形相で、安達を睨み付けた。

「そんなん、知らんわ。呼ばれて行ったら、おばあちゃんがパンが食べたい言つたから、一緒に買ってきてやっただけやろ！ 何がいかんのや、くそっ」

安達は頭に巻いていたタオルをはずすと、パンチの顔先へ向けてタオルを振った。

「あ、痛ー！ あんた、暴力する気？」

「かすっただけやないか」

「暴力を振って、このまま入院できると思ったら、大間違いだからね」

「待て、かすっただけやないか……」

パンチはその場を離れると、師長の姿を探した。もちろん、安達の暴力を報告する為に。

安達は不安気な顔を浮かべて、自分の部屋へトボトボと戻って行った。

「ちょっと、師長知らない？」

パンチはでっぷりした体を、ゆさゆさ揺らしながら、師長の姿を探した。

「いえ……」

ミサは他の人の入浴介助から戻ってきたので、パンチが何を怒っているのか、全くわからない。険しい表情に圧倒されたミサは、固まってしまった。

「ちょっと、あんた。安達の受け持ちだったね」

「はい」

「即、退院してもらおうから」

パンチはそれだけ言つと、また、師長を探しに行った様子だった。

（安達さん？　なんで？）

ミサは持っていた入浴セットをワゴンに置いて、安達の部屋へ急いで行った。

「安達さん！」

安達はベッドに腰掛けて、窓の外を見ている。背中を丸めて、うなだれている彼の様子から、何かあったに違い無い、とミサは確信した。安達はミサが声をかけても、全く応じず、振り向こうともしなかった。

（こんな安達さんはじめて）

「どうしたんです？」

「……」

「話して……」

「あの……」

安達がミサの方を見て、話をはじめるか、と思った途端、病室のドアが開いた。

パンチに言われたのだろう。師長がやって来た。

「安達さん、お話を聞きたいので、来ていただきたいのですが」

師長はいたって冷静に、話しかけた。

「……んだよ！ どこに行っても厄介者扱いかつ」
ガラガラガラッ

安達が窓を開けたので、冷たい風がヒューーツと音をたてて舞い込んだ。4階にある部屋にあるこの窓、師長もミサも、安達が何をしようとしているのか、すぐに想像がついた。いきなりの展開に、ミサと師長は、しばらく金縛りにあつたように安達の行動を見ていた。

「あ、安達さん？」

ミサが先に声をかけた。

安達はベランダに出ると、肩くらいの高さにある柵に足をかけた。

「ちょ、ちよつと落ちるじゃない！」

師長が慌てて、ナースコールを押した。

「はい。どうされました？」

ナースステーションにいるスタッフが応じる。まさか、部屋で大変な事が起きているなんて、思いもかけないだろう。のんびりとしたその声は、師長の声で一変した。

「誰か先生呼んできて！」

「は、はいっ」

2、3分して、仲原と数人のスタッフがやって来た。皆が部屋に来た時はミサが、よじ登ろうとする安達の体を引っ張っている所だった。

「バカな事しちゃダメー」

ミサは必死に安達の足にしがみついた。

「どこにも帰るとこなんかないんや！ 追い出されるくらいだったら死ぬ！」

「や……だめ……」

「放つとけ！」

仲原は騒動が起きている中心に行って、安達にしがみついているミサの手を振りほどいた。

「死にたいやつは死ね！」

その声は、静かであったが、冷たいものだった。安達もミサもあつけにとられ、仲原の顔を見た。鋭い目、深く憎悪のこもった声。

その声に圧倒されたのか、安達は、気が抜けたように、その場に座りこんでしまった。ミサは、座り込んでしまった安達の肩を抱き、部屋へ入るよう、そつと促した。

仲原は、部屋へ入る安達を確認すると、出て行った。

（貫一さん……あの時の顔だ……）

「安達さん、どうしたんですか？ 訳を……」

師長の話をさえぎるように、安達は言った。

「ただ、役に立ちたかっただけなんです。つかつとなってしまうけど、暴力なんか……」

「そう。おばあちゃんを売店に連れて行ったのは、私達を助けためだっというの？」

安達は頷いた。

「みんなの役にたてれば、ここに置いてもらえると思って……」
「そうだったの。」

「安達さん世話好きだから……ね」

ミサがそう言つと、安達はわーっと泣き出した。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そう言つて、彼はベッドにひれ伏した。

「退院の件、別に追い出すわけじゃないのよ。一緒にどうしたらいいのか考えましょう」

師長は子供を諭す様に、優しく丁寧に言葉をかけた。

死にたいやつは死ね……

憎悪のこもった仲原の声。彼の過去に何があったんだろう。そう、ミサは思わずにはいられなかった。

第12話 最悪の…

「……ちゃん、たすけて……」

はっ…

また、悪夢を見ていた。

携帯の音で起こされた仲原は、何日も干していない布団をはねのけると、台所に行つて、コップに勢いよく水を注ぎこんだ。

ゴクゴクゴク…

掃除されていない部屋はカビ臭く、物が散乱している。

ふと、携帯の着信履歴を見た仲原だったが、恭子と表示されたその文字が、彼をどんどん憂鬱にさせた。

「ちくしょー！」

ボサボサの頭を掻き、何もかも忘れたい、そんな感じで頭を振つた。彼の視線はベッドの脇にある、一枚の写真に向けられる。

真っ白い肌、血の気のない頬、長い髪を左右に結んだ、少女の写真。

「ごめん……」

仲原はそつと写真立てを伏せた。

2月14日、バレンタインデー

とうとうやって来たか……ミサは、憂鬱な面持ちで病院へ向かった。今日は日勤。例のチョコレート配りが待っている。

ミサがロッカールームで白衣に着替えていると、福永がやってきた。

「おっはよー！」

相変わらず陽気な福永は、1つ2つ冗談を言っていたが、ミサが元気が無いのに気付き、首をかしげた。

「どうしたん？ 何、何？」

「福永さーん」

ミサはそう言っ、甘えた表情で福永の方をみた。

「また、何かあったの？ ん？ パンチ？ 亜里沙？」

福永は急にヒソヒソ声になって返した。真剣に心配している様だが、どうも的はずれている。

「違いますって。チョコレート……」

「ええ……！」

福永は勝手に驚いて、大きな声をあげた。周囲で着替えていた人が一斉に2人の方を見る。ミサは真っ赤になりながら、福永の口を手でふさいで言った。

「まだ、何も言っ、てませんってばー」

「ふがふが……って、苦しいわ！ え？ チョコレート忘れて来たんじゃないの？」

「チョコレートは休憩室に置いてあるんですけども、ね、福永さん一緒に配ってくれませんか？」

「まった甘える……！ そ、れ、は、新人の仕事でしょ！」

福永はさっさと着替え終わると、わざと小走りに去って行った。
「待つてー！」

ミサは福永の後を続いた。

ナースステーションでは、朝の申し送りが始まっていた。深夜勤だった、角野亜里沙はベテランらしく、ポイントをいつている。ただ、たまに吐く毒舌が、周囲を固まらせた。非の打ち様のない容姿から、繰り出す毒舌は、何ともいえない威圧感を持っていた。

「……以上です。まあ、今日は落ち着いてたかな」

あつという間に申し送りを終え、スタッフは雑談を始めていた。

「亜里沙ちゃん、今日はどうすんの？」

噂好きの山中だ。もちろん、バレンタインデーのことを聞いている。

「うん、な・い・しよ！」

「内緒って……」

「そついう山中さんはどうなんですか？」

「何にもある訳無いじゃない。そう言えば、先生達のチョコレート用意してあるの?」

一斉に視線がミサの方に集中した。

「ハイ……」

「先生たち捕まえるの大変よー! 病棟の代表として、きちんと手渡ししてね」

亜里沙は意地悪そうな笑みを浮かべて、ミサの方を見た。

「あ、そうそう、去年は、先生が見つからなくて、準夜までかかってたよね。」

「えー、そんなあ。本当ですか?」

「本当!」

一同、声をそろえて答えた。まるで、ミサをからかうように。
(絶対、からかって楽しんでんだから)

「そうだ。高津先生と仲原先生に渡す時に、歓迎会の日を伝えといてね」

「どうせ、高津は来ないだろうけどね」

山中が口をはさんだ。

「歓迎会? 仲原先生の?」

「そうそう。21日に予約しておいたから。例の富久屋^{ふくや}さんで」

「加藤さんも来るの?」

「もちろん」

スタッフはざわざわし始めた。

「さ、仕事、仕事!」

福永の一声で皆一斉に立ち上がり、清拭^{せいしき}の準備にとりかかった。ミサが患者の体を拭く、おしぼりタオルを用意していると、ドクターの高津が、廊下の向こう側から歩いてくるのに気がついた。

「お、おはようございます」

「あーおはよう」

高津はミサには顔も向けず、そう言ってナースステーションの方へ入って行った。

「あんた、何してんの。 チョコ、チョコ」

福永はミサの背中を押した。

「え、でも、仕事……」

「いいの、今日はその為に、スタッフ増やしてあるんだから。先生を見つけたら、ドンドン渡して行かないと、それこそ夜中までかつちやうよ！」

「えー」

ミサは慌てて休憩室に入っていくと、高津先生へ、と言うシールの貼ってあるチョコを取り出してナースステーションへ走った。

高津はナースステーションの中央にある、だ円形の大きな机の中央に腰掛けて、カルテを見ている。その、厳しい眼差しに、ミサは声をかけるべきか迷った。

「あ、の」

しばらく、間を置いて、高津が顔をあげた。

「びよ、病棟からです。」

その声は少し震えていたかもしれない。ミサは高津の目の前にチョコレートを置くと、はあく息を整えた。変な緊張感で、胃がシクシクしてきた。

「あ、はい」

高津はそれだけ言って、チョコレートには見向きもせず、カルテに視線を向けた。

「あの、それと」

まだ、何か用事があるのか？という様に、高津は、うつとおしそうな顔でミサを見上げた。

（もうやだ）

「な、仲原先生の歓迎会なんで……」

ミサがいい終わらないうちに、高津は「欠席で」と、それだけ言った。

お昼を過ぎて、なかなか減らないチョコレート。ドクターは来て

欲しい時には、なかなか姿を現さない。困っているミサに福永は耳打ちした。

「医局に行っておいで。誰がいるから」

「えー。入りづらいです」

「じゃあ、夜までかかってもいいの？」

結局、ミサは福永に教えてもらった通り、最上階の8階にある内科の医局へ向かった。医局の入り口の前には、ドクターを捕まえようと、MRが数人、立って待機している。立っているMRをかきわけ、ミサは医局に入ると、ムサ苦しい男臭いにおいがした。

（やっぱ、やだなー）

「あれ？ 4病棟の子やろ」

入り口の方にある机に座っていた安部が声をかけた。

「あ、安部先生。 チョコ……」

大きな紙袋の中から安部の分を取り出すと手渡した。

「名前なんだっけ？」

「渡辺です」

就職して、もうすぐ1年になるうとしているのに、全く名前を覚えられていない事に、少し悲しくなった。

それから、医局にいた2、3人のドクターにチョコを手渡し、残すはあと2人となった。

（加藤さんと、貫一さん）

ミサは仲原の顔を思い出した。あの冷たい視線。このまま、机にチョコレートを置いていってしまおう、そう思った。

「安部先生！」

「はい？」

何人か医師がいたが、ミサは愛想の良い安部に声をかけた。

「仲原先生の机って、どちらですか？」

「あー、あいつ？ 窓際が一番端っこ」

安部に教えてもらった通り、窓際が一番右端にある机に向かって歩いて行った。仲原の机は本や資料が山積みになっていて、雪崩が

おきそうな状態だった。

（貫一さんの机、汚いー）

仲原の机にチョコの紙袋を置いたその時。

ドサドサドサッ

雪崩が起きた。

「やだー」

「何やってる？ 人の机で」

「え？」

運悪く、仲原が戻ってきた。仲原の机のまわりには、本と資料が散乱して、ミサが呆然と立っている。

「あ、あの、チョコレートを」

「え？ 俺に？」

「あの、あの病棟からなんですけども、代表で」

「そう。お腹空いてたんだ」

仲原は落ちている、チョコレートの袋を拾うと、そのまま、包みを開け、ムシヤムシヤと美味しそうに食べた。あっという間に無くなった。

（今、食べますか……）

ミサは呆れて、仲原の顔を見た。

仲原もミサの顔を見ていた。白く透き通るような肌。

仲原は急に、ミサに顔を近づけると、両手で頭をつかんだ。

「きゃっ！ 何？」

「いや、お前」

「え？」

そう言つと、仲原はあっかんべーという様に、ミサの両目の下を下げて、覗き込んだ。

「まさかな……」

「ちよつと、かんいち？」

ミサはいきなりの出来事で、かなり緊張していたのだろう。思わず貫一と口走ってしまっていた。

「かんいち？　はは。お前、変わった奴だな」

（貫一が笑った……）

ミサは何が何だかわからなくなっていたが、今、目の前にある仲原の顔をまじまじと見た。端正な顔立ち。優しそうな笑顔。今、湧き上がってくる感情が何なのかも、理解できないでいた。

「お前、血液検査した方がいぞ」

仲原は硬直しているミサに向かって、そう言った。

「貧血ですか？」

「わからん！」

（えー？　何それ？）

ミサはますます呆れてしまった。そして、とつと歓迎会の事を伝えて、医局を後にした。

途中、加藤に会ったが、いろんな所でチョコレートを買った様で、いつもと違う袋をいくつか持っていた。

「ご苦労さん！」

最初に声をかけたのは加藤の方だった。

ミサは疲れた顔で、おもむろにチョコレートを取り出すと、無言で加藤に渡した。

「あ、ありがとう」

気がつくと、猛ダッシュで休憩室に戻って来ている自分がいた。

（最悪のバレンタインデーだあ）

第13話 病気になるという事

その日、戸塚良美はこの4病棟に入院してきた。

ー化学療法を受けられる方へー

そう書かれたパンフレットを片手に。相変わらず4病棟はバタバタとしていて、廊下を忙しく早足で通り過ぎる看護師達の姿。良美はキョロキョロと病棟の様子を見ていた。

「あの、入院さんです！」

良美を案内してくてくれた、外来の看護師は、カルテとフィルムをナースステーションに置きに行つて「ここでお待ちくださいね」と告げると、さつさと戻つて行つた。

良美は荷物の入ったかばんについている、小さなお守りを握り締めた。

「渡辺さん、入院さん来たよ！」

「はーい」

ミサがナースステーションを出て、名前を呼ぶと、椅子に座つていた女性が立ち上がつて答えた。ミサは正直驚いて、女性の顔を見た。

（確か、今日の入院さんは、乳がんの再発で肺転移の…）

目の前には、何の変哲もない、患者らしからぬ女性の姿。驚いたのは彼女が若い、ということ。

ミサは驚きながらも、感情を抑えると、一通り入院の説明を行った。

「受け持ちの渡辺ミサと申します。また、お話を伺いに来ますので、パジャマに着替えてお待ちください」

「はい。よろしく願います」

ミサは部屋を後にすると、急いでカルテを確認しに行った。

乳がん 再発 肺転移

やはり、カルテの表紙の診断名にはそう書いてあった。彼女で間違いない。そして、年齢を確認した。

「36歳……」

良美は狭い病室で、荷物の整理をしながら、いろいろと想いを巡らせていた。

4年前に乳がんの手術をし、化学療法を行って、治ったようにみえていた。もうすぐ、5年目のお祝いをしなきゃ、というところでガンはみつかった。かかさず診察を受けたのに、今度は肺にも転移しているという。定期的に検査も受けていたのに、なんで？ どうして？ 頭の中は黒いモヤモヤとした怒りでいっぱいになった。

乳がんが初めてわかった時は、夫と当時12歳だった娘と、一晚中泣いた。7歳だった息子には告げず、何も知らず甘えてくる息子の顔を見るたびに、泣きそうになっていた良美だった。

その後、手術をして、化学療法、検査、通院。長くこの生活が続いた。3年くらいたった時に息子に告げた。

「お母さん、ガンだったの」

「お姉ちゃんから聞いて知ってた」

その時の息子の顔は忘れないだろう。自分が思っていたよりも、強く、成長した息子を頼もしいとも思った。

でも、今度はダメだ。がんばれない。体が思うようにならない。神様は残酷だ。他のお母さんたちは、皆、楽しそうに子供達とプールへ行ったり、おしゃれを楽しんだりしてるのに。私なんて、お風呂に入る事1つをとっても、家族が寝た頃に、周りを気にしながら入るというのに。何で私だけ、何で私だけなの……。今までは、治ると信じて頑張ってた。少し、不自由なことがあっても、生きているだけで幸せなんだと思い、自分に言い聞かせてきた。もうやだ。もう我慢できない。良美はそう思う様になっていた。

そして、昨日のことだ。

良美は夕方から、入院の荷物の用意をしていた。16歳の娘と1

1歳の息子は学校だ。1人、黙々と準備を進めた。パジャマに、歯ブラシ、バスタオルに…ふと、良美の手が止まった。

お守り…

初めて、手術をする前に夫に渡されたお守り。4年前のもの。1年経ったら「お焚き上げ（おたきあげ）」といって神社に返すのが普通なのだが、手術も成功し、このお守り無しではいられなくなつた。もう生きているのも嫌になる、と思いつつも、お守りに執着している自分を愚かだと思った。あの時、返さなかったから、バチが当たったのかな？　なんて、自分を責めてみる。

「ただいまー。今日のごはん何？」

良美は、元気よく帰ってきた息子の声で、ふと我に返った。

「うん、野菜の炒め物と…」

「なーんだ、つまんないの」

「そんな事、言わないの！」

そうか、しばらく入院だから、ハンバーグでも作っておくべきだったかな？　なんて反省していると、高1の娘も帰ってくる。

「ねえ、お母さん、今日雨降ってるから、塾に送ってって！」

「あー、はいはい。わかった」

私がいなくなったら、この子達どうするんだろ？　と、心配をしながらも、この子達だったらか何とか生きていけそうだわ、と勝手に思ってみる。

息子は相変わらず、ゲームに夢中になっている。そして、娘は2階にある部屋から降りてこない。まあ、いつもの事だ。

「もう、ごはんよ！　塾遅れるから、降りてきなさい。こら、あつくんもゲームはやめて、もうすぐお父さん帰ってくるから片付けて！」

夕方からの時間はあつという間に過ぎる。7時を過ぎ、夫が帰ってくる。

「ただいま」

「今日は早いんだね」

「ああ」

良美にはわかっていた。いつも9時過ぎまで帰って来ない夫だが、夫なりに早く帰ってきたこと。何にも言わないが、気を使っているということがヒシヒシと伝わる。私さえ、病気にならなければ、こんなに夫に気を使わせることも無いのに。

「あれ？ 沙希は？ 塾……」

夫は時計を見るとそう言った。

「さつきも呼んだんだけど……」

良美は、そう言ってもう一度2階にいる娘に声をかけた。返事はなく、良美はだんだんイライラしていた。

私は、明日入院するっていうのに。どれだけ不安かわからない。今日はゆっくり食卓を囲んで、穏やかに過ごしたい。それなのに、こんな特別な日だっているのに……。

良美の不安は家族に対する怒りに変わっていった。その時だった。

「お……！ やったー」

ゲームに勝利したのか、息子のガッツポーズが見えた。

「だから、ゲームやめなさいって言ったでしょ！」

良美は、息子のゲーム機をとりあげると、床にたたきつけた。もう、自分で何をしているのかわからなかった。

「ひどいよ、お母さん……」

ダメだ、こんな事したいんじゃない。明日は入院だから、みんなで、食卓を囲んで……

良美がそう思ったとき、今まで2階にいた娘が、やっと、降りてきた。

「もう、時間だから送ってって」

何かが、良美の中で砕けた。入院前だというのに、相変わらず、ごはんの準備、塾の送り迎え、それに、何だろう。何だろう、このモヤモヤは。腹が立つ。理解できない怒りでいっぱいになった。

「もう、あんた達がこんなだから、お母さん、病気になっちゃったのよー！」

涙があふれ、子供や夫の姿は水の中になった。

「そんな事、言うもんじゃない」

夫の声を背中で受けながら、良美は2階にある自分のベッドにもぐりこんだ。

こんな事言いたいんじゃない。違う。今まで一緒に乗り越えてきた家族に、どうしてこんなヒドイ事言えたんだろう。まして、子供に……。今日は特別な日だと思っていたのは、私のエゴではないのか。子供は普段どりの生活を続けていただけなのに。もうやだ。母親失格だ。

リビングでは子供達が困った顔をして、佇んでいた。

今朝はシュンとしていた子供達。やはり何も言わない夫。良美は昨日のことを謝れないでいた。空気を察したのか、子供達はやけに手伝いをし始め、いつもやったことも無いのに、茶碗を洗ったりしている。

心の中で言った。

（お母さん、病気になっちゃってごめんね）

良美は昨日の出来事を思い出すと、かばんについている古びたお守りを握り締めた。

第13話 病気になるという事（後書き）

自分が病気になったら、どうなんだろう？という視点で書いてみました。作品全体でいえる事ですが、特定の患者さんをモデルにしている訳ではありません。

この作品はフィクションです。

第14話 待ち合わせ（前書き）

待ち合わせ

第14話 待ち合わせ

「戸塚さん。今から点滴に伺いますので、トイレを済ましてお待ちください」

ミサは、ナースコールでそう伝えたと抗ガン剤の準備に取り掛かった。最近では医療従事者の抗ガン剤による暴露が問題視されており、抗ガン剤は、薬局で無菌調整して病棟にあげられる。そして、医師と看護師双方で容量を確認し、医師がルートをつける。ナースは横で、吐き気止めの点滴や、抗がん剤投与前に行うステロイド剤の点滴を用意する。これが一連の流れである。そして、ルートを接続する医師は、シートを敷いた作業台の上で、ガウン、マスク、ゴーグル着用で行うのが原則。抗がん剤が体に付着ないように、細心の注意を払って行われる、その光景は、まるでインチキな研究室のようで、不恰好なゴーグルとマスク、使い捨ての紙のガウンに身を包んだ医師は、怪しい研究者といった感じた。

戸塚良美の担当である仲原とミサは、作業台の前にいた。ボトルに書いてある薬品名と注射箋を読み合わせていく。仲原は、淡々と作業をこなしていった。

「ルート！」

横でステロイドの点滴を詰めているミサに仲原が言った。

「え？」

「違う。ルート！」

仲原はいつも、言葉が短い。それに加えて怒ったような口調。ミサは慌てながらも頭をフル回転にさせ、仲原の言っている意味を考える。

「あつ……！ すみません」

ミサはルートの種類を間違えて準備してしまったのだ。おどおどしながら、新しいルートを取り出し「これで、いいですか？」と仲原に見せた。仲原は、何も言わずミサの持っているルートを奪い、

ボトルに接続した。

それにしても、仲原の仕事は無駄がなく、ミサは驚いていた。ただ、一方で無愛想な仲原の態度。それを苦手だと感じていた。

「部屋！」

「え？」

「部屋！」

「あ、411号室です」

（もう！ 長年連れ添った夫婦じゃないんだから……）

ミサは411号室に足早に向かう仲原の後ろを追っかけた。

411号室に入ると、不安そうにこちらを見る良美の姿があった。自分より若い医師や看護師が今から大事な点滴をするのだ、無理もない。医師や看護師は2人ともマスクと手袋を着用し、無機質な印象を受けた。

「戸塚さん、今から点滴を入れます。右利きですか？」

ミサはいつものように聞いた。

「はい、そうです」

「じゃあ、左に点滴を入れますので、こちらを頭にして」

ミサがそう言ったところで、仲原は「いい！ 右で」と言った。

「でも……」

右利きなのに、右腕に点滴を入れられれば、生活しにくい。なのに、何であえて右に入れるんだろう？とミサは首をかしげた。

反対に良美は仲原の言葉に安堵の表情を見せた。この人は、自分の病状をわかってくれている。病人にとって、安心させてくれる医師の存在は、この上もなく心強い。

あつという間に点滴を入れた仲原は、良美に一礼をして出て行った。

「あの、気分が悪くなったら、いつでも呼んでくださいね」

ミサがそう言うと、良美は軽く頷いた。

「はい。あの……さっきの先生、名前なんていうの？」

「仲原先生です」

「若いわりに、できるわね」

良美はミサにそう言つと、静かに目を閉じた。

ミサがナースステーションに戻ると、仲原が待ち受けていた。

ミサと正面に向かい、鋭い目で見つめながら「なんで左？」とぶつきらばうに問いかけた。

相変わらず、仲原の言葉は短い。

「な、なんでつて……」

困っているミサの前に、仲原は良美のカルテをバサツと置いた。

「……」

開かれたページの既往歴欄には「左乳ガン 乳房切除術」と書いてあった。

「あ」

ミサはやつと気がついた様子で、しまった、と言う表情を浮かべた。

普通、乳がん手術後のリンパ浮腫を予防するため、点滴は手術を受けていない健側^{けんそく}に入れるのが常識である。

「カルテくらい、読め！」

「はい……」

研修医に叱られたのは初めてだ。ミサはすっかり、うなだれてしまった。

夕方近づき、ミサは段々と憂鬱になっていった。

今日は、仲原の歓迎会があるのだ。仲原が苦手だという事に加えて、こここの所、相次ぐ入院や急変で疲れきっていたミサは、あまり気が進まない。いろいろ欠席の口実を考えたが、小心者のミサが嘘を言える訳が無い。

魔法使いがいて、今一番かなえて欲しい事は？と聞かれたら、ミサは真っ先にこう言うだろう。

「あつたかい布団の中で、ゆつくり眠りたい」

昨日は準夜勤で、夜中の2時に家に着いたというのに、また、今朝は日勤。4時間も眠れたらいい方だ。労働基準法にはひつかからないのか、ミサは不思議に思った。

「お疲れ様でしたー！」

「お先に」

時間はあつという間に過ぎ、ミサは暗い面持ちで帰り道をとぼとぼ歩いていった。今まで真つ暗だった帰り道が、ほんのり明るく、日が長くなったのを感じさせた。

「ま、いつか。加藤さんも来るんだから」

ミサは、独り言を言つと路地を曲がった。

どとどとど

不意に、後ろから誰かが走って来る気配がした。こんな狭い道で、やだ、怖い。ミサは後ろも振り向かず早足で歩いた。家はもうすぐ通りに出れば、車も通つてゐるだろうし。

「おい、待て」

「ひゃっ」

仲原の声だった。

（また、貫一に驚かされた）

白いTシャツの上に羽織った、チェックのシャツ。ジーンズにスニーカー。大学生の様ないでたちだった。上を向いた眉毛、はつきりとした二重の目、鼻筋の通った端整な顔立ち。ミサは不覚にも、格好いい、と思つてしまった。

「富久屋^{ふくや}つてどこ？」

仲原は単刀直入に聞いてきた。この人の言葉は、主語と述語しかないらしい。ミサは、まださっきの驚きから冷めていない様子で、息を切らしながら答えた。

「あの、病院の裏門から出て、えと、えーつと」

段々、仲原の眉間に縦皺がよりだし、ミサは焦った。

「わ、私も歓迎会に行くので、案内します」

「何時？」

（しまった…。余計な事言っちゃった）

結局6時半に、ミサのアパートの前の電信柱で、待ち合わせることにした。

第14話 待ち合わせ（後書き）

ブログ始めました。作品のこぼれ話、日常生活のこと、看護師の仕事について更新していこうかと。

「小説を書きたい！」by酒主

<http://blog.goo.ne.jp/ssyusu2>

008 /

第15話 貫一とお宮

約束の時間まで、あと40分足らず。ミサは急いでシャワーを浴びた。何故か、仲原と待ち合わせしてしまった事を、後悔していたミサだったが、加藤のことを想うと少し気が紛れた。

（え？ もうこんな時間？）

考え事をしていた為に、すっかり時間が過ぎていた。化粧もそこそこ、髪も乾ききらない内に、慌てて外へ出た。

「ひゃゝゝ寒いっ」

外は真っ暗。北風は冷たい。雪が降りそうな空気の感じだった。

一度、外に出たミサだったが、部屋に戻ってマフラーを取つてくると、約束の電信柱へ向かった。

約束の電信柱の前で凍えること20分。仲原が早足でやって来た。

「待った？ ごめん」

ぶつきらばうな男だが、最低の礼儀は持っている様だ。

乾きかけのミサの髪は、乾く前に凍ってしまったみたいになっていたし、白い頬は寒さで真っ赤になっていた。

「行きましょうか」

ミサはわざとつつけんどんな言い方をした。何を話していいかわからない。なんせ、昔っから男の人と話す緊張する性質たてだったから。付き合った人は過去に1人いたが、「お前真面目すぎてつまねえ」と軽くフラれた記憶がある。

道を知っているミサの後ろを仲原がついていく。無言で歩く2人。沈黙に耐えかねたのか、仲原が口を開いた。

「お前、血液検査したのか？」

ミサの耳はすっぱりとマフラーに覆われていて、仲原の声が聞き取れなかった。

「え？」

ミサは立ち止まって、仲原を見た。

「血液検査したのか？」

「あ、はい。ひ、貧血でした。鉄剤飲んでます」

ミサがあまりにも緊張しているので、仲原はくすつと笑った。

（今時珍しいな、こんなやつ）

狭い抜け道なので、辺りには街頭もほとんどなく、たまに街頭があるかと思えば、微妙な明るさ。歩いていくうちに、チラチラと雪が降ってきたのが分かった。

（恋人同士だったら、最高のシチュエーションなのに）

ミサは思った。

「わぁ雪！」

「寒いな」

「ううん。あつたかい」

2人がつないだ手は、彼のコートのポケットで温まっている。

彼の顔は加藤……。

ミサがそんな事を想像して歩いたが、やがて富久屋^{ふくや}に到着した。

「ありがとな」

「いえ」

店の中は活気に溢れていて、ミサ達が入ってくるなり「らっしやーい」と威勢の良い声が飛び交った。生簀の中の魚達、包丁を揮う職人さんたちの後ろに置かれている、地酒の数々。

ミサはキョロキョロ周りを見渡し、知った顔を搜した。

「予約の方ですね？」

「はい」

仲原が答えた。でっぷりとして、健康そうな女将に案内され、2人は2階の座敷に通された。

「どうぞ、ごゆっくり」

女将は意味深に言って、障子戸を開けた。

「えー！ー！」

ミサは思わず声をあげた。少し嫌そうに。

女将は驚いて2人を見ながら「井出さん2名様では無かったですか?」と確認した。

「いえ、ち、が、い、ま、す!」

ムキになっているミサの横で仲原がくすくす笑っている。

2人が通された部屋は座椅子が2つ置かれていて、個室になっている。

(冗談でしょ! なんぞ)

「あら、ごめんなさい。てっきりアベックかと…….ほほ」

おちよこちよいの女将はそう言って、改めて加藤たちがいる部屋に案内した。その間、仲原はツボにはまった様子でくすくす笑っているし、ミサは益々赤くなった。

「笑わないでください!」

「ははははは」

ツボにはまった仲原の笑いは止まらないようで、顔をしわくちやにさせている。

(やっぱ、貫一って最悪)

ふんっ! とミサは顔を背けると、女将の後ろについて行った。

「こちらです」

女将は2人を座敷に通した。加藤に角野、^{バンチ}恵、山中、福永、いつものメンバーだ。テーブルの上には、もうビールが並べられて、2、3本開いていた。

「お疲れ様です」

加藤はミサと仲原に声をかけた。

一瞬、加藤の顔が陰しくなったのをミサは見逃さなかった。しかし、その表情はすぐに消え、いつもの加藤の顔に戻った。

「先生! お疲れ様。主役だからこちらへどうぞ」

加藤の前の席を角野がすすめたが、仲原は「ここで」と、端の席に座った。先ほど見せた笑顔は消え、また、冷たい視線の仲原に戻った。角野は開けておいた仲原の席へ移り、1人ずつずれて座った。

そして、変わってるわね、と隣のパンチにヒソヒソ言った。

「さ、主役が来たから飲みましょ！」

モヤモヤとした空気を吹き飛ばすように、福永はそう言っていると、店の者に、料理を運ぶように頼みに行った。

結局ミサも仲原も開いている端っこの席についた。

（何で貫一が隣なの・・・）

仲原は考え事をしていた。恭子の横にいた男の姿。そこにいる男で間違いない。でも、そんな事はどうでもいい。恭子とは終わった。最初から好きだったかもわからない。

仲原の酒を飲むペースが早くなっていった。

「先生、お酒強いのねー」

福永は仲原の横に来てじゃんじゃん注いだ。不思議と酒飲みは、酒飲みが好きだ。普段、仕事場で喧々囂々としていた恵と福永だつて、毎回酒飲み会には顔をみせる。不思議なもんだ。

飲みつぷりの良い仲原を気に入った福永は、自分の席からコップを持ってきて、仲原とミサの真ん中に陣取った。

「この子もね、割とお酒飲めるのよ」

福永はミサと仲原、自分と、交互に注いで福永ワールドを炸裂させていた。

新鮮な刺身、煮付け、てんぷら、美味しいお酒。料理も全部出揃い、皆も酔いはじめてきた。席に座っているのは最初だけ。うろろと酌をする姿がみられた。

角野はいつもは、酌を注ぎまわることには無いのだが、仲原のころへ挨拶に来た。仲原は顔は良い。本人は気がついてないが。角野はきつと気に入っただろう。あからさまに、獲物を探す女豹のよな表情の角野に、福永とミサは顔をあわせた。

「先生、お疲れ様。どうぞ」

「どうも」

角野はミサに席を替わるように合図し、仲原の横を角野が独占し

た。

（いつも加藤さんの横にいるのに）

ミサは角野の行動に少し憤りを感じながら、いつもは空いていない加藤の横に座った。

加藤はいつにもなく酔っている様だった。

「ミサちゃん、今日は飲も飲も！」

「はい！」

「この酒は、いろんな種類があつてね、味見できるんだよ」

「へー。凄いですね」

ミサは加藤の話に耳を傾け、こうして加藤の横にいる自分が夢のように思えた。

加藤が勧めるまま、日本酒を味見するミサはかなり酔ってしまった。

「おいしい！」

「そう。良かった」

「加藤さん、この前はありがとうございました」

「ついでに送って行っただけだから」

「本当は加藤さんだけ、違うチョコレートにしようと思ったんですけど」

「え？」

「・・・・・・・・」

酔って喋りすぎているミサに加藤は微笑んだ。

「ミサちゃんみたいな可愛い妹がいたらね」

加藤の優しさだった。ミサの気持ちに気がついていてさり気なく断ったのだろう。ミサもそれが痛いほどわかった。

「妹ですか・・・・・・・・」

分かりやすいくらい落ち込んだミサだったが、気を取り直して話を続けた。

「加藤さんの彼女ってどんな人なんですか？」

「うーん。難しいな」

「ずるい。教えてください」

すっかり目が据わってしまったミサに少し困惑した様子だったが、しょうがないか、という顔で加藤は携帯を取り出した。

「この人」

長い髪、細い線、控えめに笑う上品そうな顔……

「わっ！」

ミサが叫んだ。

「何？ 知ってるの」

加藤は少し慌ててミサの顔を覗きこんだ。

「いえ。綺麗だなあーって思って」

「はは。ミサちゃん面白いね」

加藤はそう言って、携帯をそっとポケットにしまった。

ミサは動揺していた。見覚えのある女性。トイレに行くふりをして、席を立った。

（あの女の人、お宮の方だ！）

仲原が「貫一」で、加藤の彼女が「お宮」

ミサは完全にこんがらがってしまった。足元はおぼつかないし、

日本酒の味見がかなり利いた様だ。ふらふらとトイレの方へ行った。

「おい、大丈夫か！」

こけそうになった時、トイレから出てきた仲原が支えた。

「トイレの貫一？」

「何だよ貫一って」

ぼやける世界の中、貫一の顔が間近にあった。貫一とお宮、加藤。

「もう、わかんない」

ミサの記憶はここでもなくなった。

第15話 貫一とお宮（後書き）

酒主のブログ。更新中。

<http://blog.goo.ne.jp/ssysyu12008/>

ぜひ遊びにきてください。小説談義に花を咲かせましょう！

第16話 ミサと福永と仲原と

「俺、こいつ連れて帰ります」

仲原は座布団3枚の上に寝かされ、みんなのジャンパーやコートで覆われたミサに目をやりながら、福永にそう言った。

「もうちよつとしたら、起きてくるわよ。それより、主役が抜けたら意味無いし！ ミサだったらいいよ。私の部屋にでも泊めるからだから、飲んで飲んで」

福永はそう言って、仲原を帰すまいと、無理やりコップを握らせ酒を注いだ。

「そつよそつよ、先生、帰っちゃダメだからね」

先程から、仲原の横にへばりついていた亜里沙が、そう続けた。時折、向うの方から、パンチと山中と加藤の笑い声が聞こえてくる。加藤は酔ったらしく山中とパンチのおばちゃん2人を相手に、くだらない事を言っただけで笑わせていた。

「やだあ加藤さんったら」

バーンとパンチが加藤の背中を叩いた音が響いた。

「あいたー！ 恵さん、おっさん並の力ですね。化粧落としたら、おじさんに変身とかしないですよね」

「わははは。加藤さんたら失礼ねー！」

真つ赤な口が、大きく開いて笑っている。

仲原は向うの方から加藤の声が聞こえてくる度にイライラした。

恭子の事はそれ程好きではなかった。たまたま、向うから声をかけ付き合う事になっただけ。そもそも、何人かと付き合ったが、好きだ、愛してるなどという感情は一切起きなかった。いつも誰かが付き合ってくださいと声をかけ、いろいろと世話を焼いてくれる。しかし、その内に女達は泣いて訴えるのだ。「私のこと好き？」と。そして、何も答えない仲原に背を向け去って行く。この繰り返し。何かが欠落している。仲原は自覚していた。

しかし、さすがに別れた彼女の男と同席するというのは、不愉快極まりない。仲原は、まだ自分にも人間らしい感情があることに驚いた。

「さ、もう一杯」

亜里沙が酒を注ぐ。

仲原は、もうどうにでもなれ、という風にコップに注がれた日本酒を一気飲みした。

「すごい。先生」

亜里沙は猫撫で声を出し、甘えるような仕草をした。香水の匂いをプンプンと漂わせて。いつも寄ってくる女達と同じだ。仲原はイライラした。その度に酒を飲みこんで自分を落ち着かせた。

「ね、先生、付き合ってる人とかいるの？」

ほら来た。仲原は思った。女嫌いとか、そういうわけではない。

しかし、こういう類の女は信用できない。女を漂わせている雰囲気、がたまらなく嫌だ。上品にお酒を運ぶ仕草、上目使いの視線。時々、携帯のメール音が鳴り、中身を確認する仕草。仲原はイライラして眉間に皺を寄せた。

「なんで聞く？」

仲原の冷たい視線は亜里沙へと向けられた。

「な、何でって、変なこと聞きました？　そうですよね、彼女いますよね」

亜里沙の目が光った。闘争心に火がついたというべきか。もてる男をとりあう構図。絶対、私の方に分がある、そういう目だった。

仲原はもう、質問の答えには答えなかった。

黙々と酒を進め、無口な仲原と居辛くなったのか、亜里沙は加藤の方へと席を移った。

「あれれー。先生1人？」

あちこちの話に加わり、騒いでいた福永が戻ってきた。端の方で寝かされていたミサを連れて。仲原の横に座らすと、福永は「水持ってくる」とこの場を離れた。

ミサはまだ、ぼーっとしていて、仲原の顔を見つめ返す。髪の毛はぐしゃぐしゃになって、頬には畳のあと。よだれを拭きながら、眠い目をこする。みんなのジャンパーや上着をめちやくちゃに乗せられたので、のぼせたように頬を赤らめている。

「お前、子供^{ガキ}みたいだな」

まだ、ぼーっとしているミサの顔を見つめ返すと、仲原は思わず微笑んだ。眉間の皺が、目尻へ移動した。

仲原は、ふと、妹の影をミサに重ねた。

艶やかな栗毛色の髪。白い肌。真ん丸い目でこちらを見つめ返す表情。決して似てるとは言えないが、雰囲気がよく似ている。何が似ているんだろう。仲原は必要以上にミサの顔を見つめた。

「私、眠ってたんですか？」

ミサが口を開いた。少し酔いは冷めているようだ。寝不足だったのだろう。

「いびきかいてな」

「うそつ。や、どうしよう」

「うそ」

仲原が笑った。先程のイライラが消えていくのがわかる。妹もそうだった。自分のうそを真顔で信じて、驚く姿。よく、からかったもんだ。

仲原は、コップに入った透明の液体を自分の中に流し込んだ。

「お水、持ってきたよー！」

福永が戻ってきた。コップの中では、カランカランと氷が揺れている。

ミサはよっぱど喉が乾いていたのだろう。ゴクゴクと音をたてて飲んだ。

「ってー！ 福永さん。これ、焼酎じゃないですか」

プハッとミサは息を漏らした。

福永はいたずらが成功したので大喜びで、大笑いしている。仲原もつられて、大きな声を出して笑っていた。

何年ぶりに笑っただろう。

仲原は笑っている心地よさを感じていた。少なくとも、妹が死ぬまでは、仲原はどこにでもいる普通の青年だった。笑いもするし、泣きもする。

それが、妹が死んでから、感情の無い、抜け殻みたいになっただ人間になってしまった。

妹の死は、あまりにも壮絶で耐え難いものだった。仲原は今でも思い出す。思い出したくなくても、夢として記憶に蘇ってくる。

「お兄ちゃん、たすけて……くやしい、お兄ちゃん……」

その声は仲原の心に突き刺さる。突き刺さった刃がグリグリと動き、自分を真つ二つにする。足元には自分が流した大量の血。そして、仲原は気体になり、変わり果てた妹のベッドの周りを浮遊する。しなやかな肢体は、ムクムクと腫れ、醜く2倍に膨らんでいる。艶やかだった髪は抜け落ち、つるつとした頭がそこにあった。そして、顔を恐る恐る覗き込むと、口元からは血が噴出している。その勢いは壁に飛散するほど。そこらじゅうに漂う血の匂いは、悪魔のように仲原にささやきかける。

「お前が悪い、お前が悪い」

そして、ゴボツゴボツという音をたてて、血の塊が口から排出されるのを最後にすべてが闇につつまれる。

そこで、いつも目が覚める。10年前、目の前で起こった光景が、何度ともなく繰り返される。夢の中で、助けを求められている自分は、何もできず、ただ、ベッドの周りを浮遊するだけ。

夢の中でくらい、妹を助けてあげられないのか、仲原は自分の想像力の無さを嘆いた。

「まあ、先生、自分の世界に入ってるしー！」

福永の声にはっとして、現実の世界に戻る。

「よし、飲むか」

仲原は勢いよくグラスを空けた。

「まあ、困ったお客さんねー」

はじめにミサ達を案内したでっぷりした女将が困ったそぶりです、腰に手をやった。

3枚並べられた、座布団の上には仲原が寝ていた。その横で、福永とミサが体を揺らして起こそうとするが全く仲原は起きない。

「よーいしょと」

女将に手伝ってもらい、仲原の上体をあげた。そう太くない体だが、筋肉質なのかやたらと重たい。やっと座らせた仲原の頬を、福永がペンペンと叩くと、ようやく目を開けた。

「みんな帰ったわよ！」

福永が言ったが、仲原は何も言う気力もなく、ただ座ってゆらゆらしているだけ。福永は、しょうがない、という顔をして女将に言った。

「すみませんけど、タクシーまわしてもらえませんか？ それと、この人を1階まで下ろしたいので……」

「はいはい、ちょっと待っててね、どっこいしょと」

女将は階下に降りていくと、しばらくして、板前さんを連れてあがってきた。

「いち、に、のさん！」

何とか立たせて、右に板さん、左に女将、前に福永、後ろにミサがまわり、やっとこさで仲原を階段からおろした。

「まあ、久しぶりだよ。こんなお客さん」

女将はぶつぶつ言っていると、タクシーが到着した。さっきの板さんと女将が仲原をタクシーに押し込んだ。当の仲原は夢の中だ。全く起きる気配すらない。福永が窓を開け「ご迷惑をおかけしました」と店の者に詫びると、車は動き出した。

「お客さん、だいぶ酔ってるようですね」

タクシーの運転手も少し呆れたように言った。

福永は助手席に座り、後部座席に仲原とミサが座った。

「ミサ！ 仲原先生の家知ってる？」

「えー、知らない」

「あんたら、一緒に来てたじゃん」

「うん。でも知らない」

「あ”””どうしようね。ミサん家に連れてくか」

「え”””やだあ」

「やだって言ってもさあ、うちん家は婆さんがいるから、男連れで帰るわけにいかないしさ」

「え”””でも」

「運転手さん！ やっぱ、行き先変えて」

「は？」

「あの、病院の裏の……」

運転手は不機嫌そうにし、どこかの駐車場で方向転換すると、来た道を戻った。3分も経たないうちにミサの家に着いた。

「めちゃくちや近所ですね」

運転手は軽く皮肉を言ったが、福永は気にする様子も見せず「ちよつと、運転手さん手伝って！」と促した。「ついてないなあ」と運転手はいい、2階にあるミサの部屋まで、仲原を運ぶはめになった。

外はしーんとしていて、雪がちらついている。夕方はこまかい粒だった雪が、今はふわふわと綿の塊になって落ちてくる。道路も薄く雪で覆われている。滑らないように注意しながら、3人は仲原を支えた。

「昔は、こんなお客さん、よくいましたけどね。今はあまり見ないね」

運転手がぼそつと呟くと、福永も賛同した。

「そう、昔はさあ、上司が飲みに行くって言ったら、必ずついていくのが常識だったやない？そんで、しこたま飲まされて、ぶっ倒れて。バブルのせいもあったんやろな」

「そうそう。バブルん時は良かったなー。お客さんも万札を格好よく出して、お釣りいらんわ！　って。あの頃は良かったなあ」

最初文句を言っていた運転手も、知り合いのおじちゃんみたく話に加わっている。誰とでも普通に会話できる福永の特技だ。

そうこうしている内に、ミサの部屋に着いた。

「運転手さんありがとな。今度は長距離お願いするからー！」

「うまい事いうな」

手を振る福永に照れながら、運転手は肩をすぼめた。

部屋の中では、ミサと福永が動かない仲原に悪戦苦闘していた。

半ば、ひきずるようにして運んだので、仲原のズボンは雪と埃でどろどろになっていた。小綺麗に片付けられた部屋にどろどろのズボン。ミサはため息をついた。

「福永さん！　見てこのズボン」

「うわっ。汚なあー」

「先生！　起きてください。起きないと、布団貸してあげませんよ」

ミサは仲原の頭をペチペチと叩いた。

福永も面白がって、仲原の耳元で「起きてくださいーい」と大声を張りあげている。

「ん……」

仲原の目がかすかに開いたように見えたが、やはりすぐ眠っていつてしまう」

そのうちに、イライラした福永は「ちよっと、ミサ、手伝って！」と仲原のズボンを下げ始めた。

「な、何するんですか！」

ミサが目を丸くして驚いていると、福永はケラケラ笑って「何するって？　何かすると思った？　手伝わないんだったらいいよ。どろどろのズボンのまま布団に入れちゃうからねえ」と脅かした。

ナス2人はお手のもんだ。仲原のズボンをするすると脱がし、ミサの母親のお泊り布団を敷くと、そこへ寝かした。途中、福永が「覗いちゃおうか？」とトランクスの端を持ったもんだから、ミサ

は赤面した。ほんとに、福永はいたずら好きだ。

「なーんだ、見たかったのに」と福永は冗談っぽくいい、シャワー借りるねと風呂場の方へ行った。

ピチャピチャピチャ

福永が浴びているシャワーの音を聞きながら、隣の部屋にいる仲原の姿に目をやった。ごそごそと動いている。さっき、福永が大声で叫んだもんだから、起きてきたんだろうか？お願い、目を覚まさないで、今は！

しかし、ミサの願いもむなしく、ごそごそは段々激しくなり、とうとう、仲原はガバツと起きてしまった。

布団の上に不思議そうに座る仲原。今の状況を懸命に分析している様だ。首をかしげて頭を掻いて。怖いもの見たさか、仲原の行動を観察していると、目があった。

「おい！」

完全に目が据わっている。

「あー、いい風呂だった。ミサ、服かして」

「福永さん、こっち来ちゃだ、め……」

「おっ」

タオルも巻かず全裸の福永登場。仲原は慌てて布団の中に潜り込んだ。布団の中で、いつまでもケラケラ笑っている福永と、驚いたようなミサの声を聞いていた。ふかふかの日光の香りのする布団、笑い声、いつもの埃っぽく湿った布団と比較しながら、仲原はまた眠りについた。

第17話 消せない記憶

「だから、加藤さんみたいな人とは」

「わかってますって。彼女もいるって……」

「本当？ 諦めたふりしてるだけじゃないの？」

「もう、福永さんったらしつこい」

仲原はどれくらい眠ったのだろうか。喉の渴きを覚え、目を覚ましたが、なかなか体が起きてくれない。漂ってくる、パンの焼けた匂い、珈琲の香りを心地よく感じながら、女達のおしゃべりを聞いていた。

「そんでね、亜里沙ったら……」

福永はそこまでいうと、少し声を落として「加藤さんとも付き合ってたみたいだよ」言った。

「えー！ 知らなかった。ショックです」

「あんた、知らなかったの？ほんと、アンテナ低すぎって。それにしても、男は見る目が無いよね。あんな、亜里沙みたいな女、外面だけじゃないの。昨日なんか、仲原ツピにつきまたってたしね。きっと加藤さんとも遊びだったんだろうね」

自分が仲原ツピと呼ばれている。もうちょっとましなあだ名は無いのかと、布団の中で苦笑した。最初遠くの方から聞こえてきた話し声が、はつきりと耳に届く。仲原は、いつ布団から出ていいものか、タイミングを計っていた。

「そんなあ。何がショックって、加藤さんが浮気するって所がショック。聞かなきゃ良かったです！」

「だって、もう好きじゃないんですよ。だったらいいじゃん」

「そんなに、念を押さないでくださいって！」

「大体、あんなホルモン撒き散らしの女と出来てる、加藤なんて信じられへんわ」

口悪く言う福永をくすくす笑いながら、ミサは言った。

「それを言うならフェロモンです」

2人は大きな声で笑って、食事を続けた。正直、仲原にとって、2人の会話の内容はどうでも良かった。それより、食器の力チ力チいう音、トースターがチンツと知らせる音、ポットの湯が沸騰する音。仲原はそれらの音を感じた。

小さい頃に病気で死んだ母。まもなくやってきた義母。義母と父の間に生まれた妹。いろんな光景が頭に浮かんでは、それらの記憶をかき消した。

仲原はやっと、布団から起きだすと「おはようございます」とバカ丁寧な2人に挨拶した。

「やだ、先生！」

ミサは洗面所の方から、大判のバスタオルを持ってくると、パンツ姿の仲原に渡した。

「あの、昨日はご迷惑を……」

「ほんと、パンツ脱ぐって大騒ぎして、大変だったのよ」

「うそっ」

腰にバスタオルを巻きながら、驚いた仲原の顔を見ると、満足した様子で、ふふふんと、福永はいたずらっぽく笑った。横でミサも笑いをこらえていたが、あまりにも仲原が気の毒なので「福永さんの嘘ですよ」とかばった。

「どう？ 朝ごはん食べられる？」

「あの、水を」

「あ、はいはい」

福永は自分の家の様に、コップを取り出し、氷と水を入れて差し出した。

「ありがとうございます」

仲原は一気に水を飲み干すと、洗面所を使っていいかミサに聞いた。

「あ、先生。そこにお客さん用の使い捨ての歯ブラシがあるから使ってください」

「あんたん家、何でも揃ってんのね」福永が感心していると「お母さん、お父さんと喧嘩すると、すぐ泊まりにくるから……」とミサは苦い顔をして言った。

洗面所には、化粧品のがびんが行儀良く並んでいる。そして、ところどころに女の子らしく雑貨が飾られていた。仲原は、その中に飾られていた小さな小瓶に惹かれた。小瓶の中には青く着色された砂が半分入っていて、小さなヨットが砂の上にチヨコンと置かれている。こんな小さな瓶の中にヨットが入ったもんだ、そう言えば昔流行ったな、と思い出した。

「お兄ちゃん、こんな大きいお船、どうやってこの中に入ったの？」不意に妹の顔が浮かんだ。長い髪を左右に結び、まん丸の目で口をとがらせて真剣に聞く姿を。多分、初めての家族旅行だった。ドライブインに置いてある、瓶に入っている船のお土産を、妹は見入っていた。小さな瓶の口から、どうして船の模型が入ったのか真剣に考えている。妹は小学生になったばかりだったと思う。

「亜美も瓶にすいこまれちゃうぞー！」

「やだー怖い」

仲原はそつと目を閉じ、溢れてくる涙をザザッと洗い流した。

「先生、珈琲？ それとも」

「あ、水で」

食卓の上には焼けたばかりのパン、目玉焼き、ベーコン、レタスが置かれている。横で、福永とミサがおしゃべりの続きをしている。美味しい珈琲店をみつけたのだ、あそこのケーキは美味しいのだ、横で聞きながら黙々と食べた。ここにいる自分を不思議に思いながらも、何か安らげる雰囲気を感じていた。

「ご馳走様でした」

「早っ！ おかわりならあるよ」

福永は母親のようにそう言ったが、仲原は胃を抑えてもう入らないという素振りをした。

「昨日、随分飲んでたからね。仕方ないか」

「あの、ずぼんは」

「あんまり、汚いから夜に洗濯して干したの。まだ、もうちょっと乾いてないかな。乾くまで休んでったら？　仕事、いいんでしょ」

「休みですけど」

「ちよつと私ら、出かけてくるから、寝ててもかまへんよ」

福永は、まるで自分の家の様に言った。

2人は洗面所でもキヤーキヤーと何やらしているし、出てきたと思ったら、着替えるからあっち行つて等と指示し、騒がしく準備を終えると、仲原を部屋に残したまま出て行った。

仲原は、やはり重たい頭を抑えつつ、もう一度布団に潜り込んだ。生きてたら、こんな風に女友達と遊びに行ったり、恋をしたりするんだろうな。仲原は、拭えない妹の影を想った。

「ここ！　ここ！」

福永は美味しいと評判の珈琲店の看板を見つけると、ミサに左折する様に指示した。

「ここねー、何か豆を選べるらしいよ、それに、JAZZもかかって。ま、とにかく入る入る！」

「福永さん珈琲に詳しいの？」

「うーん、キリマンジャロにブルーマウンテン、んー」

2人が店内に入ると、休日らしく賑わっていた。店内に広がる珈琲の香りとJAZZのリズムが飛び込んできて、高揚していくのがわかる。福永は、正解だったでしょ、という様な表情でミサに目くばせすると、マスターが声をかけた。

「いらつしゃい。今、ここしか空いてないから」

2人はマスターに促され、カウンターの席に座った。結局、あまり豆の種類も知らない福永とミサはマスターのお勧めを飲むことになった。

頭にバンダナを巻き、髭を蓄えた、赤いエプロン姿の店主はどこか洒落ていた。表に停めてあった、というか飾ってあったハーレー

もこの店主のものだろう。いつもやかましい位の福永も音楽に聞き入っている様子だ。

店主が入れてくれたその珈琲は、すっきりとした苦味、酸味もきつすぎず、まるやかな舌触りで、ミサも福永も満足した。「美味しいねー」と口々に言い雰囲気を楽しんだ。

「オールド、アメリカンっちゅう感じやね、マスター」

福永は例のごとく、マスターに話かけている。本当に、この人の人懐っこい性格がうらやましかった。ミサは横で、福永とマスターの会話を楽しみながら、珈琲を味わった。

カランカランと店のドアが開いた。

「あ、いらっしやい恭子ちゃん！」

入ってきた人物は常連らしく、マスターは親しそうに声をかけると、今空いたカウンターの席に案内した。

「ちよつと片付けるから」

マスターは慌てて皿やコップを片付け、布巾で机を拭いたが、女性には座ろうともせず「もう1人来るので……」と付け足した。

「あつ、そう。良かった、仲直りしたんだ」

マスターが大きな声を出したので、数人の客がマスターと今、入ってきた客をチラチラと見た。ミサもその1人だった。

「お、お、お」

「何？ 何？ むせたの？ どうしたの」

「お、おみ、おみ」

ミサははつきり覚えていた。恭子と呼ばれる女性の顔。今店内に入ってきた女。

（お宮！）

「マスター、ちよつとお水ちょうだい。　この子むせたみたい」

「ちがつちがつ」

ミサは、無理やり福永にお水を飲まされ、はっはつと息をきらした。

カランカランと店のドアが開いて、すぐに次の客が入ってきた。

マスターは恭子の顔を怪訝そうに覗き込み「今日は2人？」と聞いた。

「あー、加藤さん！ 昨日はどうもお疲れ様でした。例の彼女さん？」

あれだけ、悪口を言っていたくせに、福永は愛想良く、今入ってきた加藤に話しかけた。加藤は「参ったなあ」といいつつ笑みを浮かべながら照れくさそうにした。ミサは、やめて、やめてと福永の服の裾を引っ張ったが、福永は一向にお構いなしで話を続けた。

女性がこちらの方を見た。肩まであるストレートの黒髪、グレーのコートに白いスカート、ブーツ姿。こちらを向かって会釈をする、と、加藤と一緒に奥の2人掛けの席へと消えた。

「お綺麗な人やね」

福永は皮肉っぽく言った。

「あの人ね」

「何、何、知ってんの？」

福永は好奇心いっぱい目で、ミサの答えを期待したが「いや、知らない」とミサが言うと、なーんだと眉をひそめた。

やっぱり、言える訳ないか。福永が口が軽いという訳ではない。酔った勢いで加藤や、仲原に余計な事を言ってしまう可能性はある。いろいろ考えたあげく、ミサは口をつぐんだ。

1つ、ミサが驚いたことがあった。加藤と彼女と一緒に並んでも嫉妬を感じなかったという事。少しずつ、自分の感情が違ふところに行っているのだと、その時ミサは気付いていなかった。

第18話 はじまり

しばらく、仲原はふかふかの布団でごろごろ過ごした。他人の家だ、勝手にいろんな物を使う訳にはいかない。自分が寝たせいで、少し酒臭い布団を臭い、どうしようもない男だなあ、なんて今更ながらに思った。

ガチャガチャとドアの開く音がした。2人が戻ってきた。仲原は慌ててベランダに干してあるズボンを取りに布団を出た。いつまでも、パンツ姿でいるのも申し訳ない。

「ひゃあ~~~~~！ミ、ミサ……」

ベランダへ出ようとした所で、背後からミサの母親らしき中年の女性の叫び声が聞こえた。

仲原は落ちているタオルを慌てて腰に巻くと、叫び声の主を見た。

片手には玄関に置いてあった^{ほうき}箒、腰を後方にずらしながら威嚇している。ふくよかな顔はいかにも、お母さんという容顔で、どこことなくミサに似ていた。

今日は驚かされることばかりだ。仲原が言い訳を考えていると、ミサの母親はヒステリックに叫んだ。

「ミ、ミサ、いるの？ ちょっと出てきなさい」

「あの、友達と出かけてます」

ミサの母親は、仲原の口調に、少し安心したのか持っていた^{ほうき}箒をようやく降ろした。2、3度自分を落着かせるように深呼吸をし、目の前にいるパンツ男に説教を شدした。

「ちょっと、あんた、座んなさい！」

仲原が、その場に正座をせざるをいけなくなった所で、やっと2人が戻ってきた。

ミサと福永はのん気におしゃべりをしながら、ドタバタと階段をあがる。「あれ？ あれれ？」鍵が開いているので、ミサは不思議に思い部屋に入った。

丁度、ミサの母親が仲原に説教しているところだった。

「あんたね、付き合うなら、付き合う前に挨拶に来るのが普通でしょ！　それが、まあ、そんな格好で。私だったからいいもの。お父さんだったら、あんた間違ひなく殺されるわよ」

「お母さん！」

玄関を開けて飛び込んできた光景は、腰を手にあて、怒るお婆さんと、タオルを巻いたパンツ男の構図。驚いているミサと仲原の横で福永が大笑いした。

「あら、そうだったの。それはごめんなさい」

福永に事情を聞いた母親は、少し罰が悪そうに頭を下げた。

仲原は乾いたずばんをやつと穿き「こちらこそ、お嬢さんの部屋にやっかいになってすみません」と丁寧に対応した。

「て事は、もしかして、あなたお医者さん？」

「まだ、研修医ですけど」

先ほどまで、目尻を吊り上げていた母親の表情がぱつと変化し、何か偉い人をみつめるような視線を送った。

「本当にごめんなさいね。ふつつかな娘ですけども」

「ちよつとお母さん！」

母親の脳裏には「医者の嫁」という字が浮かんだに違いない。先ほどとは別人のように、取り入る様に話をすすめた。ミサは口をとがらせて怒っているし、福永は興味津々で状況を見守っている。

「あなた、お付き合ひしている人いるの？　ミサなんかどう？　この娘は純情でいい子よ」

「もっ、お母さん！」

単刀直入すぎる問いに、仲原は思わず苦笑した。

ミサの母親もそれ以上は何も言わず、ふと思ひ出したように玄関に置いたというか、慌てて落としたスーパーの袋を取りに行った。

「今日はね、すき焼きでもしようと思つて。こんなに、大勢いるんだったら、もうちよつとお肉買つてくるわね。真ちゃんもいるんだ

「つたら、お酒も用意しないと」

「おばちゃん、そんなに気を使わないでください」

福永は何度か面識のある母親にそう言った。ミサの母親は、福永のことを真ちゃんと呼んでいる。ミサから、何度ともなく福永の話を聞いているからだろう。自分の娘の見方になつてくれている福永を親しげに呼んだ。

「あ、それと、先生！ あなたも休みだったら、一緒に食べる？」

「いや、昨日も泊めて頂いたのに」

「何、帰るの？」

ミサの母親は牛肉のパックをとりだしながら言った。

「……」

牛肉に目がくらんだ訳ではない。しかし、焼き焼きは捨てがたい。何て仲原が思っていると

「先生、いつもインスタント物ばかりでしょ。お母さんに甘えたら？」

福永が代弁してくれた。

「じゃあ、あのよろしくお願いします」

「そう」母親の目が爛々と輝いた。「もっと、お肉買って来なくちゃね。あ、それと、ミサ！

押入れにお父さんのスウェットがあるから、先生に出してあげなさい」

「え？ そんなのいつの間にかしまったのよ」

ミサは驚きながら、母親の指差す通り、押入れの一角をみると、上下のスウェットが出てきた。どこまで、用意がいいんだろう。ミサは呆れながら、他にも何か隠されていないか、押入れの中を見渡した。

「何やってんのよ」

「お母さんが、何か隠してないかって！」

「まあ失礼な子ね」

仲原は、口げんかを始めた2人の様子を目を細めて眺めた。よく

ある母娘の光景。

結局、晩ご飯までもご馳走になることとなった。

「先生に、お風呂入れてあげなさい」

母親は、娘の媚を扱うようにそう言った。

清潔なバスタブにつかりながら仲原は思った。家族とはこういうもんなんだろう。湯気で曇った浴室なんて久しぶりだ。心の中にか満たされるものが湧き上がってきたのを感じた。

自分が必要としているのは、家族なんだと。今まで味わったことのない感情。その先にミサの顔を重ねた。ここからは入ってはいけない、こんな感情を持つてはいけない、そう感じながらも健気なミサの姿を思い浮かべた。ミサを好きなのか、ミサを取り巻く環境に憧れてしまったのか、それとも妹の影をミサに重ねてしまったのか、わからない。ただ、この前から、気になっていたミサの存在が、仲原の中でどんどん大きくなっていく。

「ふつつか者の娘か……」

仲原は大きく息を吸い込んだ。

「せんせ」

ミサは恐る恐る、仲原に声をかけた。「あの、タオル置いときますから」

ミサの声は仲原に良いタイミングで届き、仲原は感情を抑えられなくなった。タオルを置くと、すぐに脱衣場から逃げようとしているミサに、思わず声をかけた。

「さつき、お母さんが言ってたことだけど」

ドアの向うに写る影に話しかける。仲原の声は、浴室に響きエコーがかっている。

「あ、ごめんなさい。お母さん熱血だから」ミサは見えもしないのに、浴室のドアに背を向け話を続けた。

しばらく、間が空き、仲原は意を決した様に口を開いた。

「俺、気になってた」

仲原は言った。

「え？ 何が？」

「お前」

相変わらず短い仲原の言葉。しかし、ミサはその意図を理解している様子で、それからは何も言わず慌てて去っていく音がした。途中、ドンツという鈍い音と、いたつという声が聞こえ、困っているだろう、ミサの表情を想像しながら微笑んだ。

自分から声をかけたのは初めてだ。廻り始めた歯車の音を遠くで聞いた。

第19話 本当の

「あんだ、風邪でもひいたの？ そんな真っ赤な顔して。この子ったらね、まあ昔っからすぐ真っ赤になるもんだから、保育園の頃なんて、リンゴちゃんなんて呼ばれてねえ」

すき焼きの鍋を囲みながら、ミサの母親の話も弾む。甘い割り下の臭いが部屋中に充満し、風呂から出て来た仲原は、親戚の家に来たような錯覚を覚えた。

「あーやつぱり、お父さんのスウェットだと、ぶかぶかね。ほほ」
「お先にありがとうございました」

仲原は軽く頭を下げると、ミサの母親に勧められるまま食卓にいた。

「先生は卵入れる派？」

仲原が頷くと、世話好きの福永は、用意しておいた生卵をお椀に入れ仲原に渡した。そうして、仲原がお椀を受け取るか受け取らないかのタイミングで、ミサの母親が煮えた肉を入れていく。絶妙なタイミング。まるで、仲居の様な2人に、思わず顔がほころんだ。ふと、仲原が対面に座っているミサの顔を、鍋ごしにみつめる。目が合う。

ミサは視線をそらし、わざと席を立つて飲み物をとりに行く。

「まあ、あんたは気が利かない子だね。先生の分も入れてあげなさい！」

そつとして欲しいミサの気も知らず、母親はそう言った。

「いえ、お構いなく」

「そんな遠慮せんぞ。ビール？ 焼酎？ たくさん買ってきたから。ミサ！ とりあえずビール出してあげて」

仲原の答えも聞かず、ミサの母親は勝手にビールと決め付けてしまった。

ミサは言われるがまま、ビールを冷蔵庫から出し、ふつとため息

をついた。

俺、気になってた……

仲原の声が頭を駆け巡る。私のどこがいいんだろう？　きっとからかってるのかも。等と思いながらも、誠実そうな彼の態度に、もしかして？　という気持ちも湧き上がってきた。先ほだから、明らかに自分を見つめる仲原は、何か自分にメッセージを送っている様な目だ。

プシュッ

ミサが缶ビールの蓋を開け仲原に渡した。

一瞬、ミサの指と仲原の指の先が触れた。ミサはどきつとして、手をひっこめた。熱いものを触った時のように。そして恐る恐る、仲原の顔を見た。

仲原の視線は真っ直ぐで、振れることなくこちらを見ている。胸の奥が重たく、何かぎゅっと、つかまれている感覚になって固まってしまった。彼の視線が自分の内に入ってくる。緊張と何か混じった様な感覚。ミサは右へ動けばいいのか、左に動けばいいのか分からないくらい、混乱していた。

「ありがとう」

端正な顔が、こちらを見てそう言った。少し微笑んでいる様子にも感じられた。

「あの」

「好きだ」

こっそり、小さな声で仲原は言った。

「……」

ミサが耳まで赤くなったのは、言う間でもない。

（落ち着け、落ち着け）

ミサは飲みたくもないビールをとり、また、冷蔵庫の方へ行った。

福永とミサの母親は、そんな2人に気がつく様子もなく、おしゃべりに花を咲かせている。

「やだ、おばちゃん。真ちゃん^{まこと}はよして下さいよ」

「何で」

「昔、流行ったでしょ。これ」

福永は不自然に3本の指を立てたが、ミサの母親は全く分からない様子で首をかしげている。

「あ、ぐわし」と仲原は言って、はははと高笑いをした。

「あ、あの気持ち悪い『まことちゃん』の事ね。あの、何だっけ、赤と白の縞々の服を着た漫画家のね、ほほほ」

「そうそう、おばちゃん。だからね、福ちゃんとか、福りんって呼んでよ。昔ね、その漫画のせいで、からかわれたんだから」

ミサは話にのれず、さつきから飲んでいたビールを飲み干した。笑っている3人の声、というより、笑っている仲原の声を意識していた。

（ダメだ、どうしよう）

ビールを飲んでも、胸のドキドキはおさまらない。それ所か、どんどんどんどんと高鳴るのが分かる。

「あー真ちゃん、焼酎の氷無いわ。ちょっとおばちゃんと一緒に買いに行つて」

「えー、おばちゃん。毎日、飲みすぎやで、今日はこれくらいで…」

…」

「いいの、いいのって!」

「え、え?」

とぼけた顔をした福永を、ミサの母親は半ば強引に引つ張りだした。

「ちょっとお母さん、氷買いに行つてくるでな」

にやっと笑った母親の顔をミサは見逃さなかった。

（もう、お母さん、何考えてんのよ!）

「さっぶー。おばちゃん、さぶいわ」

きーんと冷えた空は透き通っていて、ミサの母親と2人、買い物

に行く事になった福永は、ミサの母親にぴったりとくつつき、娘のように甘えた。ミサの母親の方も、くつついてきた福永を、また、娘を見るように優しく見つめ返す。

ぺたぺたと、2人の足音が響く。時折、近所の番犬がワワワワワンと騒いでは、2人を驚かす。そして、あーびっくりしたね、と顔を見合わせ微笑むのだ。

「真ちゃん、いつもお世話になってるみたいね」

「やだ、おばちゃん。あの子ね、なんか知らんけど放っておけない感じなん。確かに要領は悪いけど……看護師に要領なんていらんと思うしな」

「真ちゃんは、ほんと、照れ隠ししてるだけで、本当は看護という仕事をよく考えてるんだね」

「そんなことないです、でも」

「でも？」

「お母ちゃんが、病気で長い事苦しんだから、それ見てたら」

「うん、ミサからも聞いてる」

「苦しんでいる人の味方になってあげる事が、唯一の、お母ちゃんへの親孝行だと……」

少し涙声になった福永が言葉を続ける前に「まあ、この子ったら」と、福永の話に感動したミサの母親は号泣した。

「おばちゃん、泣かないでよ！ 私が泣く場面じゃない？」

「やだ、ごめんなさいね。水戸黄門見ても号泣するから、ミサや弟達にバカにされてんのよ。ほほっ、でもダメだわね、泣けてき」

「泣くか笑うか、どちらかにしてくださいーい！」

「ほほほっ」と笑ったミサの母親はかばんの中からポケットティッシュを取り出すと、ぶーっと大げさに鼻をかんだ。

そうして、歩いて3分程のコンビ二に2人は着いた。

「いやー真ちゃん、コンビ二って何でも揃ってんのね、これ、パンツなんて買いに来る人いるの？ まあー」

「おばちゃん、コンビ二来たこと無いの？」

「1、2度はあるけども、すすんでは来ないわね」

子供の様にキヨロキヨロと店内を見渡す、ミサの母親を見て、福永はミサの姿を重ねた。

「やっぱ、おばちゃん、ミサそっくりやわ!」

「やめてよ。ミサみたいに、どんくさい子と一緒にせんといて!それはいいけど、ミサとあの先生どう思う?」

さっきまで、子供の様だった横顔が、すっかりワイドショー好きのおばちゃんに変化している。そのうえ、コンビニに並ぶ、お泊りグッズを見ながら、不敵な笑みを浮かべている母親に福永は苦笑した。

「おばちゃん平気なの? なんかね、私、ミサを守ってあげなきゃって、そんな気が働いてしまうの。だから、変な虫がつかない様に見張って……」

「そう、ありがとね。でも、あの先生、無口だけど挨拶はきちつとしてるし、顔もジェニーちゃんじゃない?」

「え?」

「2枚目ってことよ。ほら、誰だっけ? ブイ、ブイなんとかの岡田さんに」

ミサの母親はロック氷と書かれた袋を、ケースから取り出すと無造作に3袋程とりだしカゴに入れた。

「重……っ!」

ずんずんずんつ、と3袋の氷を手に持つカゴに入れられ、福永の腕には痕がつく程に重みがかかった。ジェニーちゃんだって、可笑しい。ジャニーズじゃない、なんて笑いながら、福永も幸せな気持ちに浸っていた。

ミサと仲原をどう思う? という質問。福永には全くわからなかったが、仲原とミサ、2人の時間は今、この時、始まるうとしていた。

ミサの部屋。残された二人はしばらく無言のまま過ごした。お互い、何か探りあうような会話を1つ2つしただけ。

ミサも仲原が何か言ってくれないかと待ったが、無口な彼は相変わらず、テレビを見たり缶ビールに口をつけたり。

何か言いかけようとする素振りにはミサにもわかったが、それが余計にミサを緊張させた。

「あの、先生」

ミサが覚悟を決めて話そうという、その時だった。何か立ち込めるような煙のにおいがした。

「おいっ焦げてる！」

本当に鍋からはモクモクと煙が垂直にあがり、2人は電気コンロのスイッチを切るのも忘れて慌てた。

「え？ あ、どうしょ」

「水！」

「はい」

ジュワー

焦げくさい臭いがたちこめ、ミサは窓を開けに走った。仲原も。

はあはあと、2人はベランダに出て新鮮な空気を吸った。

はあはあはあ、ふー。やれやれだという様に、お互いに必死な顔をしてベランダに飛び込んだ。それがおかしくて、たまらなかった。あはははは、ははははっ

笑いは途切れて、お互いの顔を見つめあった。

次の瞬間には、2人の顔は一番近くにあって、ミサは目を閉じた。鼻と鼻が擦れ合い、お互いの息を、呼吸を感じる。彼の顔はミサの右耳の辺りにぴったりとくつつき、彼の両手がミサの体をグルリと取り囲んだ。

そして、彼の手は、彼の体は、ぎゅっとキツイくらいミサを抱きしめた。耳元で彼がキスをする。大事な人にそうするように。

ミサは、思わずギュッと体を締め付ける、仲原の手を振り解いた。「ダメなのか」

確認した仲原の口唇に、ミサは自分の口唇を重ねた。

ミサにしては、大胆すぎる行動だった。でも、本能というものが

邪魔をして、いや、後押しをしてというべきか。素直に、人間らしい行為をミサにさせた。

それから、福永とミサの母親が帰ってくる数分の間、2人は繋がれていた。

第20話 問題（前書き）

やっとの更新です。ちょっとハーレクイン的なところがあります
が、決して欲求不満という訳ではございません（＞m＜；）＞なん
てね

第20話 問題

トントントントン

軽快に響く足音。その音は段々高くなり2人の部屋に近づいてきた。

その音に我に返ったミサは、仲原の腕をほどき、洗面所へ行った。私ったら、どうしたんだろう……。真っ赤になった顔を冷やすように、冷水でパチャパチャと洗った。ふーっと深呼吸をして、息を整えてみたが、一向に胸の高鳴りは抑えられない。

仲原はそっと、そんなミサの様子を見守りながら、顔を洗っている彼女の後ろに回った。

気配を感じてか、ミサは濡れたままの顔をあげると、鏡越しに後ろに立っている仲原の顔を見た。

彼は冷静に一直線にこちらを見る。

鏡越しであったが、その強い視線に驚き、ミサは顔を背けてしまった。

「これ」

仲原は洗面所の片隅に鍵をおくと、さっとミサから離れた。

「え？」

これって合鍵？付き合うという事なんだろうか。ミサは慌てて仲原の方へ寄り確認しようとする、母親達が帰ってきた。

「ただいまー」

片手にはロック氷、片手には空いた酎ハイの缶を持った福永は、「さっぶー」と言いながらドタドタと入ってきた。「そりゃ寒いわよ」とミサの母親が福永に続いて入ってくる。

「あの、食べるだけ食べて申し訳ないんですけども」

仲原は、いつの間にか服を着替え、帰る様子だった。

「えー！ 先生。せっかく氷買ってきたんだから、1杯くらい飲んでいかな……」

酔って少しクセの悪くなった福永を止めるように母親は言った。

「先生も忙しいのよ。真ちゃん」そして、丁寧にたたまれたスウェットの上下に目をやると

「これからもミサをお願いしますね」と仲原に声をかけた。

「はい」

仲原はそう言つと、「おじやました」と帰っていった。

「本当に挨拶の良い先生だねえ。あれ？ ミサは？」

「ミサ。先生帰っちゃうよ。ミサー」

2人はミサを探した。

「ト・イ・レ！」

真っ赤な顔をして出て行けば、何か感付かれるかもしれない。そう思ったミサは先程から、トイレに座つてじーっとしていた。しかし、赤くなつた顔はなかなか戻つてくれない。ミサは手の中にある鍵に視線をやつた。

なんで、合鍵なんて持つてるんだろう？ドクターってもてるから、やはり遊ばれてるのかもしれない。でも、でも。キスの場面を想像したミサは、そうした考えを吹き飛ばした。

次の日、ミサは日勤だったので、母親と福永に見送られ部屋を出た。福永は休みだそうで、まだパジャマを着ている。出来る事なら勤務を代わつて欲しかつたくらいだ。どんな顔をして仲原に会つていいのか、そう思うとミサは深くため息をついた。

タンタンタンと階段を駆け降り、空を見上げた。空は明るく、うす水色。頬にかかる風はどまだ冷たいが、日に日に優しく感じられる。

歩きながら、昨日のことを想つた。いつもいつも受身だった自分なのに、どうして自分からキスをしちゃったんだろう？仲原の目が寂しげだったからだろうか。ふと、大胆な自分の行動がよぎると、ミサは目をつぶつて首を横に振つた。

「おはよう」

「あ！」

あの時、待ち合わせした電信柱に仲原が待っていた。少し微笑んだ表情で手を上げた。付き合いはじめた中学生のように、通学路で待ち合わせをしているような彼の姿。ぶっきらぼうな仲原と、その行動が結びつかず、ミサは思わず吹き出した。

「先生、どうしたんですか？」

ミサは少し笑いながらそう言った。

「昨日、言い忘れたから」

真面目な顔でそう言い、歩きはじめた仲原の後ろを、少し遠慮がちについていった。言い忘れたといいつつ、なかなか言い出さない仲原。とても長い時間に感じられた。ミサの頭の中でもいろいろ言葉が駆け巡る。付き合って欲しい、付き合いたい。そんな言葉を想像し、仲原の言葉を期待している自分がいた。

仲原が急に足を止めたのでミサは驚いて、立ち止まった。

仲原も照れ屋なのだろう。ミサの方を見もしないで話をはじめた。
「付き合ってくれるかな？」

キター。そんな感じだ。ガチガチに固まりながらもなんとか、声を振り絞るように出した。「ハイ」と一言。

仲原はうんと小さく頷いて、また歩きだした。男らしい背中を追いつつ、ミサは感じていた。いつまでも、受身でいるのは嫌だ。自信が無くて、弱くて、誰かの影に隠れているような自分を変えたくて仕方なかった。仲原となら何か変われるような気がした。

ミサは急に歩くスピードを速めて、仲原の横に並んだ。

「私も言い忘れたことがあります」

鼻筋の整った横顔が、驚いてこちらを見る。よく見れば、本当に格好よい。今まで何で気がつかなかったのかわからなかった位。そして、彼の唇を見ると、その感触を思い出し体中がしびれた様に感じる。優しくて、それで、だめだ、もう言っちゃえ！

「先生のこと好きになっちゃいました！」

「……」
少し間をおいて「お前、面白いな」と仲原は笑ってミサの頭をポンポンと軽く叩いた。ミサもまんざらではなさそうだ。仲原は柔らかいミサの髪に触れ、離すのが惜しくなったのか、ミサの髪を撫でたあと「夜、ごはんどろ？」と単刀直入に切り出した。

病棟での仲原は、朝の表情とはうって変わって厳しい表情を浮かべている。カルテを開き、自分の担当の患者の情報収集をはじめ。ミサも仲原にみとれて余裕はない。清拭に、点滴、薬くばりに検温、次々と仕事が襲い掛かってくる。ナースステーションに戻ってこれたのは、お昼の休憩になってからだ。

「渡辺さん、早くお昼休憩いつてね」

「血糖測定の人がいるので、それが済んだら行きます」

「って、渡辺さんが早く休んでくれないと、次の人が休めないじゃない。優先順位を考えて仕事しないと！ もういい、私、先に行くから、あなたが残ってね」

「はい……」

角野亜里沙だ。さんざんミサに用事を頼んでおいて、優先順位もへったくれもない。ミサは眉間に皺を寄せながら、次の仕事にとりかかった。

ミサが血糖測定を済ませ、ナースステーションに戻ると、大声で怒鳴りあう声がした。

「だから、なんで勝手なことをするんだ君は」

「先生が何もしないから、自分がしただけです」

（えー？）

声の主は病棟主任の高津と、仲原。

ミサは目の前の光景を疑った。

（ちょっと、どうしたっていうの？）

第21話 モルヒネ嫌い

「私が何もしていない、ってどういうことだ」

ナースステーション中に、高津と仲原の声が響いた。一瞬、何が起きたのかわからなかったミサは、入り口のところで呆然と2人のやりとりを眺めていた。

高津の声は益々大きく響き、仲原もまた、高津を見据えている。

「じゃあ聞きますが、彼にとっての治療って何なんですか？」

「何だ、私の治療が間違つてるとでもいいたいのか！ 研修医の分際で」

高津の高圧的な態度にミサはぎょつとしたが、仲原は全く動じなかった。むしろ、高津を軽蔑するような眼で、あざ笑うかのような表情をした。

それには、高津も黙っていなかった。パンツとある患者のカルテを、机の上に乱暴におき、見ろ、という様に検査データーのページを開けた。

「このデータが表す意味くらい、君にもわかるだろ」

高津と仲原は、谷山忠治の^{たにやまぢゅうじ}こと^{たにやまぢゅうじ}で言い争っている様だ。

2人の怒声は、隣の休憩室にも聞こえた様で、師長と亜里沙、数人が出てきて様子を伺っている。高津と仲原は周囲に気をとめる様子もなく続けた。

「谷山さんのモヒの事で怒ってんのね、高津」

ミサの横で亜里沙がヒソヒソ言った。

谷山忠治 56歳。白血病の再々発。今回は全身状態の悪化で入院してきていた。毎日続く高熱、痛みの訴え、息苦しさにナース達は頭を悩ませていた。

数日前のカンファレンスでも、谷山のことが議題にあがっていた。

師長に主任、恵、亜里沙、ミサ、福永、他のチーム員も交じっての話し合いになった。

「先生、谷山さんの熱の事ですけども。今の解熱剤、全く効かないように思ってますが」

最初に口火を切ったのは恵^{パンチ}だった。

「腫瘍熱だつて言ってるだろ。基本は冷やす事だ。君たちは、何年看護やってんだ。」

亜里沙が援護射撃を打つ。

「冷やしてます！ それに、熱だけじゃなくて、痛み止めも全く効かなくて、本当に苦しがつてるんです」

「しょうがないだろ。君たちは何でもかんでも感情的になって、やれ、苦しがつてるだの痛がつてるだの。全体的にみて判断しなければいけない事くらいわかつてくれ。まして、今は抗ガン剤の治療中だし、その結果を見てだね」

「でも、先生、家族の方が。何とかしてやってくれ、って。今の状態何とかならないもんですか？」

「じゃあ、君たちに何かできるのか？」

高津はお決まりの言葉を口にした。ナースごときに意見を言われたくない、そんな表情で。

「モルヒネの使用はどうですか」

そう提案したのは福永だった。

高津は首を横にふり、馬鹿げてるという風にため息をついた。

「モルヒネを使うという事は、病気に負けたという事だ。今、抗ガン剤の治療中だというのに、じゃあ何か。彼の、谷山忠治の治療は無意味だと言いたいのか？ 現に腫瘍マーカーの数値は減ってきているし、血液データを見ても、彼の状態が改善しているのは明らかだ」

これ以上、論ずる必要はないという態度で席を立った。高津が動く、ツンと鼻をさす整髪剤のにおいがたちこめた。それは、高津の嫌味な部分をより引き立てている。ナース達は皆、スマートそう

に振舞う高津を怪訝そうな顔でみつめる。

と、その時。あまりに傲慢な高津の態度に腹をたてた福永が、去ろうとする高津に向かって食いついた。

「先生！ ご家族の方と話していただけませんか！ 私たち、毎日家族の方に言われてるんです。何とかしてくれって。このままじゃ、谷山さんだつてかわいそうです」

高津はぱつと振り返り、ヒステリックに叫んだ。

「そこを、きちんと説明するのがナースの仕事だろ！ いちいち神経質な家族に付き合う程、医者には暇じゃない！」

ツカツカと高津の革靴が嫌味に音をたて去っていった。

高津が去ったあと、ナース達の不満が爆発した。

「まあ、何、あの態度。今に始まったことじゃないけど」

「そうそう、何であんなにモルヒネ嫌いなんだろうね」

「ほんと！ 何ていうかさ、あの考え方。絶対おかしいよね。モルヒネを使う事が最終段階だなんて。昭和の時代かってーの」

「自分の家族が痛がってたなら、どうするんだろうね？」

「ほんと」

ミサも高津の態度には疑問があった。がん性疼痛では、WHO（世界保健機構）の3段階除痛ラダーが世界標準の有効な治療法になっている。そこで示されている通り、モルヒネはがん性疼痛で主力な薬である。にも関わらず、モルヒネの使用を頑なに拒み続ける高津の態度は、自分の治療法を信じ続ける医者 of 傲慢さを感じた。

第一、谷山の苦しがる様子といったら、ナースでも目を覆いたくなる様だ。家族にとつてみたら、地獄の苦しみだろう。

あまりに、悲惨な彼の姿に、福永が仲原に相談したのだった。

仲原はもちろん使うべきだと、すぐに対処した。それが、高津の気に障ったのだった。気に障ったというか、逆鱗に触れたとも言ったほうが良いか。

高津と仲原。2人のにらみ合いは続いた。

差し出されたカルテの検査データを見ず、仲原はこう言った。

「こんなデータが、何になるんです？」

高津は頭に血が昇ったような形相で、赤黒く顔を染めている。

仲原はお構いなしに続けた。

「現に、谷山さんは、痛がって、苦しんでいるんです。それを何とかするのが医者の仕事ではないんですか？ 検査データが良くなったところで、患者は救われませんよ」

「私に意見する気か」

「カンファレンスです。話し合いです」

「知識の無い人間が麻薬を使って、呼吸抑制がきて死期を早めることにもなりかねんぞ。そうなったら、君はどう責任をとるんだ」

「先生は、責任をとりたくないから、苦しがつている人間を見放すようなことをしているんですね。第一、モルヒネで死期は早まりません！」

仲原は笑みを浮かべているようにもみえた。

「好きにしろ！ しかし私にも考えがある」

高津の頭からは、機関車のようにどす黒い煙を吐いているようだった。2人の話を聞いていたナース達は、仲原の歯に絹きせぬ物言いに爽快感を感じていたが、同時に仲原の処遇に対して不安を感じていた。

（このままで、高津が黙っている訳がない）

ミサは不安げに仲原の顔を見つめた。

第22話 小園事件

「あんなに逆らって大丈夫かなー？」

ふと、福永が口にした言葉は、ミサの心中を表すものだった。

「蛇のような性格だからねえ、高津は」

嗜好きの山の中がそう言うのと、ナース達は皆、一斉に頷いた。

「そうそう、昔、小園先生っていたじゃない？ 研修医ではなかったけど」

「あゝゝ！ いたいた」

古くから4病棟にいるナース達の間では既知の話で、皆、納得の表情を浮かべていたが、ミサは話の内容がわからず、眉間に皺を寄せ、食い入るように山中のほうを凝視した。

「小園事件！」

「あつたねー」

首をかしげるミサに、福永はコソコソとミサに耳打ちをした。

「小園先生ってね、元祖、仲原……」

その先は嗜好きの山の中が、懇々と語った。途中、2回程ナースコールが鳴り、他のナースが対応してくれたが、いつも一番先に動くはずのミサは、そのまま席についていたまま話に聞き入った。

小園は小児科の医師で、医師になりたてであった。彼の受け持つ10歳になる白血病の患者が、化学療法（抗ガン剤）の治療だけでは良くならず、悩んだ彼は、当時、骨髄移植を精力的に行っていた高津の元へ紹介したのだ。

高津は当時38歳。その頃の彼は、今ほど高慢な感じではなかったが、やはり、病状よりもデータを重視した面があったと、長年4病棟にいる恵が付け足した。^{パンチ}

移植後、順調にみえた10歳の少女であったが、移植後の免疫反応に苦しめられ、11歳の誕生日を目前にして亡くなったのだ。

少女の治療法をめぐっては、何度も小園と高津と口論する姿がみられ、少女が亡くなった後、小園は辞職した。

彼の辞職にあたっては、当時、高津が人事権を持つ大学の教授達に上伸したのがきっかけだった、という噂が病院中に広がったのだった。

「改めて怖いねー。高津って。小園先生って一生懸命でいい先生だったんだよ……患者さんからも随分慕われてたしね」

「い、今どうしてるんですか？ 小園先生は」

ミサは思わず口をはさんだ。

しばらく、皆、音が無くなったように静まり返った。言っではない台詞だったようだ。

「亡くなったの」

「うつ病だね」

「あそこから」

ナース達は口々に事の顛末について話した。そして、山中はやや大げさに屋上を指さした。

「柵がついたのも、あの時以来なのよ……」

ナースステーション内は重苦しい空気に包まれ、話を聞いていた者たちはため息を漏らした。

「さっ！ 検温、検温」

福永の号令で皆、我に返り、ナース達はまた忙しく働きはじめた。昼からの時間はあっという間に過ぎる。本当に「あっ」という間だ。昼の検温をし、注射、明日の検査の用意、説明、バタバタバタバタとナース達の足音が廊下中に響きわたる。

忙しいおかげで、何もかも忘れて没頭していたミサだったが、仕事一段落し記録にかかると、先ほど山中が言っていた話が頭をよぎった。

（貫一くん……大丈夫だろうか……）

時計は定時の5時を過ぎ、6時にさしかかっている。仕事を終えたナースは1人帰り、2人帰り、ミサはいつものように残っていた。「あのね、時間内に終わらすのも実力のうち。優先順位を決めて、ぱっぱと仕事をこなす。これが大事！残ってれば残ってるだけ仕事が終わってくるんだから、もう少し要領よくしないと、自分が大変になっちゃうからね」

珍しく福永がミサに忠告をした。

「でも、福永さん。角野さんったら、全くナースコールや電話をとってくれないし、いつも私ばかり対応してて、手が空いたから、いざ、患者さんの所へ行こうとすると用事を頼んできて。それでね」ミサも珍しく福永に食ってかかった。

「しっ！壁に山中あり、障子に恵^{バンチ}」

福永は冗談っぽく、目を見開いて、そう言った。

あはははは

2人の笑い声がナースステーション内に響く。ミサの顔にもようやく笑顔が戻った。

（やっぱり、福永さんって素敵）

「また、気分転換にどっか行こ！私帰るからね、ミサも断るところは断りなさいよ」

福永はじゃあね、と手を振って帰っていった。

ミサはやっと、最後の一冊に記録しはじめた所だった。

後ろから足音がして、誰か横に座った。カルテをかかえ、必死に記録していたミサは横の存在には全く気がつかなかった。

「おい！」

「はっ」

一心不乱に記録していたところに、いきなり声をかけられたのでミサは驚いて椅子から立ち上がった。くくくくく

仲原の押し殺したような笑いが聞こえた。

「あ！もう、驚かせないでください」

ミサは頬を膨らませて、怒った表情を見せた。もちろん怒ってなんかない。反対に横に仲原がいることがとても嬉しい。

ナースステーション内を準夜のナースが忙しそうに動きまわる。カルテの傍で座って記録しているミサを邪魔だと言わんばかりに押しつけ、カルテを確認したり、注射箋を確認したりしている。

「渡辺さん、ちょっと向うで書いてくれる？ 指示確認したりするのに、そこに居られたら邪魔なんですけど」

準夜のナースは大抵機嫌が悪い。彼女も普段は割りと気さくであるが、出勤直後のバタバタで少しイライラしている様子だった。ミサもそれくらいは心得ているので「すいません」と素直に頭を下げ、席を立った。

「約束、覚えてる？」

席を立ったミサに仲原が話しかけた。夕食の件だ。ミサは分かっていたが、傍にいた準夜のナースが不思議そうに2人のやりとりを聞いていたので、ミサは覚られるんじゃないだろうかどきどきし返答に困った。

様子を察した仲原は、白衣のポケットからペンを取り出し、メモに走り書きをしてミサの前に置いた。

120時 電信柱―

という文字のあとに、下手くそなスマイルマークが不気味に笑っていた。ミサはナースステーションの奥の方にある机に移動すると、黙々と記録をはじめた。

第23話 写真

約束の時間まであと30分。結局、ミサが仕事を終えたのは、7時前だった。

（うわー、時間がない）

ミサは小走りでいつもの道を急いだ。はあはあと息が切れる程走ったので、アパートの階段の前ではとうとう一休みをしなければならなかった。

外は随分あたたかく、走ったせいかミサの顔は真っ赤になり、汗が額に浮かんでいる。やっと部屋にたどり着き、鏡の前に立ったミサは思わず噴出した。

目の前には真っ赤な顔をした自分。はあはあと息をきらし髪は乱れてすごい形相で立っている。

（やだ、必死じゃない。私……）

先生との初めてのデート。改めてそう思ったミサはドキドキが納まらなくなった。

約束の電信柱。そう、仲原の歓迎会の時に待ち合わせをした場所。つい最近まで、自分とは無縁に思えた彼と待ち合わせをしている。そして、あの時とは違い、仲原が来るのを心待ちにしている自分がそこにいた。

狭い抜け道でも、この時間帯は車が行き交う。ヘッドライトのせいで運転席は見えないが、誰か職場の人にみつきりそうで、ミサは通りには背を向けて立った。仲原と会っているところを、山中なんかに見られたら、噂の種になるのは間違いない。

後ろから足音がして、電信柱と一体化しているミサの肩をポンツと叩いた。

「ごめん。待った？」

仲原だった。彼は、病院の帰りらしく大きなかばんを持っている。

彼もまた慌ててやってきたのか少し呼吸が乱れている。

「先生、病院の帰りですか？」

「そう。ちよつと家に寄りたいんだけど、いい？」

「え？」

ミサがすつとんきような声をあげると、仲原は笑って言った。

「あー、このかばん置きにしてください」

仲原は大きなかばんを指さしてそう言った。そして、ミサの顔をのぞきこみ「何考えてんの？」とにやつと笑った。

「ち、違います……」

ミサは仲原の肩をパンツと思い切り叩いた。

「痛えー！」

仲原はお返しにミサの髪の毛をくしゃくしゃとした。

それまで、緊張していたミサだったが、自然と打ち解けていった。仲原が歩を進めると、ミサは横に並んで歩いた。途中、何度か昼間の件について話そうと思ったが、雰囲気が悪くなるような気がして、口をつぐんだ。

歩いて3分ほど、少し古びたアパートの前で仲原は立ち止まった。1階にある彼の部屋の前まで行くと、「入って」とミサを先に通した。

玄関は殺風景で、1足置かれている大きなスニーカーが男の人の部屋らしい。玄関からすぐの部屋は、部屋全体が、本と資料の山で湿っぽく埃の臭いがした。部屋にはパイプのベットと、パソコン、パソコンラックの上にも雑然と本や資料が置かれている。医局で見た彼の机と同じだ。

仲原が着替えている間、ミサはきよろきよろと辺りを見回した。
(掃除しなきゃ、この部屋)

ミサは主婦目線で部屋を眺めていると、写真立てに入った一枚の写真が目映った。それは、部屋の隅にある小机の上に飾られている。そこだけは綺麗に片付けられていて、彼の大事な人なんだろうという事は予想がついた。

可愛らしい少女の写真。真っ白い顔に、引き込まれるような黒い瞳。あどけない表情で写っている。部屋とは不釣り合いなこの写真に、一種異様な感じを受けた。

仲原はスーツからジージパンに着替え、脱衣場から出てくると、写真の方を見ているミサに気がついた。

「あ、ごめんなさい」

仲原の視線を感じ、ミサはとっさに謝った。何で謝ったのかは分からない。ただ、何か触れてはいけない物のように感じた。

「これ、妹」

仲原は何でもないという仕草をして、写真立てを伏せた。

「さ、行こうか」

仲原の声に頷いたミサは、伏せられた写真を想いながら部屋を出た。

いつまでも妹の写真を持ち歩いている兄なんて、多分いない。きっと、写真の少女は亡くなったのかも、等と考えながら。

「先生」

「ん？」

妹さんって？ という言葉が口元まで出かかっていたが、無理に聞く話でもないと思ったミサは「どこ行くんですか？」と、とっさに質問を変えた。

「あー。決めてない。どうしようかなあ」

「え？ じゃ、先生どこに向かって歩いてるの？」

「さあ」

行き先も決めずただ歩いている仲原を、ふふつとミサは笑った。

「私、知ってる店があります。一度、福永さんに連れていってもらったから。ここから近いですよ」

「じゃあ、そこにしよう」

仲原がほっとした表情をしたので、ミサは益々笑いをこらえられなくなった。

「あはははは」

「って何だよ！」

仲原はミサの肩に腕をまわし、もう1つの腕で髪をくしゃくしゃととした。

「また、くしゃくしゃにするー！」

「ははっ」

おどけて走っていく仲原をミサは追いかけた。

「先生！ そこ右」

先を走る仲原にミサが大声で叫ぶ。

立ち止まった彼はミサが追いつくまで待った。

ミサがようやく追いついたあと「遅いの」と、半分からかった口調で言って「先生って呼ぶのやめてくれないか」とミサの方を見た。

「じゃあ、なんて呼んだらいいんですか？」

「敬語もなあ……」

ミサは首をかしげて仲原の名前を思い出した。

「あ、わかった。孝也さん」

「んん、なんだかなあ」

「タカちゃん」

「ええっ？」

「じゃあ、先生は何て呼ぶんですか？ 私の事」

「おかめ」

「もう~~~~！」

そうこうしているうちに、店に着いた。居酒屋といった感じだ。

紺色の暖簾には「魚清」と白い文字で書かれてあった。

「渋い店だなー」

仲原の言った通り、店内は1人で飲みに来ている男性客が圧倒的に多く、ちびちびと酒を飲んでいる姿がみられた。

（違う店にしたら良かったかな？）

少し後悔したミサだったが、「ここの魚料理美味しいんだよ」と自分にも言い聞かせるように言った。

「いらつしやいませ、何名様ですか？」

「2人です」

「今日は団体の予約があつて、カウンターしか空いてないんですがよろしいですか？」

案内してくれた子は、バイトらしく、忙しそうにカウンターを片付け2人に座るように促した。

「とりあえず生中^{ビール}2つ」

「生中ふたつ」

威勢のいい声が飛び交う。店内はざわざわと騒々しく、時々男たちの馬鹿笑いが座敷から聞こえてくる。団体の客なのだろう。入れ替わり立ち代り座敷からトイレに行く者、注文をしに来る者の姿が見られた。少々、落ち着かない気もしたが、反対にしーんと静まり返った店だったらミサは緊張してしまうだろう。

綺麗な仲原の横顔を眺めながら、ミサは、本当に仲原のことが好きになつていく事を実感した。ごつごつとした長い指、こちらを覗き込む涼しい目、病院ではみられない彼のいたずらっぽい表情。時間よ止まれ！ とはこの事なんだなあ、とミサは1人頷いた。

「何、頷いてんの？ お前、変わつてるな」

「変わつてなんかいいです」

「天然！ この魚と一緒にで」

「あはは、先生。今、自分でも上手い事言つたと思つてるんですよ。ださださだよ」

「なに」

仲原がミサの頭をぽんつと押したので、バランスを崩したミサの手が、隣のおじさんの陣地に入ってしまった。一瞬、おじさんはミサをきつと睨んだが、何事も無かつたようにちびちびと飲み直した。

「あ、すいません」

謝るミサに、横で仲原はくくくつと、また笑いを押し殺した。

「いらつしやい」

また、客が来たようだ。魚が美味しい事で知られているこの店の

中は活気で満ちている。客が来て、帰る、入り口の戸は開いたりしまったりと大忙しだ。

ミサが入り口の方をちらりと見ると、どこかで見たような2人の男が入ってきた。

「あ！」

とつさにミサは肩をすばめて、頭を下げ、顔を隠した。

「今度は、何やってんの？」

「げ、げ、げ」

「げ？」

入ってきた2人の男は外科の医者だ。病院帰りのようで、スーツを着ている。仲原もようやく気がついた。

「で、何でそんなに驚いてんの？」

「だって」

「いいじゃん、付き合ってるの知られたって。不倫してるわけでもないし、今時、職場恋愛禁止ってわけでもないだろ」

仲原が言った「付き合ってる」の言葉がミサの頭の中をぐるぐると回った。私達、付き合ってるんだ。言葉にして聞くと、何かもの凄い事のような気がして舞い上がった。

しかし、病院の近くにあるこの店。何も考えずに来てしまったが、4病棟の誰かにでも見られたら、と思うと気が気でならなかった。

仲原と付き合っている事がわかれば、山中や恵に^{バンチ}からかわれそうだし、ましてや亜里沙にいじめられかねない。

そう思った途端だった。

「いらっしやい」

また、威勢の良い声が上がった。少しソワソワしながらも、半分だけ入り口の方に顔をやり、伏目がちに横からチラリと見た。

（こんなことって……）

第24話 不安

ミサがチラリと覗いた先にいた2人。
加藤とお宮の2人……。

（どうか、私たちに気がつかないで）

焦っているミサに対し、仲原は何も気がつく様子もなく、釣りの話などをして1人盛り上がっている。

「大学ん時は、バス釣りなんかもしてみたけど、やっぱり、食べられる魚の方がいいから海釣りに替えたんだけ。だけど、釣ってきて料理できない事に気がついて、はは」

「あはは……」

気が気でないミサは、適当に相づちを打ちながら、加藤とお宮の2人の姿をチラチラと確認した。店内はいっぱいで、どうやら入り口で待たされている様子だ。

「カウンター空きましたっ！」

丁度、横のおじさんが立ち上がって、最後の一杯をぐびぐびと流しこんでいるところだった。最後まで飲んでから立てばいいのに、なんて思ったが、同時に空いた席の意味する事を想像し、ぞつとした。

ともあれ、空いたのは1つだけ。まだ、加藤とお宮は待たされている。

（どうか、このまま帰ってください）

ミサは何事も起きないようにと想うばかりだったが、運悪く店員が声をかけてきた。

「すみません、席を1つずれてもらえませんか？」

ミサは右隣のおじさんがいた席にずれた。

仲原の左隣にいた人も向う側へずれた為、2つの席が確保された。

（どうしようー）

「カウンター入りまゝす！」

とうとう、仲原の横に2人が案内されてきた。驚いたのは向うも同じことだった。

「あの、久しぶり」

声をかけたのはお宮の方だった。

「おう」

仲原はいつもの渋い顔に戻り、素っ気なく答えた。

加藤はというと、軽く会釈をするだけで、しまった、という様な表情を浮かべている。そして、ミサの姿を見ると何かを言いかけてやめたような素振りを見せた。

結局、仲原の横にお宮が座る形となってしまった。

店内の喧騒とはうらはらに、ここだけ空気の流れる音が聞こえるようだ。すっかり黙ってしまった仲原だったが「もう1本」と酒を注文した。

気にしないようにと思うが、余計気にしてしまつて、チラチラと横目で確認するミサだったが、お宮の方も気になるらしくチラチラと仲原の方を見ている。話の糸口を捜しているようにもみえた。

加藤が、席を離れた時だった。

「あの、仲原くん」

ついにお宮が口を開いた。

「私、やっぱり後悔してる」

「……」

小さい声であつたが、耳を澄ませていたミサには、はっきり聞こえた。彼女は何も答えない仲原をみつめながら続けた。

「病院の方？」

ミサの方を見ながら、お宮は仲原に聞いた。ミサは横で頷き、挨拶代わりに軽く会釈をした。お宮はミサの会釈には目もくれず、ただ、仲原を見つめている。

「ああ」

仲原も頷いた。彼女はほつとした様に「彼女じゃないんだ」と嫌味にもとれる様な口調で言い放った。

「まあな」

仲原の答えにミサは驚いた。てっきり彼女だと紹介してくれるかと思っただけに、彼の真意が全くわからなかった。

それにしても、ストレートの黒髪、小さい顔、上品で知的そうな大人の女といった感じのお宮を目の前にし、やはり勝ち目はなさそうだと、ミサは勝手に判断した。そう思いはじめると、益々自分が情けなくなってきた、仲原の横にいて、勝手に彼女だと思ってしまった自分を馬鹿に思った。

喉元まで「帰ります」という言葉が引っかかっていたが、小心者のミサは言い出せず、事の成り行きを見守ることしかできなかった。加藤がトイレから戻ってきたが、お宮は一向に態度を変えない。むしろ、加藤とミサに見せつけるように、仲原の方を見つめた。

「お前、いい加減にしろよ」

黙っていたのは加藤の方だ。ただ、病院の近くの店で騒ぎを起こすわけにもいかないという気もあったんだろう。いたって冷静な口調だった。

「何を？」

お宮は加藤の方を向くと、長い髪がふわっと翻り、ほのかに甘い香りがした。

「何をって、自分が何をしてるのかわかるのか？」

「まーくんの方こそ、私が知らないと思ってるの」

「だから、何のことを」

「私、あなたが病院の人と何回も会ってるの知ってるし、馬鹿にしないでよ。あなたとは一緒にいられない。今日、言うつもりだったの。あなたが私の前に来るまでは、この人と、本当に幸せだったんだから」

仲原はそれまで、知らない顔をしていたが、話が自分のことに及ぶと、黙っていられないという風に席を立った。

「ちよつと来い」

仲原はお宮の手を引いて、店の外に連れて出た。

ミサは何が起きたのか全くわからなかった。2つ席をおいた加藤がため息をついている。ふと、ミサの顔を見ると「悪いとこ見られたな」と苦笑した。

「おあいそ」

加藤は勘定を済ますと、ミサに「デートだった？」と聞いた。今にも泣き出しそうな表情から察したのだろう。「ごめん、こんな事になって」とミサの答えも聞かずそう言った。

「どうするの？ 彼を待ってるの？」

加藤に聞かれると、益々不安が募った。もしかして、戻ってこないかもしれない。一体、何の話をしているのだろう。2人が出て行ってから、まだ5分も経っていないが、ミサの頭の中は黒い靄でいっぱいになった。

答えられないミサに、加藤は「もう帰るから」とミサの肩にそつと手をおいて出て行った。

加藤が帰ると、あつという間に店員がやってきて後片付けをする。加藤とお宮がいた席はすっかり片付けられ、店員は「こちらも帰られましたか？」と仲原の席も片付けようとした。

「あの、戻ってきますので、このままで」

そう言ったミサの声は、涙声になっていた。

（貫一くんとお宮……どうなっちゃうんだろう）

「何で、何で私じゃダメなの？ あの時だって、あの人が勝手に部屋に入ってきて……。何度もあの時のことを、説明しようとしても電話はつながらないし。仲原君が怒るのも無理ないけど、私も辛かったんだから」

「確かにあの時は驚いたけど、怒ってなんかいない」

「え？」

「俺、お前があいつと一緒にいた時、今もそうだけど、これっぽっちも嫉妬の感情が出なかった。好きだったかもしれないけど、愛してた訳じゃないと思う。あの事で自分の気持ちに整理がついた。もう、本当にこれで最後にしたいんだ」

「やだ」

「頼む。きちんと別れなかったのは、自分も悪かった。今までのことは感謝してる……」

「どうしてそんな事を言うの？ そんなにきちんと別れたい？ あと腐れなく？」

おしとやかで穏やかな元彼女の姿は、今の形相からは想像もできない。仲原は一瞬、その表情にぞっとしたが、同時にそれだけの愛情が自分に注がれていたことを知った。

「ごめん。俺」

「やっぱり、さっきの娘と付き合ってるのね」

「お前と俺が別れる事と彼女とは関係ないだろ」

ミサの事になると、仲原は口調を荒げた。

「やっぱりね」

こうなると、彼女の顔は益々ゆがみ般若のような面持ちとなった。仲原は彼女をそうさせてしまった自分を情けなく思った。

10分ほど話しただろうか。話の間中、彼女は仲原を見据えた。

今度は泣いたりしなかった。すがりつく事も無かった。ただ、その目は狂気に満ち、仲原は怯んだ。

「ごめん、謝るしかない」

「後悔……するわよ」

最後の方はほとんど聞き取れないような声で捨て台詞を残し、彼女は去って行った。

その時、仲原は最後まで聞き取れず、内容を理解できないでいた。ただ、店の中で待つミサが気になって仕方がなかった。

第25話 不器用な

カウンターで1人ポツンと座っていたミサは、空いた席を眺めながらため息をついた。必死にすがりつく彼女の姿を思い出していた。その時は、あそこまで人を好きになれるものかと思ったが、今は彼女の気持ちがなんとなくわかる。失いたくない。そう思わせる男^{ひと}だ。仲原は。

それにしても、最初見た時とはまるで違う雰囲気放っていた彼女に、なにか違和感を感じた。何がだろう？ 異様な視線だろうか。普通ではない、何かを感じミサは震えた。

「いらつしゃいませー」

店の戸が開き、客が入って来る。その度に、仲原かと思い振り返るが、違うとわかると不安は募り、店の外まで走り出したい衝動にかられた。店の外で話しているであろう、仲原と彼女の事が気になつて仕方がない。

「すみません。お勘定を」

ついに、ミサは耐えられなくなつて席を立つた。仲原が話しに行つて15分も経っていないだろう。しかし、待つていることが辛くなつたのだ。先ほどのやり取りを聞いていたのか、店員は哀れむようにミサを見た。「ありがとうございますー」と威勢の良い声を背中に受け、ミサは覚悟を決めて外に出た。

外に出ると、澄んだ空気の匂いがした。ミサはガラガラと店の戸を閉め、キョロキョロと辺りを見回した。

丁度、コツコツと早いリズムで、ヒールの音が去つていった。その先を見ると、彼の姿があつた。彼もまた、店へ戻ろうと、視線をこちらに向け、ミサの姿をみつけた。

彼はミサの方へ駆け寄ると「ごめん、大丈夫？」と優しく声をかけた。今にも溢れ出しそうな涙をこらえながら、ミサは首を横に振つた。

「大丈夫じゃないです」

「ごめん」

ミサは仲原の言葉に頷いたものの、店での仲原と彼女のやり取りが気になって、知らん振りをして家の方へ歩き出した。

「彼女じゃないんだ」

「まあな」

そんな2人の会話を思い出して情けなくなった。私はあなたの彼女ではないの？ という問いがぐるぐると頭の中を駆け巡った。後から、仲原がついて来ているのがわかる。今すぐ、振り返って、聞き返したい。私はあなたの彼女なんですか？ と。

ミサは仲原から逃げるように、どんどん早足になっていた。いつもそつだ、何か事が起こると自分から逃げ出してしまふ。問題に直面するのが怖い。いつも、そうやって逃げてきた。

「おい、待って」

後ろから静かに歩いてきた仲原だったが、どんどん離れていくミサに追いつくように走りだした。

ダダダダダ

仲原が走り出すと、ミサも意地になって走り出した。とうとう涙は溢れ出し、ぐすぐすと鼻は流れるし、こんな顔見られたくないと、もうそれは意地になって走りだした。

「うっ」

後ろを走る仲原の足音が止んだ。

「え？」

ミサが振り返ると、仲原が道路にうずくまっている。

「ちょっと、どうしたの、先生、ちょっと……」

ミサは仲原に駆け寄り、必死に仲原の体を揺さぶった。突然のことで、全く状況がつかめなかったが、必死だった。

「先生、大丈夫？　ねえ、どうしたの？」

応答がないので、益々慌てたミサは、うずくまってる仲原の顔を持ち上げた。

「先生、しっかりして！　ね、先生、ちょっとどうしたの？」

ミサは仲原の鼻の辺りに手をかざして呼吸を確かめた。

全く息をしていない事に気がついたミサは、慌てて携帯をとりだした。

「先生、しっかりしてね、救急車呼ぶから」

慌てているので、なかなか携帯がかばんから出てくれない。額に汗が噴出するのが自分でもわかる。なんとか携帯をとりだし番号を押そうとしたが、ロックがかかっていて押せない。

パニックになっていて、ロックをはずすのも一苦労だ。

ぷはあゝ

横でそんな音がした。そして、くくくくくつといつも笑い声。笑い声はどんどん大きくなって、ミサは目を丸くした。

「先生、息止めてたでしょ。酷い！」

やっと状況がつかめたミサは思いっきり仲原の肩をバシッと叩いた。彼は「イタッ」と言ったあと、ミサの顔を見てまったくくつと笑った。

「本気で心配したんだから」

「人工呼吸してくれると思ったのに」

ミサは耳まで真っ赤になって固まってしまった。

やれやれ、と仲原はひざについた砂を払いながら、立ち上がった。「帰ろっか」仲原はそう言って、座り込んでミサの体を抱き起こした。

「ねえ、先生」

「ん？」

「私。先生の事、何も知らない」

「ん……」

「私って」

ミサは決意したように、仲原の目を正面から見て言った。

「わ、私って、先生の彼女なんですか？」

先ほど走ったので、まだ、呼吸は乱れたまま。肩を上下させて、息を整えながら、仲原の答えを待った。

住宅街の中を通っている一本の抜け道。街灯が少ないため、辺りは暗い。近くにいる彼の表情がようやく読み取れるくらいだ。相変わらず、彼の顔は優しく、そして、どこか寂しげで、何故か遠い存在のように感じた。

「はじめてなんだ」

ようやく仲原が口を開いた。さっきのふざけた表情とは違い、真顔になった。彼を寂しげに見せているのは何か、ミサはまじまじと彼の顔を見た。

いつもの犬が2人に向かって、ワンワン吠えたてる。2人を追出すまで、吠えてやる、そんな感じだ。話の最中だったが、あまり犬が吠えるので、家の中から住人が外を確認しに出て来た。

2人は苦笑して、歩きだした。話したいことは山ほどある。元彼女のこと、飾ってあった少女の写真のこと。話したい思えば思うほど、頭の中でいろんな台詞が浮かんでは消え、なかなか本題に入れない。何で、こんなに口下手なのか。ミサは自分の不器用さにイライラした。

それは、仲原も同じことだった。不器用な2人は、静かに歩くだけだった。お互いのことを想いながら。

歩いているうちに仲原のアパートが見えてきた。

多分、何時間あつても想いを伝えられそうもない。「送るよ」と仲原が言ったが、ミサは「おやすみなさい」と、自分からそう言うて別れた。

ミサは真っ暗な空を見上げ、ため息をついた。

星1つない空。こんな日もあるんだな、明日は雨かな。憂鬱な気分がミサを襲った。

（本当に今日は疲れた）

仲原のアパートから、ミサの部屋まで5分ほど。暗いので、少し

小走りで急いだ。

不意に携帯のメール音が鳴った。

ミサは思わず携帯を取り出した。彼からかもしれない。そう思ったミサは暗闇の中、立ち止まって画面に見入った。

ーそばにいて欲しい。愛してるー

第26話 愛の形

ーそばにいて欲しい。愛してるー

ミサは携帯を握りしめた。瞼を閉じて、彼の姿をそこに描く。やはり瞼の奥の彼も寂しげな表情をしていて、想えば想うほど、もろくはない彼の姿は細かい粒子になって消え去った。何故か、不安になったミサは、今来た道に戻って彼のところへ駆けて行きたい。そんな衝動にかられた。

暗闇の中でしばらく呆然と立ち尽くしていたミサだったが、意を決したように、くるりと向きを変え、彼の家の方へ歩き出した。はじめはゆっくりとした歩調であったが、彼の家に近づくにつれ小走りになった。

何か、嫌な予感がするのだ。彼が消え去ってしまうという不安。理由は分からない。ただ、仲原のことを愛している、そう確信した今は、余計不安が募った。

はあはあと息をきらしながら、路地から仲原のアパートの駐車場へ続く道を進んだ。

コツコツコツ……コツ……

駐車場では、ヒールの音が、自己主張をしているように響いた。丁度、車の影で隠れるような形で女が行ったり来たりしている。ためらうという訳ではなく、ただタイミングを狙っている。

それにしても、女の黒髪はより一層暗く、星1つない漆黒の夜空に融けこんでいくようだ。生気を失った様な全く表情のない彼女の手には、バッグの中にある鋭く冷たい物をつかんでいた。

その不気味な存在に気がつかないまま、ミサは彼の部屋の前に居た。大きく深呼吸をして。

トゥルルルルル

仲原が喋りだす前にといい、慌てて「先生。私、先生の前

います」と早口で伝えた。

カチャッ

ドアが開き、携帯を片手に持ったまま、仲原が出た。

ドアの前には、顔を赤らめて、必死にやってきたミサの姿。仲原はしばらく無言でミサを見つめたあと、身をかがめて、小柄な彼女を抱きしめた。柔らかいミサの髪に顔をうずめながら。そして、ミサの耳元でそつと言った。

「こんな想い……はじめてなんだ。大切な人……」

彼の腕がしっかりと自分を守ってくれている、そう感じた。大好き、愛してる、そんな言葉じゃなく、大切な人と彼は言った。ミサもぎゅつと彼をつかまえた。

カッカッカッカッ

女は、玄関先で抱きしめあう2人を凝視し、的の中心に向かって飛び込んでいく矢のように、走りはじめた。手に握り締めたナイフは、もはやバッグの外から出ていて、背中を向けているミサを狙っている。

仲原が気がついた時には、女はすでに近くまで迫っていた。

カッカッカッカッ

「恭子！」

仲原がそう叫んだが、彼女は止まることなく、ミサを狙った。

「やめろ」

「キャッ」

とつさに、仲原がミサを引き寄せ、体を反転させ、かばう様な形になった。

「何で、そんな子をかばうのよー！」

さっきまで無表情だった、彼女は、逆上して怒りを露わにした。その声はヒステリックで異様だった。

そして、ナイフの先は、行き先を決めかねているようにぶれた。「あなたが悪いのよ」

恭子は、恐ろしく低く静かな声で言った。彼女の視線は光を失っ

たかのように真つ黒で、どこか遠くの方を見ていたが、やがてあははははは……と狂ったように笑いだした。ミサには泣いているようにも聞こえ、恭子を憐れむように見た。

「その目が嫌なのよっ」

恭子は不意にミサを睨み、そう吐き捨てた。笑いが止んだ時、やとナイフは迷いから醒めたように狙いを定めた。

「やめてー!」

「馬鹿っ。やめろ」

グフツと呻き声がもれ、ゆっくり影が動いた。腹をつたって血が流れ出し、そこから伸びた脚にダラダラと血の線が何本も引かれる。しだいに立っていられなくなった足は2つに折れ、膝をついたあと、横にどさつと倒れた。

「あああ……」

騒ぎを聞きつけた住人が通報したのだろう。救急車とパトカーのサイレン音がけたたましく近づいてくる。住人が遠巻きに様子を伺っている。

「ね、しっかりして」

「う……う……」

先に、救急車が到着した。

腹部に刺さったナイフを見ると、救急隊員はお互いに、顔を見合わせた。

血に染まった脚からヒールを脱がすと、恭子を乗せた救急車は、サイレンを轟かせて走り去った。

血にまみれた彼女。それが彼女の愛の形。あまりにも1人よがりな哀れな姿がそこにあった。

まもなく、パトカーが到着し、チカチカと赤いライトが、呆然と立ち尽くす、ミサと仲原の2人の顔を照らした。

「事情を説明していただだけませんか」

その先はよく覚えていない。ミサは母親に付き添われ手術室の前で、祈るように目を閉じて座っていた。警官にしつこく質問されたせいか、頭の奥はキーンと金属の鳴る様な音でいっぱいになった。

仲原は手術室の中だ。

「ミサっ。どうしたのよ」

福永は化粧もせず、慌ててやって来た。そして、母親に肩を支えられ、力なくうつむくミサに声をかけた。

「まことちゃん。夜中にすみません」

「おばちゃん、一体？」

ミサは、がつくりと肩を落とし、うつむいたままだ。

福永はミサの傍に座った。丁度、母親と福永がミサを両方から支える形となった。

一瞬、自分を体全体で守った仲原の感触がよみがえった。あたたく、強く。彼は一体どうなってしまうのだろう。そして自分も。

割腹自殺を図った恭子。明日になったら、この事件は病院中に広がるだろう。そうすれば、仲原の立場は益々脅かされるだろう。嫌味に笑う高津の顔が、ミサの頭に浮かんだ。

ミサが病院に到着したとき、当直師長が怪訝そうな表情をし「あなた、ここの看護師だそうね。何病棟？」と言ったあと「今から4病棟の師長に連絡しますから、きちんと事情説明しなさい」と冷たく言い放った。問題を起こした看護師、そういう風に扱われたことが辛かった。

人を救うはずの看護師。命を救うはずの存在が、1人の人間の命を縮める結果となった。ミサには非はない。母親も福永もそう言っ

て彼女を励ましたが、ミサは罪悪感でいっぱいになった。

「渡辺さん」

病院に到着してから30分程してから、4病棟の師長が現れた。

「お世話になっていきます、ミサの母親です」
師長は母親から事情を聞くと「困ったわね……」と少し考えたあと「とりあえず、落ち着くまで休みなさい」と続けた。

「あの、師長さん、ミサはミサは関係ないんです」

福永は師長に言った。

「理由はどうであれ、人の命に関わる事件に関わっているということ。病院の方針が決まるまで、私にはどうする事もできないわ」

師長はうなだれているミサの肩にそつと手をおいた。

「ところで、相手の方のご家族の方は？」

「いえ、まだ……到着しておられないようです」

「おかしいですね」

2時間ほど経過しただろうか、バタバタとICU（集中治療室）のナース2人が、輸送車ストレッチャーを押し手術室の中へ入っていった。

それから10分程しただろうか。スーッと静かに手術室のドアがスライドした。

思わず、ミサは立ち上がった。

恭子ストレッチャーを乗せた輸送車ストレッチャーがミサたちの前を通り過ぎた。

後ろから外科の医師2人ストレッチャーが輸送車の後ろを続いた。通り過ぎながら、緑色の手術着に包まれた彼らは、興味深そうにミサの方へ視線を向けた。

きつとこれから、こうした興味の目にさらされるのだろう。2人は。

「事情を聴いてきますね」

師長はそう言って、手術室の中へ入っていった。

第27話 一身上の都合

プシュー

手術室のドアが開き、師長が戻ってきた。

「出血の割りには、創は浅いそうよ。命にも別状ないみたい……」

「はあー、良かったあ」

ミサの気持ちを代弁するように、福永が大きな声を出した。横にいるミサの母親も、ほっとした様子で師長に頭を下げる。

「渡辺さん、大丈夫？」

さつきから、うなだれたままのミサを気遣って師長が声をかけたが、ミサは頷くのが精一杯だった。気になるのは手術室の中にいる仲原のこと。この先、彼にどんな処分が待っているのかを考えると、いてもたってもいられない気分になった。

夜中の手術室の前の廊下はひっそりと暗く、ミサの母親がついたため息の音だつて響いた。

「あの、けがをされた彼女の名前は？ ご家族の方に何て言ったら

……」

「おばちゃん、何、言ってるの！ ミサは被害者なんだからね。謝るとしたら、向うの方なんだから。おばちゃん、しっかりしてよ」

「佐藤 恭子さんって言ってたわね」

師長は手帳を取り出してそう言った。

「彼女の父親は、どうも市議会の議員さんみたいでね、連絡したそうなんですけども、来れないって言ったみたいですね。受付から、手術の承諾書や、必要な書類があるから、どうしても来て欲しいと電話したそうなんですけども、断られて……」

「なんちゅう家族や！ で、母親は？」

福永は信じられないという顔で師長の顔を覗き込んだ。

「そこまで詳しくはわからないんだけど」

「あ、ね、そうそう」

福永は急に何かを思いついたのかすつとんきょうな声をあげた。

「何？ どうしたの？」

「師長さん、か、加藤さん……丸山製薬の。彼女と付き合ってるみたいだったし、加藤さんに聞いてみたら？」

師長は訳がわからないという表情を浮かべ、困惑している様子だった。

「まあ、とにかく今日は帰りましょう。明日の決定を待って……連絡しますから」

決定という響きが、ミサの肩に重くのしかかった。

「ちょっと、聞いた？ 手術室の子から聞いたんだけど！」

「え？ うつそー？ 渡辺さん、仲原と付き合ってたの」

日が明けて4病棟では、仲原とミサのことでもちきりになっていた。ナースの情報網というのは恐ろしいものがある。

「渡辺さん……彼女から仲原を奪い取ったってことなの？ おとなしそうにみえて、わかんないね」

「それでね、その自殺未遂の彼女が、加藤さんのね」

「えー！」

山中が、どこからか仕入れてきた情報を話し出すと、皆驚いて、首をかしげた。

「わかんないもんだね」

「うん、わかんない」

「皆さん、ちょっと静かに。申し送りを続けてください」

師長が皆を制するようになり、大きな声で言った。

「師長！ 今日渡辺さんは休みなんです。どうしてですか？」

わざと、山中が師長に問い正した。

「一身上の都合です」

「そんなあ」

理由を聞きたがってるほかのスタッフ達も口々に不満をもらした。

「一身上の都合って、一体どれくらい休むんですか？」

「彼女の夜勤の代わりなんてしたくありません」

「そうそう、なんで事件を起こした人のせいで、私たちが忙しい思いをしなきゃならないのよねえ」

恵は隣にいる角野に相槌を求めたが、彼女は話に参加しようとしてなかった。山中は彼女の態度を見逃さなかった。

「ねえ、亜里沙ちゃんさ、加藤さんから何か聞いてないの？」

山中の意地悪い視線が角野に向けられた。訳のわからない他のスタッフは不思議そうな顔をして2人のやり取りを聞いている。しかし底意地の悪さでは、角野の方が一枚上手である。キツと山中を睨み返すと「私は何も関係ないわよ」と、さらっと答えた。

一瞬ひるんだ山中だったが、弱い立場の人間をさらに追い込む性分らしい。「加藤さんと付き合ってたくせに」と言い返した。

「そんなの嘘よ」

角野は、フランス人形のような顔をふいっと持ち上げて、山中をこバカにするように見た。あんななんか、誰も相手にしてくれないくせに、と言いたげな表情だった。

「何よ、バカにして！ とにかく、こんな乱れた職場でなんか働けません！」

山中は師長につっかつた。

師長はやれやれという表情をして、ため息をついた。

「事実がはつきりしていない時点で、いろいろな憶測が飛び交うというのはどうかと思います。渡辺さんが関係しているのは事実ですけども、彼女はむしろ被害者のような印象を受けました。まあ、今の時点では何とも言えませんが。皆さんも同じ病棟の人間として、見守ってあげてください。彼女について、少し誤解している部分があるのでは？ ね、山中さん」

「見守るつつつてもねえ」

山中は、納得がいかないという様に、眉間に皺を寄せた。

「皆さん、時間は過ぎてますよ。患者さんに迷惑をかける訳にはい

かないでしょう。きちんと持ち場についてください」

トゥルルルル

内線電話が鳴った。看護課からの呼び出しだ。師長は2、3回深呼吸をしてナースステーションをあとにした。

いつものように患者の清拭を済ませ、検温に向かうスタッフだったが、暇があれば事件の話題になった。山中は朝の出来事を消化できない様子で、仕切りに他のナースたちに話しかけては同意を求めようと必死だ。

「でね、ここだけの話だけど、亜里沙ったら、加藤さんと今でも付き合ってるはず。その加藤さんに彼女がいたんだから、やられたわね、あの子も」

「えーでも、その自殺しようとした人も加藤さんと付き合ってた、仲原先生が好きなんでしょ？ 何かよくわかんないですウ。で、悪いのは誰なんですか？」

「ん？ んー」

「ちよつと、あんたら、点滴放りっぱなし！」

恵のドスの効いた声が響いた。山中は肩をすぼめて、点滴にとりかかり、一緒に話していた若いナースは「すみません」と何度も頭を下げた。

その頃、ナースの休憩室では、角野が加藤に連絡をとっていた。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「あー、亜里沙か。さっきもいろいろ聞かれたよ」

「誰に？」

「師長。話があるから病院に来て……困ったこととしてくれたもんだよ。恭子のやつ」

「それで、私と付き合ってたってこと話したの？」

「いや」

「そう、良かった」

「体だけの付き合いだなんて、言える訳ないしな」

加藤はそう言ったあと、皮肉っぽく笑った。

「あんた、最低ね」

「おまえだって、恭子のこと知ってて……だろ？」

「……」

「どっちにしても、お前と関係してるのがわかって、担当をはずされるのは間違いないし、恭子の自殺だって俺には関係ないことを証明しないと、俺の立場がまずくなる。何とかしないとな」

「あんた、自分の事しか考えてないのね。それに、彼女が、他の男を好きで自殺未遂したのに、何とも思わないの？」

珍しく冷静な亜里沙が声を荒げた。

「何とも思わないはずがないさ……仲原という医者。あいつだけは許さない……」

「何で？ 恭子さんのことを好きだから？」

加藤はふふつと鼻で笑って「いや、俺のものをとったから」と呟いた。その声は傲慢で、自分勝手に子供じみていた。亜里沙はぎょつとして、背筋が寒くなるのを感じた。

「もう、連絡してこないで！」

亜里沙はそれだけ言つと、パチンと勢いよく携帯を閉じ、バッグの中に放り込んだ。

第28話 雨

面会謝絶と札のかかったドア。

恭子の傷は浅かったらしく、酸素も心電図も、はずされていて、朝にはICU（集中治療室）から普通の病室へ移されていた。仲原はドアをそつと開けると、恭子が寝ているbedの横に立っていた。「何で……こんなこと……」

恭子は普通に寝ているかのように、穏やかな表情で眠っている。昨日から一睡もしていない仲原は、白衣のまま、疲れた表情だ。傍にある椅子に腰かけ、元彼女の寝顔をマジマジと眺めたが、哀れな女、それしか感じる事ができなかった。今となっては好きだったかどうかとも思い出せない。

外は雨。シトシトシトシトと聞こえてくる雨音が静かに心の奥で響いた。古い病室は、何か湿気臭く陰気で、というか、仲原の目に映るものが憂鬱だった。なぜ、彼女は自殺という手段を選んだのか。いつその事、自分を刺してくれた方が気が楽だ。仲原はそう思った。

20分程、横にいただろうが。立ち上がる気にもなれず、ずっと窓の外と恭子の顔を代わる代わる眺めていた彼は、深くため息をついて目を閉じた。

あの日も雨だった。

「先生！ 先生！ ダメだ。ダメだ」
遺体の横にすぎる少年。

変り果てた遺体は、修繕されていたが、文字通りボロボロで目を背けたくなる程だった。遺体の両親であろう2人の男女は、顔を歪め、周りも気にせず大きな声で泣いていた。

ウオオオオオオオオ！ウオオオオオオオオ！と。何か動物が吠え

るような、そんな声だった。遺体の同僚であろう、若い医者達が続々と遺体の周りに集まってくる。

「何で、自殺なんか。バカ野郎！ 小園！ バカだ、お前はバカだー！ ううう」

1人がそう泣き崩れると、周りの者たちも、口々に、何で、何でだ？ と疑問の言葉を漏らした。

外は降りしきる大雨。横殴りの雨が窓をたたきつけていた。

「お棺が到着しました」

葬儀の人間だろう。彼らは無残な遺体に驚きもせず、慣れた手つきで棺に納めた。黒いスーツは雨に濡れ、髪からも水が滴りおちていく。少年はその光景に身震いをした。

棺を先頭に、ゾロゾロと白衣の群れが続いた。裏の出入り口へと白い線は続いた。

誰も傘をささず、横1直線に並んだ医師たちは、車が走り去るまで深々と頭を下げ、車が消え去ったあとでも、誰も頭をあげようとしなかった。

少年は、1人遺体が安置されていた部屋にいて、動けずにいた。

それは、息もできない位。

バタバタと、時折激しく窓をうつ雨音に、我に返った少年は、やっと涙が滴り落ちるのを感じた。冷たい頬にあたたかい涙がつたう。「死ぬなって言ったのは、先生の方じゃないか……」

力なく呟く少年。

それは、10年前の仲原。

彼は、今、恭子のbedの横で立ち上がれなくなっていた。

「失礼します。あつ」

検温の為、訪室したナースは仲原の姿を見ると、いったん開けたドアを閉めようとした。

「おいっ！」

「ハイ」

「検温だろ？ 続けてくれ」

やっと仲原は、椅子から立ち上がると、ドアの方へと歩いて行った。

「行かないで」

細い声が仲原の耳に届いた。

「あ、あの、やっぱり、私、後で来ますので」

検温にきたナースは、慌てて病室から出て行った。

仲原はドアの方を向いたまま話しはじめた。

「何でこんな事したんだ」

「私……」

「くそっ」

仲原は自然とこぶしに力が入るのがわかった。唇はきつと固く結ばれ、目は閉じたままだ。

「私……ごめんなさい……あなたが誰かのものになる位なら……」
バンツと壁を殴る音がした。

未だ、恭子に背を向けたままの仲原の背中では怒りで震えている。

「死んだ方がまし……っていつつもりか！」

「……」

「どうなんだ。これから先も、俺が傍にいなかったら、お前は死んでしまうのか！」

「……」

いつも静かな仲原が、怒りに震えている。感情を出したことのない仲原が自分に向けて怒っている。恭子は、傷の痛みも忘れ、思わず体を起こした。

「あなたが他の誰かを好きだなんて……私、死ぬしか……」

仲原は動きを止めた。

「死ぬしかなかった……？ お前のこと……理解できない」

一度だけ、このとき、一度だけ。振り返った彼の眼には涙が浮かんでいた。

「俺は、大事な人間を残して死んだりはしない！」

とり返しのつかない事をしてしまった、と恭子が思ったときには、

もう手遅れだった。彼の心は完全に彼女のもとを去っていった。

仲原は、早い足取りで、医局の自分の机に向かった。

医局に入ると、外来日ではない医師が数人、新聞を読んだり、資料に目を通したりしていたが、仲原に気が付くと、一斉に視線が仲原に集中した。

「仲原！ 院長がじきじきに来てたぞ。早く行ったほうがいいぞ」

こう、忠言してくれる者もいれば、「仕事覚えるうちから、女なんてな」とからかう者もいた。仲原はまるで何も聞かなかったように、医局の机に向かった。

積まれた資料の山。

今まで、誰よりも勉強をした。

人の役に立つと信じて、がんばった。

仲原は目を閉じた。

「お兄ちゃん、あのね、小園先生つたらね」

「なんだよ、また病院の話か。テスト中だから、あっち行ってくれないか」

その頃は、まだ、妹の病気が重いものだとは思っていなかった、10数年前。はじめは、貧血としか両親から聞いていなかったのだから無理もない。

「ねー、お兄ちゃん」

甘えてくる妹を少しうつとおしく思いながら高校生だった仲原は教科書を閉じた。

「何だ。少しだけなら聞いてやる」

「あのね、クリスマスにプレゼントくれるって！ いいでしょー」

「もうすぐクリスマスだもんね。でも、何でだ？ クリスマスに病院にでも行くのか？ また、お前だまされてるんだよ」

「小園先生は、そんな人じゃないもんっ」

「で、何が欲しいんだ？」

「お兄ちゃんも買ってくれるの？ うーんとね……そうだ、インラ

インスケートって流行ってるの。ほら、近所の圭ちゃんだって、な
つちゃんだって、道すべってるでしょ。ピンクのかわいいなあ」

「わかった、わかった。買ってやるから」

「やったー！」

その時の妹。いつになく甘えてくる妹。もっと、いろんな事を伝
えたかったに違いない。何も気がつかずに、適当に話をあしらって
いた自分が悔やまれてならない。

長かった髪の毛を急に切った妹。部屋の中だというのに帽子をか
ぶっていた。もっと早く気付いてやるべきだった。

妹の入院を知ったのは、次の日。抗ガン剤の治療で白血球が下が
ったため、と母親から説明された。

「何だよそれ」

「亜美は、白血病なの」

「貧血じゃなかったのかよ」

「……治るわよ、きっと。あんな可愛い子を連れてったりしないで
しょ、神様も」

「何だよ、それ……クリスマスには帰って来れるのか？」

「多分、無理ね。1ヶ月はかかるでしょ」

母親のため息が聞こえた。やめてくれ、何だ、何なんだ。これが
現実なのか？今まで、妹なんか、わがままで、面倒くさくて。でも、
何なんだ、この気持ちは。がらんとする。

スケートを買ってやるといった時の妹の笑顔。

幼い彼女は、治ると信じていたに違いない。退院すれば元の体に
戻ると信じていたんだろう。死は容赦なく、無差別に、訪れるもの
だ。

仲原は目を閉じた。

この先、どんな処分があるとも、自分は負けはしない
いずれ死んでしまう人間達

その人たちが死んでいく時、自分は医者として、やるべき事がある
やらなくてはいけない事がある

みんな忘れていくが、死はいずれくる

死んでいく人たちへ

怖がらなくていい

傍にいる

君が君らしいままで、天国へいけるように
願っている

第29話 復讐

ミサは何をする訳でもなく、ただ、考えていた。母親や、福永と一緒に居たが、1人になりたくて帰ってもらった。

シトシトと雨が降っていて、昨日の星1つない空を思うと頷けた。真面目すぎる彼女の頭の中には、救急車に運ばれる血だらけの恭子の場面が何度も繰り返される。彼女は何で、死を選んだんだろう？大きな疑問が頭の中を埋め尽くした。

ふいに携帯が鳴った。

仲原からかもしれない、そう思ったミサは、慌てて電話に出た。

「はい……」

「あの、大丈夫かしら？」

電話は師長からだった。処分が決まったのだろう。ミサの携帯を持つ手元が震えた。

「結論から言うわ。あなたには非が無い。そういう事」

「働けるんですか？」

「ええ。ただ、事件のことで4病棟全体が混乱しているというか……あなたに対する風当たりが強くなることはあると思うの。いつからでも働いてもらってもいいけども、あなたの事が心配だわ。2、3日、休んだらどうかしら？」

「……はい……ありがとうございます。で……」

「何？ どうしたの」

「先生は？ 仲原……せん……」

ミサは恐る恐る聞いた。本当に怖かった。自分の事よりも、彼がどうなってしまうのか、一番不安に思っていた。

「まだ決まっていないわ。医局の中ではいろいろと考えがある様だから……」

「わかりました」

ミサは師長からの電話を切ると、とっさに、仲原の携帯へかけた。

呼び出し音が空しく聞こえてくるだけで、彼は出なかった。

「せんせ……」

ミサはそう呟くと、灰色の窓に視線を移した。

「で、君は今回のこと、どう説明してくれるのか？」

仲原は院長室に呼ばれていた。院長の横には高津と、他の部長クラスの医師が数名、腕を組み、顔をしかめて仲原の方を見ている。誰もが高圧的で、仲原のことを見下した様な表情だ。高津がここぞとばかりに口を開いた

「それにしても、何だね。研修医の立場で、君もやってくれたね。病院のイメージが悪くなるような、こんな不祥事初めてだよ」

「は？ 不祥事とおっしゃいますと？」

堂々とした仲原の姿は、取り巻きの医師たちをより一層苛立たせた。

「君は佐藤恭子と付き合い合っていないながら、病棟のナースに手をつけた。それが自殺未遂事件の真相ではないのか？」

「違います」

「ほほう。何が違うんだね」

「佐藤恭子さんとは、確かに付き合い合っていました。が、別れました。彼女……渡辺さんと付き合い合う事になったのは、その後です」

「だから、浮気はしていないと？」

「はい」

「君！ 言い訳するのかな。こちらの情報では、君と佐藤恭子は付き合い合っていて、病棟のナースに手を出したという事がわかってるんだよ」

「嘘だ、誰がそんなこと！」

仲原は自然に力が入っていくのがわかった。いつの間にか、拳が固く握られていた。

「往生際の悪い奴だ」

「医師という職にすがりつきたいのはわかるが、みつともない」

周りの部長連中はざわざわと仲原を罵倒する格好となった。

「君は知っているかもしれないが、自殺未遂を起こした、佐藤恭子の父親は、県議会の議員でね。先ほど電話があつたんだが……こんな野蛮な医者は辞めさせてくれと、そういう事を言ってきたんだよ。真実はどうであれ、君のせいで1人の人間が死を選ばざるを得なかったのは間違いないのだから」

吐き捨てるような言葉の数々に、仲原の眉はキツと吊り上った。

しばらく黙って聞いていた仲原は、院長の取り巻きではなく院長を捉えて言った。

「彼女の自殺未遂の件は、自分が至らなかった、それだけしかいえません。しかし、私は、医者としてやるべき事があります。だから辞める訳にはいかないんです」

「罪は認めるけども、償わない。そういう事か？」

高津が嫌味にそう言った。

「面白いな君は」

黙っていた院長が初めて口を開いた。

取り巻きの医師たちは、首をかしげて院長の方に目を向けた。

「個人的には、君のような人間は好きだ。しかしながら、病院はイメージが大事だという事は君にも理解できるだろ？」

「辞めるという事ですか？」

「そうなるな……」

院長は、立ったまま、こちらを見ている仲原にそう言った。

取り巻きの医師達は口々に当然だ、というような言葉を交わし、立ち上がって、仲原を横目で見ながら院長室から出て行った。

仲原は、そろそろ出て行く部長連中には目もくれず、しばらく院長の顔を見据えた。院長も仲原の顔をまじまじと見る。

ザーザーッ

静かな室内に、不意に激しく降る雨の音が響いた。

ザザーーーーーッ

「君、あの時の子だね……あの日も雨で……」

「え？」

「君がうちの病院に就職すると聞いた時は、本当に驚いたよ」

仲原はまだわからないのか、記憶のかけらを探していた。

雨、病院……子供……白衣の列。

「小園君のことは残念だったよ。今も思い出す」

「院長？」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

病室では、まるで呪文のように、ごめんなさいを繰り返す恭子の姿があった。

何てバカな事をしたんだろう？ これで完全に仲原は去っていった。私を軽蔑して。2度と戻って来ない。嫌われた。助けて。行かないで。

そんな言葉が恭子の頭の中を埋め尽くす。

トントントン

ドアをノックする音が聞こえた。

「仲原……くん！」

恭子は、がばっと起き上がったが、そこには加藤の姿があった。
「参ったよ」

恭子は顔を背けた。今は何故か、顔を見るだけで吐き気がする。
アレルギー反応のように、体中が嫌悪感でいっぱいになった。

「師長に呼ばれて、さんざん聞き出されたよ。だから、言っちゃった。仲原がお前と付き合っていないながら、病棟の若いナースに手を出したってさ。安心しろよ。仲原も、お前が殺したいほど憎んでいる渡辺ミサも終わりだよ」

「……ちがう」

「それで、話なんだけど。俺達も終わりにしないか？ 他の男のせ

いで自殺未遂をしかけた女と一緒に居るほど俺もバカじゃない。それに」

加藤は急に声色を変えた。

「俺、この病院の担当をはずされた……正直、参ったよ。ほんと、怖い女だよ」

自分の人生を狂わせた男が目の前にいる。しかも、自分に対して謝罪するどころか、罵ってくる。この男。この男さえいなければ今でも仲原と平穩に暮らしていたかもしれない。許せない。許せない。「あははははは」

狂ったように笑いはじめた恭子に驚いたのか、加藤は後ずさりをした。

「やめろ！ おかしいぞお前」

「母親は父親のせいで自殺したのよ！ あはははは。その後ね、父親の慌てる姿つたらたまらなく可笑しくて。あなた知ってた？」

ずりずりと加藤に近寄る恭子。美しかった面影は消え去り、その顔は狂気で満ちていた。

「あなた、知ってた？」

「何だ。正気に戻れ！」

「自殺って最大の復讐なのよ」

加藤の顔が凍りついた。

ポタポタポタポタ

床に落ちた血の赤い線を辿ると、恭子の口唇に辿りついた。真っ赤に染まった口角がわずかに動き、不気味に笑った。

ボタンと大きな音をたて、恭子は、直立の姿勢から、後ろへそのまま倒れた。スローモーションの様に。

「バカ、いい加減にしろよ……」

「どうしましたか？」

物音に気付き、ナースが入ってきたが、次の瞬間「キャーッ！」と大きな悲鳴をあげた。

「ちよつと、誰か来てえ！」

最終話 死んでいく人たちへ

あの日も雨。白衣の列が一系乱れぬ動きで、一台の車を見送る。そう、小園の遺体が載せられた車。

「死ぬな。そんなことで亜美ちゃんも帰ってこないんだぞ。亜美ちゃんも、苦しみながらも必死で生きようとした。だから、君は死んだらなんかしちゃダメだ」

小園の言葉がこだまする。

10年前、亜美が死んだ日。

可愛かったピンクの頬は何色というのか。黄色に灰色を混ぜたような色で、体はというと、元気だったころの3倍も膨れて、むくんでいた。浮腫んで醜くなった妹の姿。

でも、声を聞くと、あの時の妹の姿がよみがえる。

「お兄ちゃ……亜美……」

死んでいく、ほんの数分前のことだった。今まで、喉が痛くて話すこともままならなかった妹が、珍しく声を出した。

「亜美！ 無理するな。喉、痛いんだろ」

「お兄……亜美……」

「何だ？ 亜美！」

「くやしい……お兄ちゃ」

全く自分では動かせない体。はあはあと苦しそうな息使い。

「お兄……亜美……お家に……」

「わかった。わかった。お兄ちゃんが連れて帰ってやる。大丈夫だ亜美」

「う……こわ……い……お母……ちゃ……」

段々、妹の息使いは荒くなり、少年の仲原にも異変に気がついた。ナースコールを何回も押し、ナースがバタバタ入ってくる。

「助けてやって！ 助けて！ 亜美、お母さん呼んでくる」

仲原は、母に連絡をとるために病室を飛び出した。無我夢中だった

た。

「血圧、測れません」

「ドクター呼んで」

「モニター！ 救急カート！」

病室内に、ナースの指示が行きかう。

「酸素、あげて！ アンビュー！ ドクターはまだ？ 家の人は？」

「心電図、フラットです」

「ちよつと、高津はまだ？」

「はい。呼んでるんですが」

「じゃ、小園先生呼んで！」

「は、はい」

「死んじゃダメよ、亜美ちゃん」

ゴボツという音をたてて、大きな血の塊を吐いた。

「ああ……」

ナース達は一瞬絶望のため息をもらした。

「吸痰！ 早く！」

「亜美……！」

戻ってきた少年の目に映ったのは、妹の死。

体に触れるのもためらわれる位、醜く変わり果てた姿。血の匂い。

「亜美……逝くなー」

少年の甲高い声が、病室に響いた。

「亜美ちゃん！」

小園が慌てて入ってきた。

「小園先生！ 亜美ちゃん心停止してます。心臓マッサージ続けま
すか？」

「もう、いいだろう。これ以上苦しむのは可哀想だ」

「でも……高津先生が……」

「いい！ やめろっ」

ツ……

モニターの波形が一直線になった。横には0（ゼロ）の数字。

それまでバタバタしていたナースの動きが止まった。皆、涙を浮かべている。

あまりにも幼すぎる命。壮絶な死。誰もその場を動く事が出来なかった。

「亜美、亜美」

仲原は妹の傍に近寄り、むくんだ手を握った。

今ではなぜ、そんな事をしようと思ったのか。思い出せない。あまりにもむごい妹の姿に動揺したのかもしれない。とっさの事だった。

病室の窓から飛び降りようとしている自分を、引っ張り、必死に訴えかけてくる小園医師の声で我に返った。

「死ぬな。そんなことで亜美ちゃんは帰ってこないんだぞ。亜美ちゃん、苦しみながらも必死で生きようとした。だから、君は死んだりなんかしちゃダメだ」

それから、どうしたのか記憶が無い。

今ここに立っているという事は、助かったのだ。

そこから先は、人伝えで聞いた。

「小園！ 貴様！ 何で救命処置をしないんだ」

後から来た高津は、小園を叱責した。

「まだ、若いんだぞ。救命して然るべき。何てことをしてくれたんだ。主治医の私が到着するまで何で待てなかったんだ」

周りのナースは怒りに震えた。

「先生が到着しないので、小園先生を呼ばせてもらいました！」

ベテランのナースが高津にそう言った。

「主治医は俺だぞ。しかも。主治医の許可なく、何てことしてくれただ」

そのうち、仲原の両親が慌てて、病室内に入ってきたが、病室内、遺体の横で言い争う姿は、異様であった。

「お言葉を返すようですが、私も彼女の主治医だったんです。この先、救命したところで、彼女の苦しむ時間が長引くだけだ……」

「私の治療方針に逆らうのか、君は？　もしかしたら、彼女には、この先の未来があつたかもしれない。苦しむか苦しまないかなんて誰にもわからない」

「しかし、彼女の状態を考えたら」

「助かるか助からないかわからないが、救命処置はするべきだ」

「……」

小園は黙った。彼女にとっての、この先の未来……。

手も足も動かなくなつて、寝たきりの彼女。移植が失敗だったとなると、滅多に病室にも来なかつた高津の言葉とは思えない。

彼女にどんな未来があるのか。苦しむ時間が増えるだけではないのか。

高津に移植の依頼をしなければ良かつた。

自分は幼い命を救えなかつた。

小園は怒りと罪悪感、後悔の入り混じつた感情を抑えることが出来なかつた。真面目すぎる彼に、亜美の死は厳しすぎた。

「それから、しばらく経つて、小園先生の死を知つたのは」

仲原は院長に言つた。

「私も、小園のことは可愛がつてたからな、この事はよく知つていゝる。小園君は一生懸命で、いい医者だつたのに。勿体無い。高津のようなエリートを見ると、正直へどが出る」

院長は椅子から立ち上がると、仲原の元へゆつくりと移動した。

「私の知つてゐる病院があつてね。遠いんだが」

仲原の肩に手を置くと、院長は続けた。

「医者というのは恐ろしい仕事だよ。なんせ命を扱う仕事だからね。君は、その恐ろしさも悲しさも知つてゐる。その上で、まだ医者を続けたいか？　私なんか、そろそろ退職したいものだが……ははは」「はい……私にはやるべき事があります。医者を続けられるなら、どこでもいく覚悟です」

「それでいい」
院長は大きく頷いた。

ザンザン降る雨は、仲原を上から責めてくるようだった。仲原はミサの元へ向かう。あえて、傘もささず。上から落ちてくる雨が、自分の業を洗い流してくれるようだ。

俺は自殺なんかしない。

亜美のように、苦しんでも生きる。

残された人間の痛みを知っている。

仲原は吹っ切れたように、走った。

ザーーーーー

ザーーーーー

彼の足音をかき消すように、雨は激しく降った。人はなぜ生まれてくるのか、なぜ、死ななくてはいけないのか。なぜだ。わからない事ばかりだ。

亜美はなぜ、苦しまなくてはいけなかったのか。

なぜ、恭子のように、自分で死を選ぶ人間がいるのか。

人は弱い。

ただ、それだけは言える。はつきりと。

そして、自分にとって大切な人。

タンタンタンタン。階段を駆け上り、インターホンを押す。

「はい……」

「ミサ、愛してる」

ドアが開き、頬を紅潮させたミサの顔がのぞく。

「せんせ……」

仲原はミサを抱き寄せ目を閉じた。

「一生、守る」

2人の影は永遠に、純粹に重なりあった。

ザーーーーー

雨の日。

これから思い出すのは、2人の始まり。止むことのない雨が2人を包みこんだ。

死んでいく人たちへ

怖がらなくていい

傍にいる

君が君らしいままで、天国へいけるように
願っている

（完）

最終話 死んでいく人たちへ（後書き）

今まで、読んでくださった方、本当にありがとうございました。そして、評価、感想を寄せてくださった方に感謝します。コメントの一言一言が、書く原動力になってました。

そして、ようやく完結することができ感無量です！
改めて、書くことが好きなんだなあ、と思います。

今度は何書こうかな~~~~！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126d/>

死んでいく人たちへ

2010年10月8日14時29分発行